
Routes 1 -リンカ-

ひまうさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Routes 1 - リンカ -

【コード】

N0682I

【作者名】

ひまじり

【あらすじ】

よくある王子が姫を救う話。 変人注意（注意してどうにかなる話ではありませんが）

1# よくある導入劇

緑の生い茂る小高い丘には、人ならざる物が棲むという。でも噂はあくまで噂と、ある旅人が一度だけ近づいてみた。

実際、そこはただの古い城だったという。

青空に溶けそうな、存在さえも薄れそうな石造りの城は、本当にいわゆるよくある古城だった。

風が吹くと更々と崩れた石の欠片が流れ、中は埃だらけの蜘蛛の巣だらけ。

しかし、刃物で傷つけた痛々しい傷が石壁に浮かび、誰もいないのに誰かのいる気配がして、不気味なことこの上ない。

何よりこの城の空気が不快で、旅人は城を離れた。

城と町との間に深い緑の森があるゆえに、古城はその荘厳さと不気味さを引き立たせている。

近隣の町々の人はそこを恐怖し、幽霊城と呼んでいた。

が、これはそういう話ではないし、今はそういう場合ではない。なにしろ、その古城近くに自分はいるのだから。

「城に兵が出入りするようになったのは、何時からなんですか？」

ぴりぴりとした緊張を逆なでする、のんびりとした問い掛けに俺

は頭を抱えた。

問い掛けてきたのは軽装だが、明らかに貴族な雰囲気を感じそうともしない、声同様にのんびりとした空気を纏う男だ。

陽光に透ける細い金の髪は長く、一本に編み込まれているし、細められた瞳の奥はペリドット石の瞬きを柔らかく収めている。

両の耳には深みのある青と緑のピアスが光を飛ばしているし、悔しいことに両方ともが白すぎる彼の肌によく馴染んでいる。

しかもその上、上等のくすんだ緑のマントを羽織り、隙間からは二藍のくすんだ青緑が覗いている。

マントの下の体格はおよそ頼りない細さ。

「昨日の夜言っただろ？」

大体一カ月前からだよ」

薄汚れたチャコールのキャスケット帽の下から男の様子を見て、俺はまた深くため息をつく。

身分の違いとかそういう問題ととっていいのかわからないが、俺の着ているのは着古したぼろのシャツと鉤裂きだらけの灰色のオーバールだ。

しかも全部が全部、貰い物。

他人と自分を比べるなんて愚かなことと知りつつも、こののんびりとした男を相手にすると別だ。

何も考えずに、ただのうとうと暮らしてきたようなヤツが、俺より上等の物を着ていると思うと、理不尽に腹が立つ。

「で、どうやって入りましたよ？」

予想されていたとはいえ、嫌になる。

これで金づるじゃなかったら、とつくに有り金騙し取って放り出しているところだ。

「まず、あんたの案を聞いておこうか」

ゆっくりと振りかえった先で、男は嬉しそうに頷いた。

嫌な予感も、もっと前からしていたんだけどな。

男の名は、ディルフアウスト・ラギラギウス・クラスター。

西の大国の王子で、実は今のところの高額賞金首である。

存在そのものが金づるでなければ、誰がこんな男と行動を共にするものか。

話を持ってきたのは、王子の方からだった。

古城と森を挟んで少ししたところに、あまり大きくない宿場町がある。

必ずしも滞在しなければならないというほどの重要ポイントではないが、風がよく通る、人も町もすっきりとした良い場所だ。

あまり大きくないので、宿屋も酒場も一続きで一軒しかない。そこで俺は約一年半、世話になっている。

もともと短気は自覚しているが、その日はことさらに機嫌が悪かった。

絡まれるのも日常茶飯事だったけど、その日は特別。

剣を抜いて切りかかってくる剣術士なんて、そうはいない。

しかもどこかの紋章を引っさげて。

傭兵の中には剣術士が多いとはよく聞くが、一国に仕える者となるとどうしても質が落ちる。

下っ端の兵士となると剣術見習いと云って趣味程度の腕しか持っていないし、そのまま仕える物が大半なので一応の形として剣術士と呼ばれはするが、大した腕ではない。

下手をすると傭兵の方が強かったりする。

剣で身を立て続ける者はより優れた技を目指して国を離れてしまおうし、現在の所、本当の剣術使いというのは一国に一、二人しかいないと囁かれている。

ランクから云うと剣術見習いが一番弱く、剣術使いが強いということになり、剣術士はその中間だ。

一般にそう広まってはいても、子供なら彼等は楽勝だと踏んで絡んできたのだろう。

が、世の中そう上手くはいかない。

剣を使うだけが戦いじゃないし、喧嘩は頭と拳でするもんだ。

そういうのが拳闘士と呼ばれる者達で、接近戦を得手とする。

身一つで始められるので誰もが一度はかじるが、剣に目覚める者も少なくない。

そんなワケで、あまり本当に拳闘士と呼ばれる者は少ないのだが、本物は剣術使いにも引けを取らない技と攻撃力を誇る。

俺が持っているのはそんな技なわけで、当然、俺の圧勝だった。

しかし、あまりの弱さに中途半端に力が余ってしょうがない。

どこかに発散させる場はないかと食堂で食べながら考えていた。

そこに、あらわれたのがこの王子だった。

「あの、相席いいですか？」

夕食には早過ぎる時間にがらんとした食堂で、そう切りだしてきた。

紳士的な態度というよりも、警戒心皆無な笑顔で胡散臭い男だ。

金持ちの青年貴族が物見遊山でもしているかのような格好で、金髪碧眼の美丈夫。

その上、どこぞの王子の彫刻張りの容姿ときては、この小さな宿場町ではかなりの人目を引く。

町に入った時にはもう噂が駆けぬけ、当然俺も聞いてはいた。

まさか、本人が話しかけてくるとは思わなかったけれど。

「いいぜ。

あんたがメシ奢ってくれんならな？」

挑戦的な瞳で意識して睨みつけ、どうせなら他の空いてるテーブルを使えと暗に示してやる。

普通なら、俺みたいなお子供にそんなことを言われて、大人しく相席するヤツなんかいない。

俺はどう見ても十三歳ぐらいだし、実際に十三歳だ。

王子もどう若く見積もっても五つは上だろう。

プライドってヤツが邪魔をして、喧嘩にはならないはずだし。

このもって生まれた計算高さのおかげで生き延びているから、狂いはない。

そういった自信を王子は見事に覆した。

「交渉成立、ですな」

につこりと微笑んで俺の前に座り、あっけに取られている間にウエイトレスを呼びつけて注文しだす。

すでに顔馴染のウエイトレスがかすかに頬を染める姿に驚いて、掬ったスープが逃げ出していることも気がつかずに俺はスプーンを口に運ぶ。

「貴方は、何にしますか？」

問い掛けながら振り向いた王子は余裕の笑みをたたえ、俺はどんな顔をしていいやらわからなくて、スプーンを口に咥えたまま男を観察した。

どこかで見た顔かと首をひねる。

「メニュー上から下まで全部」

「え！？」

リンカ、そんなに食ったら腹壊すわよっ」

ウエイトレスが慌てていう様子に、俺は冗談だと笑って応える。目の前の男は俺がいつていることを理解しているのかいないのか、それともそれだけ財布に余裕があるのか、まったく表情を変えずに笑んだままだ。

「ま、いつもの頼むわ」

「あいよ〜」

「じゃ、おにーさん、またね」

へらへらとした男に頬を赤らめて小さく手を振る彼女に、相手も変わらない笑顔のまま手を振りかえず。

(なにをしているんだ、なにを)

彼女が厨房に走りこんでいる姿を視線で追いながら、俺はスープをまたひと掬い。

さっきのウエイトレスの様子からして、たしかに格好良いのだから。

俺にはさっぱりわからないが。

「リンカさんというんですか、あなた」

この笑顔がなんだかどうしようもなく胡散臭い。

「そうだけど、何？」

「いいええ」

この変わらない笑顔がなにより嘘臭い。

頭のどこかで信用するなと警告されている気がする。

音をたてて、スープを飲み干したところで料理が運ばれてくる。

気になることは多いけれど、せっかくのおごりだ。

美味しく食べなきゃ罰が当たる。

「この町に他にリンカって名前の人は？」

「俺だけだよ」

手と口を忙しく動かす俺と大差ないスピードで、目の前の料理を片付ける男。

その仕草の端々に気品のような物を感じて、俺はまた心の中で毒を吐き出す。

いやみだったらねえや。

たった一度のその質問の後、料理がほとんど片付くまで、男は無言で食べ続けた。

無言でかつ優雅な仕草に、周囲からため息が聞こえてくる。そんなにいイ男かねえ。

こんな弱そうなのが。

「あんだ、俺に用事なんか？」

「……たぶん」

なんだ、その苦笑は。

「貴方の腕を見込んで、頼みがあります」

まだ食事中の俺の前で、食後のホットドリンクを優雅に傾ける。

やっぱり、嫌なヤツだ。

「俺の腕？」

あんだ、見たことあったか？」

「直接ではないですけどね」

この男がここに来たのは今日。

で、一番最近俺が喧嘩した相手といえば、あの剣術使いの関係者か。

「依頼を受けるかは、先に話を聞いてから決めてください」

また、ふわりと微笑む。

ほらな、やっぱり信用ならない。

さつきから同じ愛想笑いばかりで、本心が見えない。

初対面なのだから仕方がないと思っても、拭いきれない予感を振り払い、口元だけ笑んで返す。

「いやだね」

ほんのわずかに男の表情が固まるのを横目で見ながら、暖かなスープの中の肉を掬取る。

「名前も名乗らんヤツの話なんか、聞く気しねえよ」

しかし、依頼者は大切に、だ。

どうみても大金をもってそうな餌を他に回してやる気はない。

男は困ったような顔であたりを見まわす。

つられて食堂を見回すと、いつのまにやら誰もいないが、そこら中から気配はしている。

殺気はないのでその点の問題は不用のようだが、好奇の視線を感じる。

噂の渦中の人物がいるせいとはいえ、面白くはない。

「これは、失礼しました」

小さく何か呟くのがわかったけれど、男はそれに対して何の説明もいれずに続けた。

「僕はデイルファウスト・クラスターといいます。

デイルと呼んでくださいね」

人の気配はあるが、騒ぐ声は聞こえない。
一般に魔法というやつである。

正式には術式制御者と云い、簡易・中等・高等の三段階に分けられる。

これは生まれた時から持っている魔力というやつの容量がないとなれない特殊な技能だ。

簡易術式制御者の俗名は見習い魔法士で、けっこうどこにでもいたりする。

中等術式制御者は魔法士と呼ばれ、大体の術式をこなすことは出来るが、魔力を引き出すために術式がものすごく長くなりやすい。

そして、高等術式制御者。

これは魔法使いと呼ばれ、大陸に十人いるかいないかといわれるぐらい希少だ。

詠唱を簡略化しても魔法士と同等の威力が出るというし、新種の術式を開発するのも彼らだ。

もしかすると、この男、魔法士なのかもしれないと、俺は考えかける。

「俺はリンク。

ただのリンクだ」

名乗りは儀式のような物。

名前があつて、名前を呼ぶことで、初めてそこに在るということになる。

名前に聞き覚えがあつて、俺は仰け反った椅子から落ちそうになった。

ディルファウスト・クラスターなんて、そうそう多い名前じゃないし。

そう頻繁に聞く名前でもない。

第一、こんな小さな町なんかで聞く名前じゃない。

「あんだ……」

「名乗りましたから、聞いてくれますよね？」

勝手に話し出す姿を呆然と聞き流しながら、思い出したのは。

一枚の紙切れ。

高額 of 賞金首は一般に出回らない。

というのも、そういう物はすべてある団体が引き取ってしまうからだ。

裏の世界では暗黙の了解となっているそれを、俺は属さずして知れる時があった。

その一枚に彼の似顔絵があった。

「あの〜聞いてますか？」

「聞いている聞いている。」

続けてくれ」

高額 of 割に誰もが手を出すのを躊躇する男が、こいつだ。

西の大国クラスターの第一王位継承権を持つ王子。

噂に踊らされるのが人の常とはいえ、実際にそのとおりであることは少ない。

（まさかな）

心の中で疑惑を打ち消して、俺はドアの方をちらりと見る。

そこで丁度、新たな料理が鼻に良い香りを運んでくる。俺の前には肉料理で、王子の前には暖かなカップ一つ。

「ホントに聞いてますか？」

「聞いている聞いてるって」

何はともあれと嬉々として野兎の土鍋蒸しを口に入れる。

「要約するとだな、幽霊城に婚約者のお姫さんがとっつかまってるから助けるってことだろ。」

本当の話か、それ？」

左手の肉用ナイフを振りながら疑惑の目で聞き返すと、王子は力ツプを持って真剣に頷き返してくる。

こうみると噂の真偽の程は測れない。

数多の刺客を返り討ちに行っているとか、刺客のアジトに乗り込んで壊滅させたとか、捕まえた刺客で魔法実験を行っているとか、実は大陸でも有数の魔法使いだとか。

恐ろしげな物から女子供が胸をときめかせそうなエピソードまであるから、まさにピンキリ。

「それを聞いてどうすればいいんだ、俺は？」

今、俺に言えるのはこいつがとても世間知らずで騙しやすそうだということくらいだ。

「それですね、腕の立つリンカさんに手伝っていただきたいんです。」

お願いできませんか？」

顔は極上だが中身は最低、と勝手にランクを付けて笑んで返す。

「いいぜ」

「わあ、ありがとうございます〜」

張りついた笑顔をとたんに輝かせる王子に俺は畳み掛ける。

「なに、ただとはいわない。

まず、前金で五千オールな」

このリンカの腕を安くみて貰われても困る。

そこらの国に仕える剣術使いに簡単に負けてやるような人間じゃない。

しかし、この二階建て地下付きの屋敷一つ買えそうな金額に、王子は困ったようにするだけだ。

「え〜、今、ちょっと持ち合わせが……」

これだから、金持ちは。

だがしかし、ここでこの客を逃がすと金づるが逃げる。

「じゃ三千」

しかたない。

地下は諦めるか。

「だから持ち合わせが……」

こんぐらいもつとけよ、王子なんだから。
という言葉を寸での所で飲みこむ。

正体を俺が知っていると知ったら、仕事が終わった後の引渡しが面倒だ。

「二九八〇」

「二千」

「二八五〇」

「二五〇〇オールだったら、なんとかかなりそうなんですが」

交渉の途中で思い出したように、手元の指輪を一つ引き抜く王子を、つい呆気にと取られて見てしまった。

動作が必要以上に洗練されているなんてことは、この際関係ない。

「これで代用、できますよね？」

ただの宝石じゃない。

かなりの大粒のラルク石がはめられた指輪だ。

ラルク石は一見、ガラスと見間違っことも少なくない。

しかし、一筋の光が虹色に分裂し反射する様は、まさに輝石中の輝石。

粒が大きいほど、その価値は上がり、場合によっては数億単位で取引も可能である。

王子の出した指輪は市場価格なら二五〇〇ぐらいだが、オークションにかければ二万オールは固い。

「いや〜おにーさん話わかるねえ」

交渉成立して、そのラルク石のはまる指輪を差し出したまま、王子はあの笑顔のまま続ける。

「もちろんですよ、危険手当込ですからね」

噂、すこしは信用した方がいいだろうか。

その後、王子はカップを持って、椅子に座ったままで眠るという器用な芸当と、魔法士としての実力の片鱗を見せたわけだが、それについては後で語ろうか。

上から被せるように王子のマントが視界を塞ぐ。

理由は俺の面が城の兵士に割れている可能性が高いからだ。

「汚れるけど、いいのか？」

「汚れたら洗えばいいんですよ」

なんのことはないというが、普通の王子がそんなこと考えるだろうか。

不信に見上げる俺を優しい眼差しが見下ろす。

背筋に何故か冷たいものが流れる。

嫌な予感がする。

「やっぱり、他の方法にしねえ？」

「だってリンカさんの方法って、あの城壁を越えるんでしょ？
そっちの方が目立つし、余計な体力じゃないですか」

だから、なんで笑ってるんだ。

この王子は。

後ずさりかけて、石につまずいた身体を伸びてきた腕が引き寄せ
て支える。

見た目以上の力強さに驚き、反応が遅れて、俺は王子の腕の中に
いた。

「気をつけないと危ないですよ。

こんな森の中で怪我したら……」

近くで聞こえる声に、恐怖する。

王子にじゃない、自分にだ。

「怪我なんかするかよ。

こっちは本職。

日がな一日遊んでる貴族様とは違って、丈夫なんだ」

なんとか振り払って、森の中を先に立って進む。

木陰からはかすかに城壁の石色が見えるけれど、目指しているの
は裏口だからまだゆっくりと先に進む。

ザカザカ歩いても気がつく見張り自体がないんで楽だが、大丈
夫なのか、この城は。

「貴族もそれなりに大変だと思いますよ」

「王族も？」

「王族も」

すんなりと帰ってくる返事が苛立たしい。

早く見えねえかなあ、裏口。

「俺よりも？」

「それはわかりませんよ。」
僕はリンカさんじゃありませんからね。」

マントにつんのめって、転びそうになるのを後ろから何度も支えられる。

嫌みなクスクス笑いが耳につく。

「僕のマントはリンカさんには大きすぎですね。」

身長差を考えるとそれも仕方ないとは思えるが、でも理不尽にむかついてくる。

「あ、キズ……。」

「さわんな。」

細い小枝が跳ねた時に掠った部分に、触れて来る手を跳ね除ける。からかい気味の視線がうるさい。

「なあ……。」

呼び捨てでかまわないうって、俺、言わなかったか？」

さつきからそのせいもあって、かなり居心地が悪い。

その原因の半分は、騙すつもりでいる罪悪感からかもしれない。

「言いましたっけ？」

王子は白々しく返して来た。

いや、この顔は白々しくというよりも、本当に聞いていないってところか。

どちらか判別しがたい笑顔がすべてを隠している様子に、俺はこっそりと舌打ちした。

とにかくこの仕事を早く終わらせて、引き渡すのが先決だ。

「あゝいましたね」

また今度は体ごと引き寄せられて、軽々と抱き上げられた。

マントにすっかり隠されてはいるが、いわゆるお姫様抱っこというやつで、ものすごく恥かしい。

でも、これが一応の打ち合わせだ。

「失敗するほうに百オール」

「うわゝ最初からそういうことをいいますか」

王子が小さく呟く音律で、背中がゾワゾワする。

でも、近くで聞くと何を言っているのかがわかる。

「……風の流転 逆巻きの時計 時間の花よ 彼の混乱を……」

あの時と同じに、王子の表情が消える。

風と光をはらんだ髪がかすかに浮かぶ。

その状態で門に近づくと、無言で兵士が道を開けた。

殺気も何もなく、なんの警戒もなく、貴人を迎えるように緊張した静けさがある。

もちろん、王子も王族の威厳を纏っていて、とてもさつきまでの情けない貴族の姿がない。

比べなくとも一目で王族と納得できる様子に、俺は舌打ちしたい

衝動を堪える。

「どうもー」

危ぶむ耳に、実に楽しげな王子の声が届いた。

ここはすでに城内だ。

だが、城の兵士が、俺たちをまったく危ぶまない。

「あの失礼ですが、そちらは……」

「僕の連れだよ」

ひょっこりと近づいてきた兵士の一人がおそろおそろ聞いてくる様子に、俺は体を固く強張らせた。

「でも、そういう報告は……」

「道で拾ったんだ。」

具合が悪いらしくてね、医務室をお借り出来るかい？」

「え、でも……」

「君は、人の命と君への命令とどちらが正しいと思うの」

驚くほどに静かな声だった。

強い強制力が働いているのだと、感じる。

魔法的なのに、魔法でなく、別の力に縛られる。

そして、兵士もそれは同じだったらしく、緊張が伝わってくる。

緊張を破ったのは、緩い王子の微笑みだった。

「いえ、僕は別にかまわないんだけどね。」

このご婦人がもし、今医者に見てもらえなかったせいで死んでしまった場合、どうなるでしょうね。

僕は別に恨みませんが、このご婦人はどうでしょうね。人の思いというものは、時々びっくりするようなことが起きますから。

たとえば、ミレイユ公の屋敷

「わ、わかりましたっ医務室はその角を曲がってすぐですから、急いでください！」

悲鳴のように叫んで、兵士は行ってしまった。

王子は俺を抱えたまま、静かに歩き出す。

「誰が、ご婦人だって？」

心配がなにもなくなってから、低く唸る。

城の内部は平和そのもので、混乱もなにも起きていないように思える。

噂のような嫌な感じは受けなし、鳥のさえずり、木の葉のさざめき、午後の穏やかな空気に包まれている。

「とりあえず、医務室に知人がいるんで、先に行きましようか？」

「とりあえず、こんな元気なご婦人はいねえと……なんだって？」

今、医務室に知人がいるとか言いやがらなかったか。

この王子は。

さつきから変だとは思っていたが、もしかして、こいつの知り合いの城なのか。

面が割れていて、どうしてすんなり入れるんだ。

疑問が一気に押し寄せて、本当に気分が悪くなってくる前にひとつだけ恐る恐る口にする。

「あんだ、ここにきたことあんのか？」

返って来たのは、やはりのんびりとした笑い声だった。

「ないですけど〜でもどこも結構似たような造りですし。

第一、こんな小さな家で迷いませんよ」

城でなく、家。

このレベルで家なのかよと、こっそり歎息した。

あーもう早くこの仕事終わらせたい。

来たことがないといいつつも、王子はザカザカ勝手知ったる庭のごとく、戸惑いもせずに進んで行く。

揺られているのはすごく心地好くて、俺はそれだけですごく眠くなってきたてしまう。

夜の闇で俺はあまり眠れないから、時たま昼間に急に眠くなってくることもある。

周期的というわけでも周期的でないともいいきれないし、期間を考えたこともない。

ただ唐突に訪れる睡魔に、俺はいつも無駄に足掻く。開閉する瞼を笑う声を通り過ぎる。

「眠いんですか？」

「眠くなんかねえよ……」

本当に、早くこの仕事を終わらせないと。

「もう少しで着きますからね」

耳に心地好い、優しいささやきだった。

宿屋の女将とは違う、ひどく落ちつく声。

男の低い湖畔の響き。

「……あなた、魔法使いか」

言葉の後に続いた響きが、何故か急に意識を覚醒させる。

魔法的な響きは優しく甘いけれど、いつも覚醒の引金となる。

物心ついた時から持っている、体質だ。

「そうですね」

振動が止まった。

見下ろす顔は、柔らかな物腰の平和ボケしてそんな金髪碧眼の青年。
年。

その顔が少し驚くように歪む。

何をしようとしていた、この王子は。

さっきの呪文は、何の呪文だ。

なんのために俺を、眠らせようとしていた。

「降ろせ」

低く唸る声が別の言葉に遮られる。

「 相似の楔 虚偽の残像 対なす形よ 彼の道を開け 」

朗々たる言葉が響いてくるその後で、鍵の開く音がした。

これで今日彼が魔法を使うのは何回目だ。

そんなに使っているのにまったく息も乱れず、少しも疲れた様子がない。

ただの魔法士ならば、多少息切れてもおかしくないはずなのに。そんなことが急に恐ろしくなって、俺はもう一度言った。

「降ろせ」

声に混じる怯えが悟られないといいんだけど。

返ってくるのは先ほどからまったく変わらない、のんびりとした声だ。

「おや、いないみたいですな」

残念といたげに、口を尖らせて。

なんなのだ、この王子は。

それとも貴族ってのはみんなこんななのか。

「降ろせって」

床ではなく、少し柔らかいものの上にそっと降ろされる。

軽いスプリングの効いた真っ白なベッドの上だと気がついた時、俺はとっさに手を伸ばしていた。

掴みかけた王子の腕から手をひいて、さっと窓に飛び乗る。

なに、しようとしてんだ、俺。

「じゃ、俺はお姫さん探してくるから」

返事も聞かずに庭の木々に飛びこんだ。

あの王子は危険だと、警告が聞こえる。

何よりも王子の目の届かない場所に行ってしまったかった。

そして、俺は何をしようとしていたんだ。

何も出来ない子供のようになり、あの王子に縋りついて、何を求める気だったのか。

「捕われの姫君は塔の中へ行ってな」

動揺を押し隠すように、俺は空を仰いだ。

2# よくある救出劇

俺は大した苦もなく、塔を探し当てた。

元来お姫様が捕われるのは、外階段も何もない塔の最上階と決ま
っているし、実際そういうものは一つくらいはあるもんだ。

この城の塔は時計塔のようなものらしく、遠くから見ると時計の
下にならんとした空洞があった。

大きさ的には鐘を二つ三つ置くと丁度よさそう。

「あれー？」

塔に潜入するのは簡単だった。

入口にいる兵士はたった一人で、不意打ちで一発だったし。

螺旋階段は長かったけど、誰もいないし。

そろそろ終りかな、というぐらいの辺りで部屋の前にわかりやす
く兵士が立っててくれるし。

一撃だったし。

忍びこんだこちらが心配しなくなるぐらい弱すぎるよ、この兵
士。

「おかしいな。

「この部屋じゃないのか？」

石壁の塔は古い物と新しい物の匂いがあって、新しい物はこの部
屋に大体あるようだ。

石壁は少し崩れている箇所もあるが、概ね補修も施されているし、
内部の調度品はシンプルですっきりとしている。

床にはふんわりとしたやわらかな薄い緑の絨毯。

中央に飾られたテーブルには庭にあるのと同じ、可憐な花が生きている。

大きく切り取られた窓には淡い桃色のカーテンがはためき、そのすぐそばに天蓋つきのベッドがある。

女の子仕様の雰囲気の良い部屋だが、姫の姿はどこにもなかった。

ベッドシートが切り裂かれた様子も誰かが侵入したような痕跡もないし、かといって争った痕跡もない。

抜け出すのに複雑な場所でもないし、見張りも少ないから楽に抜け出せそうだ。

だが、見張りは倒したけれど、きちんと配置されていたようだし、他に抜け出す場所といたら窓ぐらいしかない。

だが、か弱い姫がこんな高い塔の窓から抜け出さるうか。

それに、姫君ってのは大人しく王子の助けを待ってるもんだし。

「きゃ……っ」

青空を背に部屋を出ようとしたところで、外から可愛い女の悲鳴と小石のカララと落ちる音が聞こえる。

カーテンのはためく窓から見えるのは、広がる大空と少し西に位置をずらした太陽ばかりなり。

なんの障害もなくて、清々しいばかりの景色は最高の一言に尽きる。

が。

「なんで、そんなところにいるんだよっ？」

かけよった窓から見たのは軽く波打つ金の髪。
窓から僅かに離れた壁の隙間に辛うじて引っ掛けられた、細く小
さな白い手。

赤いふわりと風を吸いこむドレスをなびかせ、少女は壁に張り付
いていた。

視線は真っ直ぐ足元に注がれて、固まっている。

これが例の姫君かと思うと、頭を抱えなくなった。

「もちろん、逃げるために決まってるでしょっ」

声が震えている。

このままでは確実に足を踏み外して落ちる。

見たところ命綱はないし、長いドレスのままだし、急に思い立っ
たにしては無鉄砲すぎる。

「どうして窓からなんだよ。」

別に廊下から素直に逃げてもいいだろうっ？」

「それじゃ、意味がないの！」

「死ぬ気かよ」

「まさかっ」

吐き捨てるような響きが返ってくる。

元気だけは有り余っているようだから、まだ少しは持つだろうか。

「もう少し待ってりゃ、王子が迎えにくるのに」

室内に目を走らせて、手持ちの縄を括りつける場所を探る。
二人分の体重を支えるとなるとそれなりに丈夫でない。
……ベッド、動かないよな。

「そうして一ヶ月も立つのよ？
これ以上待っていられますか！」

ベッドの足と自分の腰に縄を括りつけて、窓の外へ出る。
振り向いた姫の空色の瞳が見開かれる。

王子と同じ年ぐらいの姫からすればしかたないか、と少し苦笑が
もれた。

風が背中を押す。

「とりあえず、中に戻るぞ。
こっちに来い」

差し伸べた手を姫はおびえて首を振る。

「絶対、助けてやるから。
今は信用してくれ」

強く言っても首を振るばかりだ。
しかたなく、こちらから近寄って手を掴む。

「ダメ！
……きやあっ！」

叫ぶより早く、姫の足元が崩れた。

間一髪、手だけで繋ぎとめているけど、流石に一人分を支えるにはまだ力が足りない。

引き上げるほどの腕力がない。

その上、部屋の中に縛りつけたロープが、イヤな予感を更に増してくる。

地面はものすごく遠いし、落ちたら間違いなく終りだろう。

「いやあっ！」

「騒ぐなよっ、落ちるから」

捕まえている綱が動いていることにすぐに気がついた。

窓で擦れた部分が、軽い欠片となって風に飛ばされる。

「……………つく……………誰つかああああああつ、来てッ、重つ……………い」

「失礼ね、これでも気を使ってるのよ！

それより、私はいいから手を離してっ」

「冗談言っなっ」

この高さから落ちたら助からないのはわかってはいるが、いくらなんでもこのままじゃ二人ともが助かる可能性はゼロだ。

共倒れにならないうちに引き上げたいが、今、動いたら支えのベツドも動きそつだ。

どつしよつ。

どつすれば、助けられる。

「リンカ、大丈夫か？」

救いの手は部屋の中ではなく、リンカの背後から聞こえた。

今までの能天気さの欠片もない、真摯な王子の声が天の助けのよう
に思える。

「……魔法、かよ」

ずるいなと思いつつも、やはり助かる喜びの方が強い。

「デイル、遅いわよっ」

二人を抱えて搭に飛びこんでから、王子は姫を柔らかな絨毯に突
き落とした。

俺は王子の腕にしっかりと抱えられたまま、啞然とその様子に目
を見張る。

この二人、婚約していたんじゃないか。

「痛いじゃないのよっ、もう」

講義の声をあげてはいるけれど、姫の方も慣れている感がある。
いや、それよりも今はこれだ。
どづいづことだ。

「無事で良かった……っ」

王子に抱きすくめられたのは俺の方で、真剣に心配されているの
も……俺？

「お、おい。
姫さんはあつちだろ」

姫が強く自分のドレスの埃を払う音が聞こえる。

「デイル、あたしの心配はしてくれないの？」

呆れかえった姫の声は、まだかすかに震えている。
返す王子の言葉も素っ気無い。

「姫が無事なのは見てわかります。
貴方は人の二、三十倍は丈夫ですし」

からかいの言葉も今までのイヤな甘さが消えているし、どうしたんだこの王子は。

そして、どうして俺はこいつの腕から抜けられないんだ。

「怪我はないですか？」

「あんたが城に魔法をかけなきゃ無傷だったわよ」

「姫には聞いてない」

突き放した気安い言葉は、やはり姫に向かって放たれている。

「俺は別に……ぐえっ」

腹を圧迫され感覚で、命綱をつけていたことを思い出す。
でも、今引っ張っているのは、一人しかいないだろう。
この場合。

「いつまで、そーしてるつもりよー!」

苛立った声で、綱を引いているのは姫だ。
て、あの、腹が苦しいんですが。

「姫、リンカを苛めるんですか？」

「どっちが！」

何でもいいから、離してくれ。

王子も姫も。

制するのはやはり、王子の方だった。

「姫」

静かで威厳のある声音に、綱が緩む。

俺は更に強く抱きすくめられる。

「動かないで。」

今、縄を解きますから」

耳元の小さな囁きに俺は大人しくして、解かれるのを待つ。

一秒。

二秒。

三秒。

三〇秒ぐらいすぎても離されない。

「おい、まだかよ?」

一分すぎてもまだだ。

余程の不器用じゃなきゃ、何か理由があつてこうされているということがあるか。

「姫、婚約は解消しましょう。」

僕は、見つけてしまいましたから」

腕が緩んで、王子が目線を合わせて額を小突く。

深く透明な緑の深淵に、不信な顔の少年が 俺が映る。

「それ?」

「可愛いでしょう?」

それって、俺のことか。

可愛い可愛いと、髪を撫でられる。

大きい優しい手がゴワゴワの髪を梳き、ゆったりと微笑む。

「……そーゆー趣味だったの」

「え?」

「男の子でしょ、それ」

王子の笑顔が凍りついて、それから瀬木を切ったように笑い出す。

この、反応は、まさか。

一歩引きかけた腕を掴んで引き寄せられる。

真っ直ぐに合わされる瞳は今まで見たこともない優しさと何かに満ちている。

「リンカは女の子ですよ、姫」

ねっ、と同意を求められる前に、俺は低く落した身体から正拳を王子の鳩尾に叩きこんで、姫の背後に急いで逃げた。

王子は腹を抑えて、身体を二つに折り曲げながらも俺に笑いかける。

「こんの猫かぶり野郎っ、いつから気づいていやがったっ？」

よく見るととくに縄は解かれていたようで、ベッドから王子の足元に素のまま落ちている。

どこからどう見ても少年にしか見えないこの姿で見破られたのは二人目だ。

誰が見てもどこから見ても、少年にしか見えないはずなのに。

姫も気がついていなかったはずなのに。

振りかえった目が疑問符でいっぱいになっているのがわかる。

「リンカさんだったわね。」

失礼」

この姫も命綱なしでここから逃げようとする辺りで普通でない俺は気がつくべきだったのかもしれない。

白く細い手は荒れもなく、一瞬見惚れるほど滑らかで美しい。

自分とは大違いの女性の手。

働かない、手。

それが、ぺたりと胸に当てられ、次いでさわさわと撫でられる。

「うわぁうつつつ、何しやがる　　っ！」

咄嗟に壁の端に張りついて逃げる。

姫ッて、姫君ッて、そーゆーもんなのかっ？

目の前で、姫は俺と自分の手を交互に見て、小さく呟いている。
俺の胸の存在を確かめていたってのか。

「あんだ、出てて」

苦悶の表情の王子を無理やり起こして、姫はドアから追い出す。
姫ッて、姫ッて……。

王子を追い出した後はカーテンも窓もきっちり閉めて、備え付けられた樹皮色の衣装棚を開ける嬉々とした姫君を、俺は為すすべもなく固まって見ていた。

何が何なのか、一体どういうことなのか。

説明を求めるのも恐ろしい気がするけれど、聞かなければもっと恐ろしいことが起きそうだ。

声をかけようと差し出した手は、姫の満面の笑顔を前に敗北を悟った。

3 #よくある仮装劇(前書き)

1111から1111と王子目線です。

3 #よくある仮装劇

ドアに背を預け、大きく深呼吸して自分を落ちつける。
リンカの拳は僅かにずらせたものの、ほぼ正確に狙われていたの
でかなり苦しい。

あの強さがこの世界で生き抜いてきた証なのであろう。

両眼を閉じて、入る前に見据えたこの城を思い浮かべる。

「 銀の連鎖 金の砂塵 掛け違えた楔よ 彼の在るべき姿へ戻
れ 」

息をするより自然に魔力が放たれる。

これで、城にかけた魔法は解けたはずだ。

ズルズルとその場に座りこんで、微笑む。

さっきのリンカの顔は見物だった、と。

大きな瞳が最大限に見開かれ、本当に驚きだけがそこにあった。

医務室で別れる前の継るような瞳と合わせて思い返し、喉の奥を
鳴らして笑う。

リンカと別れた後、自分は窓から出て行ったリンカが見たのと
同じ空を仰いで、人の悪い笑みを浮かべていた。

それまでリンカに見せていたのはまったく違つ、ことが上手く
思い通りに運んだと確信している策略家の顔だ。

そんな自分が嫌いではない。

残像のように伸ばされた腕を思い出し、その笑顔が自分でも柔らかくなるのがわかる。

「別に大丈夫なんだけどなあ、本当に。
ねえシーちゃん？」

そつと開いた医務室のドアに向かっての問いかけは、丁度入ってきた二人に向けたものだ。

先頭に立っていたシャルダン・コゼットは露骨に嫌な顔をしているんだろうなと思って振りかえると、思ったとおりの表情をしている。

片耳を白い布で押さえて。

「その呼び方はやめろ」

シャルダンは真っ直ぐな夕焼け色の細い髪をすっきりと短めに切り、緑色の服を着ている。

瞳の色は濃い目の土色で、どこか子犬のようなイメージが付きまとう。

彼の後ろにいつもどおり、影のように控えていたのは、黒い髪黒い目で鉄色の服を着た有能な執事カークだ。

まさに影と言って支障がないくらいに空気に溶けこんでいた。

「怪我したの？」

「貴様が城全体に魔法なんかかけるからだろ！」

あいててて」

シャルダンはこの城の現在の城主である。

主人の手を外して、消毒をするカークの手際は良い。

そして、話しているシャルダンの耳朵の傷は丁度、王子の緑のピアスと同じ左耳だ。

右耳はやはり青いピアスが収まっている。

割れたピアスはマラカイト石で出来ており、持ち主に危機が及ぶと割れる石だった。

王子が魔法をかけた時に、城内にいたシャルダンのピアスが割れたのである。

かけた魔法は時間に関する魔法。

しかもオリジナル。

「姫を取り戻しに来られたのですか？」

痛がる主人をまったく気にせず、手当てをしながらカークが問いかけてくる。

傍目から見て、主従関係に見えないあたりがおもしろい。

どちらかというと、親子とか兄弟に近そうだ。

「うん、そう。」

返して「

微笑ましく眺めるこの光景は約一ヶ月ぶりだ。

ここに姫が加われば、幼馴染の仲間が全員揃う。

「お前……っ、それでやすやすと返すと思ってるのか？」

「思ってる」

「っ……っ！」

な、なんで、姫もお前みたいな王子と婚約するんだか。

正気とは思えないよ」

「うんうん。」

「そうだよね、ホント」

「お前が頷くなあ！」

神妙に頷いてやると、容赦なく返してくるシャルダンを嫌いではない。
ない。

それもここだから出来ることだけれど。

本国では流石にシャルダンであってもここまでは言い返してこれない。

自分が許したとしても、周囲がそれを良しとしない。

だから正直、シャルダンが姫を攫ってくれたことは幸いだった。

まさかこんなに遠いとは思わなかったが。

主人の手当てを追えた執事は、無表情にこのやりとりを眺めていた。

「ずいぶん時間がかかったな」

諦めたようについたシャルダンのため息と科白は、かろうじて自分の耳に届いた。

だが、二人にはそれを確認できなかったに違いない。

突風が部屋に流れて二人が目を閉じ、開いた時には自分は既に部屋になかったからだ。

自分の耳にはただ、風に乗って流れてきた色気のない叫び声しか届いてきた認識はなく。

勝手に動く身体に従い、気がついたらリンカを助けていた。

そういえば、姫を床に放り出した後も目を丸くしていたな、とま

たくつくつと笑っていた。

こんなに笑ったのは久々だ。

「なにしてんの、おまえ？」

遅れて部屋についたシャルダンが階段を上ってきたのに合わせて、なんでもないことのように悟られないように立って埃を払う。

「姫に追い出された」

「今度は何したんだ？」

慣れて呆れきった口調の問いかけに苦笑がもれる。

どんな顔するだろう。

姫を好きなこの男は。

「婚約を解消しただけさ」

どうせ幼馴染みの延長線上で適当に決めただけの相手だし、こちらには友情以上の感情を持っていない。

求めるものはただひとつのことだけだから、ことはいたって単純だ。

シャルダンはいぶかしげに眉を顰めて、神妙に呟く。

「急だな」

喜ぶでもなく、驚くでもない。

なんだ、僕の気持ちはお見通しだったわけか。

それは優しさというよりも厳しく叱られているようだ。

責めてくれた方が気が楽なんだ。

最低だと、罵ってくれた方がマシだ。

僕は姫を逃げ道にしていただけなんだから。

煩わしい見合い話からの逃げにしていただけなのだから。

「だから、心置きなく姫を奪っていいぞ」

姫だって、僕よりはシャルダンと一緒にたほうが幸せになれるだろう。

有能な執事を持っているだけでなく、公務となると驚くほどの様変わりを見せる、この僕の信頼するもう一人の幼馴染みならば。

「まったく、勝手なことを。」

姫の気持ちはどうなるんだ？」

幼馴染みの言葉が聞こえないように、背後に控える影に声をかける。

「とりあえず、二人が出て来るまで待つしかねえな。」

カーク、シーちゃんの手で茶アするぞ」

「はっ」

先に立って搭を降りる。

影は短く礼をして、用意のために姿を消した。

「カーク、おま……っ」

主人よりも王子に従う部下にシャルダンが声を掛けてもすでに遅い。

「おう！」

早く案内しろや、シーちゃん」

語尾に可愛らしくハートマークをつけてやると、疲れたような顔で足音が追ってくる。

「お前の一存で決められることじゃないぞ、ディル」

「わかってる」

「姫は本気だったぞ」

「知ってる」

「それでもか」

「それでもだ」

その後は、自分の執務室に着くまでシャルダンは何も言わなかった。

まだ隠していることがあると気づかれているかもしれない。

それでもまだ、いうことができない。

確証がないから。

この僕が確証なく動くことがあると、自分で驚いているから話せない。

何も聞かず、ただ黙って触れずにいてくれるのは正直にありがとう。

マホガニーの樹から作られたシャルダンの執務机の方に座ると、カークは何も言わずに紅茶を置く。

本来の主人はぶすくれた顔で来客用ソファアに座って、テーブルに足を投げ出している。

何も聞かない何も言わない何一つ責めない態度は昔から変わらない。

「聞かないのか？」

無然と紅茶を吹いて冷ましている横顔に、笑いながら問い掛けてやる。

「聞いて欲しいのか？」

「どうして解消したのかって」

「いや、お前が知る必要はないな」

そうくると思ったという独白が、またカップに吹かれる吐息に吸いこまれる。

ものわかりの良い幼馴染みで助かる。

ゆつたりと傾けたカップの中身は思っていた味と違う。

「ん？」

もう一口。

見た目も香りもいつものものだが。

「この紅茶葉、うちのじゃないな。」

「この地方のか？」

「はい」

冷静にうけこたえるカークの声に、嬉々とした響きが混じる。

「えっ、そうだったのか？」

気がつかなかったのか、一月以上もここにいて。

「う、あ、いや。
スマン」

何故かカークに謝るシャルダンに、やはり好感を覚える。
こつこつ素直さはこいつの特性だ。

「こんなところで、一月以上も本国の物資だけでなんて賄えませんか、この辺りで香りの良く似ている物を探させました」

この地域の銘茶といわない辺り、主人に気を遣っただろう。
香りがシャルダンの好みなのだ。

「うん、これもなかなかいい」

飲み干して空になったカップを受け皿に置く。
ふと見えた視界に、おそろおそろ飲みなれた紅茶に口をつける姿が映る。

「あつこつこつ！」

完全に醒めきつていなかったらしい。

猫舌の彼には酷だろうなと思って、笑いがあがる。

「あとで、本国の屋敷に届けておいてくれ」

滅多にない微笑みを浮かべ、カークが礼を取った。

上層部、特に一族から疎まれ、命までもつけ狙われているが、基本的に自国民に人気がある事は自覚している。

しかし、今のような小さな心配りはシャルダンに教わっているよ
うなものだったりもする。

当人に自覚はないが、教えてやる気もない。

扉を叩く音に呼ばれ、カークが開く。

だがしかし、その向こうには誰もいない。

影と気配が二つ、あるだけである。

「ちょっと、ここまで来て逃げるんじゃないわよおう」

実に楽しげな姫の声とそれにいさかう音が、廊下から響いてくる。
続く二つ目の声はリンカだ。

「イヤだつつつてんだろ、こんなもん着せやがって！」

「似合ってるわよ」

「いいから、離せー！」

「やーよ。」

デイルに見せるために着せたんだからあ

「ここ最近じゃ一番愉しそうな姫の声音に、シャルダンが歎息する。
リンカに同情してのことだろう。」

開かれたドアの前に姫が現れる。

両手はドアの影の誰かを引っ張っているが、相手の手は姫より少
し浅黒く日焼けている。

腕にはいくつかの傷跡があつて、引っ張っていると傷口が開いて
しまいそうに痛々しい。

「カーク、ちょっと手伝って！」

「はっ」

短い返答と共にその黒い姿がドアの影に消える。

「姫といい、デイルといい、どうして俺様の執事を使うんだ……っ」

「有能だから」

「そんなことはわかってる」

解答がお気に召さなかったらしく、シャルダンは泣きそうな顔を向けてくる。

「こっこんなの似合わないに決まってるだろっ、離しやがれえっっ」

軽々とカークに後ろから抱えられて、少女が部屋に入る。

まるで人に慣れてない猫みたいに暴れている少女を、カークは僕の前に降ろした。

そこから、僕は視線が離せなくなった。

「諦めなさい。」

「似合ってるわよねえ？」

姫はまっすぐに僕を見つめながらドアを閉め、そのままドアに張り付く。

そこにカークが近づき、ソファアに座るように促す。

どれも視界には入るけれど、どれも通り過ぎるだけの映像にしかならない。

唯一目の前だけだ、ダイレクトに脳細胞を揺らす。

僕の前に立ったのは、春の女神だった。

春に咲く菜の花色の飾り気のないシンプルなドレスが殊更に存在を煌かせていて、同素材のヘアバンドで止めた髪は栗色を腰まで届かせている。

ほんのりと薄く引かれた桜色の紅が不満そうに引き結ばれた口元を彩る。

頬に手を沿えて、傷を確認しなければ、とても同一人物とは思えないかもしれない。

でも、それでも僕はきつとこの女神を見つける。

「誰だ？」

「リンちゃん」

「びっじんだな〜」

いででっ」

囁くように姫に問いかけたシャルダンが余計な一言で抓られた声で、はっと我に返る。

「どうよ、ディル。」

ツラはサービスだけど、上手くいったでしょ？」

僕の手が触れた瞬間、リンカは怯える瞳で、泣きそうに見つめ返してくる。

「ツラがなんでうちの城にあるんだ？」

「女の子の必需品よ」

サラリと返されて、シャルダンがまた唸っている。

姫の言う必需品というのは、一般に当てはまるのか。僕を含め、ここにいる男達にはわからない。

「なんか言っただけなさいな、デイル」

柔らかい姫の言葉もただ聞こえてくるだけで、僕は動けない。リンカの大きな瞳に、意識まで吸い込まれ、呼吸も忘れる。

頬に沿えた手を外したのは、荒れて骨ばっている傷だらけのリンカの小さな手。

重力に従って落ちる自分の手と共に、改めて確信する。

「もう、いいだろ。」

俺の服、返せ」

「その必要はありません」

絶対にリンカが僕の女神だ。

目の前の少女が憤りで瞳を熱くするのを見て、もっと楽しくなってくる。

他の三人が三様に頭を抱えるのを視界の端に捉えたが、僕の性格を知っているから、邪魔をすることはないだろう。

「必要あるさ。」

こんな格好でなんの商売が出来るってんだよ。

俺は年中ひまな貴族様とは違って忙しいんだ」

踵を返してドアに向かおうとするリンカの腕を、強く引いて引き止める。

彼女の強い瞳が睨みつけてくる。

僕の求め続けてきたものが、そこにすべて在ると、そう理屈でなく、ただ感じた。

4 #よくある誘拐劇(前書き)

リンカ視点に戻ります。

4 #よくある誘拐劇

王子の優しい瞳に負けそうになる。

こんな風に俺を見る人間は今までいなかったから、目の前にいるこの男が何を考えているのかなんて、俺には検討もつかない。

はっきりしているのは、こいつらが俺のはっきりと苦手とする部類の人間だという事だけだ。

ひとりで勝てる相手でもない。

「俺は着替えて帰らせてもらう。」

あんだ達はあるんだ達でやっていてくれ」

賞金も何も知ったことか。

今回の仕事は結局は子供の喧嘩の末だし、こいつらは俺の手に負えない。

睨み返した王子の瞳は王族の威厳と強い強制力を働かせている。奥の方で俺を嘲っている。

「着替えならば、もっと良い物を用意させましょう」

俺を従わせる気が。

「いらねえよ。」

手を離せ」

片腕を取られていても攻撃のし様はあると、腰を低く落して構える。

だが、どうもこのドレスというヤツではあまり様にならない。

それでも、俺に従う意思がないと見せることこそが重要なのだ。

構えに対して、王子はあの警戒心を解かせるような造りものの笑顔を浮かべてくる。

「三万オールでしたか？」

心の中だけで、ギクリと震える。

その金額は王子に前金としてもらったラルク石の指輪の裏価格として、俺が小売屋に提示した金額に近い。

まさか、知っているというのか。

いや、そんなはずはない。

だって、こいつはあの時分、寝ていたんだから。

「先日、連れの兵士が何者かに再起不能なまでに叩きのめされてね。僕は王族だというのに護衛一人つけていないんですよ」

やっぱり、という気持ち我先に立つ。

先日ではなく昨日の話だ。

俺が紋章をちらつかせた剣術士を叩きのめしたのは。

思っていたとおり、この王子の関係者だったか。

「あんたに護衛なんか必要なのか？」

昨日から幾つも魔法を使って、まったく疲れを見せない様子からすると、かなりの高位の魔法使いということになる。

聞いたことのない魔法ばかりが出てくるあたり、オリジナルに開発した物か。

「それでも、方々から命を狙われる身でしてね」

自業自得だろ、と云いかけたシャルダンの言葉が遮られる。

「君の倒した護衛も義母のつけた目付けだったから、おちおちゆっくりと眠れなかつたんです」

護衛出し抜いてここまで来たの、と姫の瞳が見開かれる。

「宿屋でたっぷり寝てたろ」

「それはリンカ、君がいたからですよ。」

それだけの強さの拳闘士は、僕も多くは知りません」

えっと驚いたのは王子以外の全員だった。

引きこまれた俺の腕を姫が引いてソファーに座らせ、向かいのソファーのシャルダンの隣に王子が座る。

カークは新しい紅茶のカップを淹れる。

「それって、誰？」と俺。

「リンちゃんって、拳闘士なの？」というのは姫。

「こんな子供が？」と一番いぶかしんでいるのはシャルダンだ。

カークは表情が読めない。

「たしかにカークも強いですけどね、どう思う？」

「見たことがないのでなんとも言えません」

シャルダンの傍に控える影のような男を俺が見ると、視線は合わされずにすつと通りすぎられた。

「直接は見ていませんけど、剣術使いを三人も簡単に倒しちゃった

らしいですよ」

あれが、剣術使いだった？

「お前、剣術使いなんかと一緒に旅して来てよく無事だったなあ」
「それは僕だから。」

ひとりだと何かと気楽だし、王宮ではすっかり猫被ってましたからね」

話を聞いているうちに、ほんの少しだけ自分の倒した剣術士達が哀れに思えた。

クラスター王国からここまでの長旅を、ずっと王子の猫被りの我俣に耐え続ければ、そりゃストレスも溜まるわな。

正体を知らなかったことが返って幸せにも思えるけど。

あの猫被ってるときは本当に、騙すのに気が引けたもんなあ。

と、剣術士といえは。

「あんだ、カークっていったっけ。

今度さ、手合わせしてよ。」

俺

あ。

そっぽむかれた。

やっぱりこの姿だからかな。

俺の場合、育ての親がかなり強い拳闘士だったおかげというのが強いせいかな、実際自分がどのくらいの強さなのかさっぱりわからない。

でも、強い奴がいると聞くと言合わせしたくなるのは、その育ての親の背中を見てきたからか。

「ねー話戻すけど、言い忘れたことがあるのよね」

姫がにっこりと笑顔で王子に向き直る。

「デイル、もうちょっと方法を考えて行動してよね。こっちはそのとぼっちりで攫われかけたんだから。」

カークが助けてくれたから良いようなものの、そうじゃなかったら今頃こんなところで紅茶なんか飲んでいられなかったわよ」

鳩尾の辺りを片手で叩く姫は、いたって明るく言うけれど。

「先客がいたって？」

そんな報告は聞いていないぞ」

主人が幾分きつめの口調で問いただしているというのに、執事はとぼけた様に手を打って返す。

「そこから掠めとって参りましたので」

カークに悪びれている様子は少しもない。

姫も何かを思い出して、乙女手で目をうつつとりと輝かせる。

「あのとときのカークは、ほんつとにすごかったわよ」

すごかったじゃなく。

「それは僕も聞いてないぞ、カーク」

聞っているのかと思いきや、王子までもが聞き返す。
そして、全員の注目が執事に集まる。

「カーク、あんた言ってなかったの？」

「言い忘れておりました」

ここまで悪びれずに報告する辺り、この男もただモノではない。

「というのは軽い冗談です。

きちんと相手を特定してから報告しようと思っておりましたが」

前置いて、内ポケットからきちんと四つ折りにされた紙を取りだし、それを綺麗に広げて二つのソファアの間置かれたテーブルの上に置く。

丁度四人全員が見えるように。

簡略化されたそれは、東方の龍を象った鮮やかなデザインだ。

普通に生活していれば一生涯見ないことも多い中、不幸なことに俺はそれに見覚えがある。

関りたくない度ナンバーワンだ。

「全身黒装束で背に大きくこれが刺繍されていました」

「あ、これ確か剣の柄に描いてある奴がいたわ。」

一人か二人か知らないけど」

深刻とは無縁な呑気な姫の言葉に、背中を冷水が滑り落ちる。
聞きたくない。

聞いたら関ってしまうけれど、ここまで関ってしまったらむしろ
知りたい。

「何色、だった？」

「黒塗りの柄に黄色で描いてあったと思う、けど。何なのか知ってるのね、リンちゃん」

知ってるどころじゃない。

本当にもう関りたくない。

なんで、なんで、と言葉が頭の中をかける。

黄竜は誘拐のプロだ。

「義母上もとうとう本気になってきたってことですか」

「王子殿下……」

無機質なカークの声に心配の色が混ざる。

それは王子にも伝わったらしく、柔らかく微笑んだ。

「リンカ、君も知っているようですね」

アタリマエだ！と叫びたい衝動を抑えて、指が白くなるくらい強く拳を握る。

「刻龍、なんて。」

どうしてそこまでして、あんたら、狙われてんだ？」

狙われているのが、王子一人だと言うのならわかる。

姫は婚約者だから、弱点と思われて攫われるところだったのだろ
う。

だが。

「ねー刻龍って何？」

状況をわかっていない二人に、ゆっくりと説明をする。
落ちつけ、俺。

「刻龍つてのは、強大な裏組織だよ。

仕事だったら、どんなことも厭わない奴が揃ってる。

世のほとんどの犯罪者つてのはここにいるんじゃないかな？

敵に回すともものすごく厄介な相手さ」

手の震えを悟られないように、何度も握ったり開いたりする。

恐怖が背中を駆け上ってくる感覚を深呼吸で消す。

「雇い主は、わかりますか？」

王子の問いに、目を見据えて答える。

「刻龍は情報を漏らさない。

裏切り者も許さない。

それと腕も揃っているからな、裏じゃ信用あるぜ。

メンバーも仲間じゃねえとまず明かされねえし。

まあ逆らおうなんて思うやつはいねえよ。

まして、仕事の邪魔したとあっちゃ」

「まずいですね」

考えこむ素振りを見せるものの、カークは焦った様子も見せない。

「絶対に、報復に来るぞ。

あいつら、そういうことには容赦ねーから」

どこまでも付きまとう影に、恐怖は振り払っても駆け上ってくる。

折角、あの小さな宿場町で平和に過ごしていたのに、逃れられない運命を呪いたくなる。

「知り合いですか？」

「しらねえよ」

「でも、詳しそうです」

刻龍とこの王子、どちらが最悪だろう。

「何が言いたい」

ギリッと奥歯を噛む。

「そいつらが居そうな場所、知ってるんじゃないかと思ひましてね」

馬鹿じゃねえのか、こいつ。

知っていたとしても俺が案内すると思ってるのか。

「殺されてえのか？」

「いやですよ。」

僕、長生きするんです。

こんなところで死ぬワケないじゃないですか」

王子はにつこりと最上級の笑顔を向けてきた。

隣で姫とシャルダンが諦めたため息を吐く。

「それにリンクとカークも助けってくれるんなら、怖いものないって。

ね、姫、シーちゃん？」

「そうね……」

「俺も？」

俺もなのっ？」

姫と王子は楽しそうだが、泣きそうなシャルダンの肩にカークが手を置いて、沈痛な面持ちで首を振った。

「ねえリンカ、そいつらは決して耳がないワケじゃないでしょう？ たぶん、うちの御老体方よりは話を通じると思いますよ」

「そいつはどうだろうな」

俺に確信的なことは何一つ言えない。

でも、どうやらイヤでも案内させられるらしい。

できるだけ会いたくないんだけど。

特にアイツには。

静まり返った室内に、王子が紅茶を啜る音だけが虚しく響く。

王子の言うように、刻龍の一人と　その一人が問題なのだが

俺は親しくしている。

かなり一方的なラブコールを受けているというほうがわかりやすいだろうか。

刻龍に入らないか、という強引な勧誘をうけているので、普通のものより接触も容易いが、付きまとう危険は三乗ぐらいの速さで駆け上る。

出来ることなら、関わりたくない。

この王子に関わらなければ、近いうちどこか遠くへ移動するつもりだったのだ。

刻龍に見つかる前に、王子から報酬をせしめて、役人に突き出して。

そうして作った金で、刻龍に知られない場所で隠れ住むつもりだ

った。

しかし、こんな話を聞いてしまった今、役人につき渡すことは刻龍の奴等に差し出してきているのと同じことだ。

彼らに牢屋なんてものは役に立たないどころか、無いに等しい。

どんな依頼を受けているかは知らないが、大抵は生死を問わない依頼ばかりと聞く。

そんな場所に突き出すほど、俺は冷酷じゃない。

とても厄介で扱い難い男ではあるが、殺すのは惜しいと思わせる何かを持っている。

そりゃ、たった二日で何がわかるかっていったら、性質の悪さぐらいしかわからないけど。

それでも、今、こいつは死ぬべきときではないのだと思う。

これは理屈ではなる、単なる勘でしかないが。

ということとは必然的に俺は刻龍と対峙しなければならなくて、やはりアイツと会わなければいけないわけで。

あー、なんでこんなのと関わっちまったんだろ。

視線を床に落として、俺は諦めの息を吐いた。

5 #よくある衣装変え

城の中は、外から見た通りとても静かで、でも噂みたいに幽霊がでそうってほどでもない。

城壁の中は手入れが行き届いているし、きちんと人の住んでいる気配がある。

もちろん、それはここにシャルダンやカーク、姫とその他数人の護衛の兵士がいるからである。

強制的に刻龍への繋ぎの仕事を受けさせられた俺は、ひとまず服を着替えることを納得させて、城の一室に通された。

「これを」

カークが持つて来たのは、俺の要求どおりの服で、兵士に支給されているカーキ色の制服と黒のTシャツだ。

王子や姫に頼むとんでもないものを用意されそうだったので、シャルダンに頼んだのだが、その判断は正しかったらしい。

服を渡すと、さっさとカークは出て行ってしまい、部屋には俺だけが残される。

素振りや視線から、カークが俺を快く思っていないのはわかっていた。

おそらく俺でなくても、主人のシャルダンに近づく者には大抵そうするのだろう。

一見、王子や姫の命令を優先しているようにも見えるが、最終的にはシャルダンに従うというのが、端からみているだけでも容易に想像できた。

ドアの閉まる音を合図に、俺はようやく髪を外す。
あー暑かった。

「俺はシヨートの方が似合ってると思うぞ。
長い髪も確かに似合うけどな」

俺ではない男の声は、部屋の中から聞こえた。
さっきまで確かに俺とカークしかいなかったし、カークが出て行
った今は俺以外の誰もいないはずなのに。

しかし、俺は彼の声に聞き覚えがあった。
彼ならそれも容易だと知っているだけに、振り返るのが怖い。

「紅……竜？」

おかしなぐらいに声が掠れている。
さっきまで普通に出ていた声なのに、自分のものではないようだ。
恐怖に、全身が凍りつく。

なぜとか、いつのまにとか、そんなのはどうでもいい。
ここに彼が、紅竜がいるということが問題だ。

「それ、ここの兵の制服だろう。
せっかくのドレスを着替えちまうなんて、もったいない」

紅竜がただの世間話をしに来たはずがない。
目的は、王子かカークか。
それとも姫か。

「あんたが出向いて来るなんて珍しいな」

「そうか？」

俺は先代と違って、活動的なんだ」

紅竜がやけに嬉しそうなのは、標的エモをみつけたからだろうか。
冷や汗が、俺の背中を滑り落ちてゆく。

自然と研ぎ澄まされる俺の神経を逆撫でするように、彼の気配が動く。

「お前の標的、俺に売らないか？」

俺のすぐ後ろで、彼の声がすることに、驚きはしない。
そんな風に喜ばせる気は毛頭ない。

精神を奮い立たせ、勢いで彼を振り返る。
鬘がとれて、涼しい風がうなじを通り抜けるのを感じる。

「なんでだ？」

不敵に笑って見せていても、全身が逃げたい気持ちを抑えるので
精一杯。

それをわかっているのか、彼は手元に残る鬘を無造作に放り投げた。

その描く放物線に、視線と意識が吸い寄せられる。
天井に付くか付かないかのギリギリの高さを頂点に、重力に従って落ちてくる。

「リズールで会う時まで、良い返事を期待しておくぞ、リンカ」
パサリと、椅子の背もたれにそれが落ちる。

それから、窓から涼しい風が入ってきて、俺はようやく一人になれたことを知った。

いまさら、彼に恐怖して、震えて見せるなんて真似はしない。どこからか見ている彼を、喜ばせるようなことなど。

魔物なんか、怖くはない。

この世界で今の俺が怖いことなんて、きっと彼と会うこと以外にない。

窓を閉め、部屋をもう一度見回し、緊張を解く。

それから、のろのろと着替え始めた。

ドレスを脱ぎ、コルセットを外し、大きく深呼吸。

新鮮な空気が体中に響いて、暗い気持ちが少しだけ晴れた。

「リンカ、今日はここに泊まり」

「はいってくん」

開きかけたドアをすばやく押えつけ、俺はため息をついた。まったく、次から次へと。

「俺は一度町に戻るから」

「え？リンカはここで泊まらないんですか？」

「他にも仕事あんだよ。」

「あたりまえだよ」

ドアの向こうの王子に向けた言葉は、半分嘘で半分本当だ。

一応仕事だってあるし、ここから離れたいのには本当だ。

だけど、どこかで放って逃げたら、後悔する予感がしてる。

「じいじ予感はよく当たるんだと、俺は小さく舌打ちした。

6 #よくある報復劇

「ついてくんなっつってんだろっ」

後ろを振り向かずに関力(リンカ)は叫んだ。

服はもう元のはいえないが、無地の白シャツと少し大きめの傭兵用の既製服だ。

あのドレス……スカートよりはマシだから、腰を使用人のひとりにもらった大き目の布を引き裂いてベルト代わりにしている。

裾は当然ながら引き摺るので大きく三、四つ折りこんで。

邪魔な鬘を外した後は、心から清々した。

首を通りぬける涼しい風で、もうすぐ秋が近づいてくるのだとわかる。

このあたりにくる冬や夏は短く、春や秋の季節は長い。

熱すぎず、寒すぎず、常春とも思える気候だが、それでも秋の気配というものは感じるのだ。

人によっては水の匂いや、月の色、草木の成長や、光の角度、風の温度で。

「どうして？」

「俺はひとりでも平気だっつてのっ」

強く言い捨てても、ついて来るのはやはりこの男、ディルフアウスト王子だ。

なんの因果か妙に気にいられてしまっているのだ。

見た目はただの世間知らずの優男。

しかしその実、かなりの高位魔法使いで、そのうえ高額賞金首のお尋ね者で、遠い遠い西の大国の第一王位継承者で。

などと、もつ異名さえも多すぎて、ここではもう語る気になれない。

「平気大丈夫だといいますがね、わかってますか？

貴方はまだ子供で、」

足元の石をつい蹴ってしまい、それは近くの壁に乾いた音を立てる。

「おん」

「うるっせーよ。」

ついてくんなら、黙ってる！」

叫ぶように言葉を遮るとへにやりと相好を崩し、王子はリンカの隣に立つ。

そうすると、見上げるような身長で、眩しかった陽光が遮断され、視界がわずかに暗くなった。

夏の終りの残光は容赦なかったが、軽装のリンカには大したことはない。

もともとは他の地域に住んでいたとはいえ、ここで一年以上も暮らしているのだ。

それでも、常春のような気候に慣れてきていたこともあって、強い陽射しは瞳を焼くほどの熱を持っている。

涼しい風で緩和されているとはいえ、暑いものは暑い。

まさかわかっただけでそっちに立ったんじゃないだろうし、と見上

げる表情からは窺い知れない。

なんでこの男はこんなに機嫌良く歩いてんだか。

「この町では男で通してんだ。

じゃねーと仕事も減るからな。

だから、黙っといてくれ」

小声で釘をさすと、笑いながら答えを返される。

「でも直に通じなくなりますよ？」

「あんたがばらさなきゃいいだけの話だ」

他に知っているとすれば世話になってる女将ぐらいだが、彼女の口の堅さは信頼している。

だから、王子一人だけ俺は見張っていればいい。

「でも、リンカに直接言わないだけで気がついてる人もいるんじゃないですか？」

歩いているだけで集まる視線さえも不快だったのに、その上、ま
だいっか。

「黙ってるって言っただろ」

意識して思いっきり低い声で言っていると、王子は貼りついた笑
顔を返して、前に視線を戻した。

そのまま、俺の視界を遮るように前に立つ。

風が強く翻り、深い見慣れてしまった森の色のマントが視界いっ
ぱいに広がると、王子の持つ特有の気品ある匂いが香ってくる。

少し下がろうとすると、その足が止まったので、俺も止まらざるを得ない。

「……オイ」

邪魔だと云いかけた声を、抑えこむ。

先ほどまでの朗らかだった空気が、研ぎ澄まされた刃の鋭利さを潜ませてからだ。

それを放つのは、王子か。

それとも行く手を遮る不躰な愚か者か。

「どこに行っておられたのですか、殿下。

探しましたよ」

聞き覚えのある粘着質なまとわりつく声があたりに響き渡る。

しかし、丁寧な言葉でありながら、声音は決して敬意など持つてはいない。

そんなことは俺だってわかった。

相手を見下す時の、あのイヤな声。

言い聞かせるというよりも、抑えつけるようなそんな空気は俺が最も嫌うもの。

刺々しくなりそうなその場所で、場違いとしか思えない言葉が零れる。

もちろん、王子の口から。

「それはスミマセンね」。

「ちょっと近くまで散歩に行ってみました」

「ちょっと近くまで、姫を取り返しに行ったわけではなく、散歩かよ。聞いたところだとずいぶん大掛かりな魔法使ったクセに、それでも散歩というか。」

「最初に会った時と変わらない長閑さは、戦意を喪失させるか増幅させるかの二つの効果しかないだろう。」

「この場合は当然、後者。」

「ほう。」

「おひとりで？」

「だって～皆さん、なんだかお忙しそうでしたし」

「のんびりと答える様子に相手がイライラしつつあるのがわかる。」

「危険ですよ。」

「いくらこんな平和で小さい町とはいえ、仮にも貴方の御身は」「狙われているのですから、でしょうか？」

「先じて遮る王子に、一瞬相手が息を飲んでいるのがわかる。」

「こっそり、王子のマントの影から覗き見ると、やはり見たことのある剣術士どもだ。」

「俺の時と同じように、大柄な男を筆頭に後ろに二人が控えている。後ろの二人は今にも剣を抜きそうに剥き出しの殺気を放っている。」

「対する王子は、また猫を何匹かかぶっているようだ。」

「彼らの側から俺の姿は見えないのを幸いに、今度はしっかりとそ」

の顔と姿を観察する。

が、やはりいつも絡んでやられるヤツらと大して違いも見つけられない。

覚えているのは、その鎧につけられた大仰な紋章。

王子やシャルダン、カークや姫の服にもそんな紋章があったりしたが、こいつらがつけているのを見ると、到底同じように見えない。城ではあんなに威厳をもっていたそれが、ただの安物のオモチャに成り下がっている。

羽根のような花卉のような渦巻く風のような、不思議な文様。

光が剣術使いどもの鎧の丁度その部分に照りかえり、白く見えなくなるのに瞳を細める。

「そんなことわかってますよ。」

だから、護衛をお願いしたんじゃないですか。」

王子は巧妙に空気までもがらりと変化させ、いつそ見事であるが、王族つてのはそこまでの術を身につけなければならぬことがそれほどあるんだろうか。

「それなのにここに来てから、皆さんずいぶんな怪我をなさったというので心配したんですよ。」

このまま本国へ無事に帰れるのかな。」

とぼけたように続けつつげる様子にさらに殺気が増す。

煽って何をする気だ、王子。

「もちろん」

「それで、僕なりに考えたんですけど。」

相手の言葉を遮って、王子が妙に意気込んだ調子で続ける。
相手の詰まる様子がわかって、俺も笑う。

こういうやつを叩きのめすんなら、いくらだって手を貸してやる
けどな。

「あなたたちを倒したって人に護衛を頼もうと思ひまして！」

完全に風向きが変わった。

「殿下」

これ以上もないくらいに疲れきり、呆れかえり、穏やかに見せかけていた空気を殺気に切り替えているのがわかり、野次馬しはじめ
ていた町の人間たちは一步下がった。

「して、その人は見つかりましたか？」

俺を見つけてかけよってこようとすするチビっ子を手で追いやり、
その動作に気がついた近くの女性らが引きとめてくれる。

万が一でも近づいてこられちゃ、たぶんこれから邪魔になる。

「ええ」

王子のマントを抜けると、正面から風が吹きつけてきて、視界が
はつきりとクリアになった。

こめかみのあたりを通りぬける風が心地好い勝利を予感させる。

「あなたがたの説明してくださった人とはずいぶん違いましたけど
ね」

肩に力強く置かれる手もこの時ばかりは許せる。
目に見えて、彼等が鼻白む。

それほどの日数も経ていないし、俺に叩きのめされたことは記憶に新しいはずだ。

当然、力の差ってやつも。

「また会ったな。」

おっさんら、こないだの怪我はもういいのか？」

王子がおやつと不思議そうに声を出す。

まさか俺が乗り気になるとは思っていなかったからだろう。

「殿下、そんな子供と我らは言いましたかな？」

正面に立つ男はまだかろうじて平静を保とうとしているが、殺気を抑えても抑えきれないそんな声じゃ、あまり意味はない。

「へえ〜どんなやつにやられたって言ったんだ？」

「そうですね〜。」

リンカとは正反対な容姿を言っていましたよ〜」

「具体的に言っつていいけど？」

ふふふ、と楽しそうな笑いが聞こえる。

「2メートルはありそうな長身で〜筋肉質で〜毛深くて〜野生の熊のように獰猛な、男。」

最後の一語に強く力が込められていた気がするけど、それは後で

追求するとして。

「まーねー。」

まさかあ身長一四〇センチもないよーなあどっこにでもいそうな孤児のガキにい三人そろってえやられたとはいえねえわな！」

周囲の野次馬に笑いが沸き起こる。

小さな村での日常といえど、見ていた人間はここに半数以上いる。

「証人なら、めいつぱいいるぜ？」

「剣術士のおっさんたち？」

こんな小さな町で嘘なんかついたって、すぐにバレるに決まっているのに、ずいぶんとみえみえの嘘をついたもんだ。

「なんだと貴様ア！」

「剣術士？」

「剣術使いといっつてませんでしたか？」

剣を抜いて切りかかってきた男を二人ともが左右に避けると、男は群集につっこんでいく。

「この程度で？」

「クラスターってーと、あれだろ。」

「ユズグライド流剣術の」

切りかかってくるもう一人を安々と避けながら、呑気に王子と話して煽る。

俺と王子は避けるだけで、鈍色の光を放つ三人の剣術士は無様なものだ。

だんだんと囲む輪は広がりつつあるものの、笑い声は絶えない。

「よく知ってますね〜」

「まーね。」

知り合いにそれを使うやつがいたんだ」

「名前は伺っても?」

聞かれてもここでは答えるわけにはいかない。

こんなに人の多い場所で言える名前じゃない。

それが気がつかれないように、加えて牽制の意味も含めて言い返す。

「聞かねえ方が身のためよ?」

「それじゃ後で教えてくださいな〜」

「いや、だからさ〜」

しかし、遠回しな言い方は通じないらしい。

「ちょこまかと逃げやがって!」

「いや、俺はそんなに動いてないっスよ?」

どういつてもかわされる剣に、相手も焦りを覚えている。

三人ともが多い汗を拭いつつだが、俺はこれぐらいじゃ準備運動ぐらいにしかない。

なにしろ、自分でいうとおりには片足を軸にしているから動きようもない。

動くまでもない。

「あゝ勝った方に護衛してもらってことではいかがでしょう?」

負けた方が王子から逃げられる。
いいな、それ。

「手を抜いたら、リンカの秘密バラしますよ」

仰け反るように振られた白刃を避けて、両足を蹴り上げつつバツク転をすると、一人が腹を抑えて唸る。

続いて突いてきた刃も避けて、手を切らないように気をつけつつ、横蹴をすると、軽く吹っ飛んでゆく。

「ずりいよ、お………ディル」

「そうですかね」。

あなたはどう思いますか、隊長さん？」

急に話を振られても迷惑だろうに。

「……殿下………まさか………いや、そんはずは………」

軽く頭を振って、隊長は俺と王子を交互に見やる。

位置的にはどちらへ向かっても距離は一緒だが、果たしてどちらに行く気だろう。

順当ならリンカの方へ、王子の話が真実なら王子の方へ行きそつなものである。

注意深く、彼の足元を見つめる。

あの時とは違って俺を警戒しているからだろう。

構えはしっかりとしたものである。

これなら、剣術使いというのも認めてやらなくもない。

「彼は一応、うちの騎士団じゃかなりの腕ですから気をつけてくだ

「

王子が言い終わらないうちに、巨体が動く。
だが、一瞬の足の動きに俺が気がつかないわけがない。

ちょうど間めがけて、鋭い蹴りを放った。

「あ！」

大切な事を見落としていたと気がついた時には遅かった。

あんなに見てきたのに、どうして今の今まで忘れていたのだろう。
それは相手も同じらしい。

目の前に王子に剣を振りかざしつつも驚きを隠せない表情がある。

そして、王子の実に楽しそうな、嬉しそうな笑顔。

小さく周囲に聞こえないように、その誰かが作り上げたような形
の良過ぎる口唇が動く。

そして、他の一切がまったく聞こえなくなる。

「風の葉 日の葉 我が前の障害を払え」

運悪く、その言葉が放たれた時にはすでに、俺は隊長に触れられ
る位置にまで到達していた。

小さな竜巻ほどの衝撃が起きて、風に吹き飛ばされる身体を小さ
くし、どこに行っても受け身が取れるように構える。

その辺は日頃の成果である。

壁に打ちつけられたものの、大した怪我は負わずにすぐさま立ち
あがるようにする。

が、膝に力が入らない。

「すっごい風ですね」

静まり返ったこの場に、能天気な声が響き渡る。

砂埃あたりはうすく土色にそまる煙に覆われている。

目をこらすうちに徐々にそれも晴れ、平然としている王子が輪の中心に立っている。

手で乱れた髪を軽く整え、眼前の埃を手で仰ぐ姿が妙に絵になる。

この辺り一帯に竜巻は起きない。

だからこそ、全員が全員、啞然と俺たちを見つめていた。

倒れて動けなくなっている隊長。

同じく座り込んだままの俺、そして、ほとんど全部の視線は王子にあった。

小さなこの宿場町に来てから、今だ噂の渦中にいる人物がここにいて、しかも俺と行動を共にしたうえで、この騒ぎ。

「この場合、勝負は僕の勝ちですよね？」

辺りを見まわして、王子が微笑むと歓声と嬌声があがった。

「いいぞー兄ちゃん！」

「素敵ー！」

「今のは、今のは」

叩きのめす事に異存はない。

だが、立場も察して欲しいものである。

「魔法ですよっねっ？」

ほうら、バレてる。

俺の前に出来てゆく人垣に苦笑しつつ、態勢を直して、ぶつければかりの壁に寄りかかった。

魔法使いといえば、特殊な職業どころか、そうそう滅多にお目にかかれるもんじゃない。

先にいったように、素質が必要なのだ。

才能とか素質とかがつてやつは、どこにでも転がっているわけではなく、あつたとしても気がつかずに終るか、気がついたとしても使い方を間違えれば自滅もありうるのだ。

それを簡単にこんな小さな喧嘩で使ったりなんかして。

「リンカあゝ、大丈夫？」

見慣れた小さな子供達が寄ってきた。

着ているのはボロだけど、一週間に一度はどこかの家が洗濯してくれる。

この孤児たちはそうして生きているのだ。

商店であまりものをもらったり、小さな小遣い稼ぎをしたり、優しい町人に助けられて生きている。

「大丈夫、大丈夫。

いったろ。

俺は丈夫なんだ」

「さつきでもおっきな音したよ!？」

泣きそうな少女の頭に腕を伸ばしてぐしゃぐしゃとなでてやる。

彼女の髪は柔らかで手触りも良いのだ。

「受け身とれたから、心配ねえよ」

「ホント？」

「本当だから泣くなって。」

ほら、泣くとこわーい魔物がやってくるぞ？」

ひくつと最後に一度鼻を鳴らして、泣いていた全員が泣き止んだ。
良い子たちなんだ、みんな。

全員の顔を見まわして、笑ってやると鏡のように笑顔が返ってくる。

でも、俺の万倍も純粹な笑顔は、なにものにも変えがたい魅力がある。

「おっし、良い子だ」

急に髪を軽く引っ張るやつがいて、ふりかえると一番元気が良くて好奇心の強い子供が、大きな目をさらに大きく見開いている。

こぼれて落ちてしまいそうな目で俺が自分を見たのを確認すると、そのまま腕を上に向けた。

「さっきの兄ちゃん、魔法使うの？」

なんと答えたものか。

子供は純粹だ。

笑って誤魔化せるようなものではないとわかっけていても、正直に言ってしまうって良いものか、迷う。

「見たのか？」

「リンカが吹っ飛ばされたところだけ」
「そうか」

少し複雑だ。

こいつらにカツコ悪いのは見せたくないんだけどな。

「かつこいいおねえさんだよね！」

「おい、エル。」

どうみてもあれはにいちやんだって

「いいえ、ぜつたい！」

おねえさんよっ！」

両の小さな拳を握り締めている赤いリボンの少女エルは、仕立屋の娘である。

妙に勘が鋭かったり、妙に鈍かったりするので有名だが、結構可愛い。

性格も容姿も。

「エル……あれは男だ」

「ほらー！」

「それで、魔法使いなのか？」

「僕、魔法もつかい見たいよう」

口々に騒ぎ始める姿は微笑ましいが、ちょっと煩い。

視界が折角明るくなってきてるのに。

(え、明るく?)

顔を上げると、人垣がいつのまにか割れていて、こちらに歩いて来る男が一人いる。

子供たちもなにかを察してか、左右に割れて離れ始めた。

逆光で顔は見えないが、おそらくあの貼りついた作り物の笑顔を浮かべているのだろう。

あたりを囲んでいた人たちはまだざわざわと波のようにさざめいている。

「大丈夫でしたか、リンカ？」

優雅に差し出してくる手に戸惑う。

ざわめきも大きくなる。

「当然だ。」

俺を誰だと思ってる？」

逆光でさえなければ、王子がどんな顔をしているのかわかったのに。

こんなに近いのに、こいつの真意はまだ計れない。

俺の持つ秤ではとくに針が振り切れているのかもしれないけれど。

「リンカ、ですよね？」

いつまでも手を取ろうとしない俺の腕を掴んで、引っ張りあげて、もう片方の手で抱き寄せられる。

マントの中にすっかり包まれる。

「威力抑えたつもりだったんですけど、貴方が助けに来てくれるのは誤算でした」

背中をイヤなものが這いあがってくる。

原因は、王子が俺を抱き込んだまま耳元で小さくささやくからだ。このままじゃ身体がいくつあっても足りない。

「悪かったなっ、だったら離せっ」

暴れようとしてもどうやって抑えこまれているのか腕も足も動かさない。

ただ静かで落ちついた王子の吐息と心臓の音だけが聞こえる。

他のざわめきが遠くなる。

「ありがとう」

普段よりも数段押さえこんだ声で、弱々しい声で、ただ呟くようにいわれては騒ぐ気も失せる。

「どういたしまして」

だから、なんだかこっちも礼を言ってしまった。

いつになく、照れてしまって。

顔が熱い。

開放された直後に感じたのは、風と街と、世界全部に抱かれるやさやかなぬるい温度だった。

7 #よくある宿場劇

器用に真つ白なシーツを取りこむ女性の背中が、もうずいぶんと見慣れていた。

いや、初めて会った時から、それは温かさで俺を包みこんでくれた。

彼女は生まれながらの母親だと、思う。

俺に母なんていないけど。

「いつ発つんだい、リンカ？」

前も見えないくらい抱えているのに、まっすぐに俺の方へ歩いてくるので、場所を開ける。

女将はどうやってか器用にドアを開けて、奥へと入ってゆく。

俺もそれを追いかける。

「明日の朝までには」

「じゃあ今夜はゆっくりできるんだね」

盛大に送別会しようかという言葉に少し、淋しくなる。

「いいよ、そんなの」

「よくないよ。」

リンカにはたっぷり世話になったしね」

「そんなの」

お別れ会なんて、そんな本当にもう会えなくなるみたいだな。

そう思うと涙が出てきそうで、慌てて瞬きを繰り返す。

「ちょっと仕事してくるだけだし、すぐに戻ってくるのに」

「どうだかねえ。」

だって今度のアンドの雇い主、どっか他の国から来た王子様みたいじゃないか。

せつかく気にいられてんだし、そのまま嫁になったらどうさね」

盛大に笑われても彼女の場合はすごく気持ち良くて、スツと心に入りこんでこちらも笑顔にさせる。

たぶんきつと、この女将の威勢の良さとか快活さとかお人好しで世話好きだとか、そんなもの全部をひっくるめても奥にそう在れとしている強さをみれるからかもしれない。

「馬鹿言うなよっ」

「馬鹿なもんかい。」

私がリンカくらいの頃はね、村中の羨望の的でさ。

毎日、口説かれてたもんさね」

「恐れられてたの間違いじゃねえ？」

「今でも美人だから、口説きにくる奴アいるしね」

「それ喧嘩売りに来てるの間違いじゃ」

「なにか言っただかい？」

全てを笑い飛ばして、生きられる。

そんな彼女の生き方に憧れた。

決して手に入らないことと知りながらも、いつか俺にもそんな生き方ができないかと悩んだ。

だけど、所詮俺は腕が少しつだけの十三歳の子供で、世の中の汚いものを全部見てきて、俺自身もそれに手を染めたこともある。

ここまで汚れてしまった俺が、彼女のようになれるとは思っていない。

「なんでもねーよ。
手伝おうか？」

だったら、と急にその声音が柔らかくなる。

そうして向かった一室はまだ空部屋で、今日入る客のために掃除してくれというものだった。

予約の客がいるなんて珍しい。

大抵の旅人の中継点であるこの村に予約客が入ることなど、まず無いと言っている。

そんなことをするなら、少し先の大きな街に行った方がいい。
わざわざそんな真似をする輩はいない。

この宿のどの部屋も同じ造りで、違いといえば、大部屋と個室と
いうぐらいになる。

それも単に部屋の広さの違いであって、あとはどれだけの数のベッドを入れるかということになる。

今回は大きめのベッドが二つ、テーブルがひとつ、椅子が4つの
部屋を二部屋。

どこかの馬鹿なお大尽旅行でもくるんだらうか。

「リンカーっ」

「はいつてくんなよなあっ」

ピカピカに磨いたばかりの床にスタンプがつく。

「そんな……っ」

「邪魔だから食堂にでも行ってこい」

「そ、そんなにはつきりと言わなくても……っ」

うるると潤んだ瞳で見返してくるなよ。

どうして、二十歳もとっくに過ぎてそうなのに、そんな行動が似合うんだよ。

握り締めた雑巾を投げつけたい衝動を堪えて、俺は王子に背を向けた。

構っていたら切りがない。

窓に手をかけて、立て付けの悪い音を立てるそれをガタガタ動かす。

渾身の力を込めても動かない。

どうなってるんだ。

「なにしてるんですか？」

すぐ近くで声が聞こえたかと思うと、動かなかった窓が開いて俺も一緒に外へ連れて行かれそうになる。

軽いつかじゃなく、単に力の加減のせいだ。

そして、外に放り出されなかったのは、腹を締め付けるこれのせい。

おかげなんて、可愛いもんじゃねえよ。

すぐそばを通り過ぎてゆくのはさっぱりとした嗅いだことのなか

った上品な香りで、数日で嗅ぎ慣れたそれはもちろん王子の服に備わるものだ。

「良い風ですね」

言った後から強風が吹き込んできて、思わず目を閉じる。

睫毛が震えるのと身体中の毛が逆立つのと、どちらが早かっただろうか。

極々微量のそれに気がついたのは彼も同じなのだろうか。

「どうしましたか、リンカ？」

そんなことはない、か。

いくらこいつが稀少な魔法使いだとしても、気配を読むなんて芸当ができるわけが無い。

取り越し苦労なんかしてもしかたねえし。

てゆうか、こいつが謎な行動するのが一番悪いんだよな。

「リンカ？」

「っ!？」

声にならない悲鳴を上げそうになり、あわてて自分の口を押さえる。

「どうかしたんですか？」

また。

まただ。

この、男は。

人の耳元で息吹きかけながら話すのは、絶対にわざとに決まっている。

決め付けるのはよくないというけれど、なんだか間違っていないという妙な確信が持てるのだ。

危険な気がしているんだ。

「っ！」

僅かな動きで後ろに振り出した肘は、狙い過たずデルの骨を直撃した感触があった。

鈍い叫びながら、影は動かない。

代りに、外で十数羽の飛び立つ羽音が聞こえて、気配が消えた。

一瞬だけれど張り詰めた意識を開放すると共に、身体力が抜ける。

「急になにするんですか？」

「べっつにいいいっ」

王子の腕も緩んでいるので、そのままストンと床にすわりこむ。

磨いたばかりの床の上はまだ湿り気があって、そこに王子や俺の移動の後は残っていない。

俺は素足だからともかく、と王子の足元をみるがそれは会って以来変わらぬ皮のブーツだ。

今日は風が吹いているけど乾燥してるし、砂埃だって舞ってた。

そして、俺たちは外からこの宿屋に来たんだ。

掃除をしていた俺はともかく、どうして王子は埃ひとつついてないんだ。

「そんなところに座り込んでないで、椅子にすわったら良いじゃないですか」

「椅子が汚れる」

「リンカが座って汚れる場所なんで無いですよ」

「掃除したばかりの部屋でなにいつてんだか。」

ここに泊まるのは俺たちじゃねえんだから、勝手に座るな」

語尾を強くしたのは王子がスタスタ歩いて行って、普通に椅子に座ったからだ。

言ってるそばからやるあたりが、もう性格がつかがえて否になる。

でも、もう今は逃げられない。

雇い主である以上、仕事が終わるまでは逃げ出すわけには行かない。リンカの名にかけて。

「紅茶でも飲みませんか？」

「誰が、誰と」

「えーここにいるのは誰でしょう？」

つまり、俺が王子と。

といたいわけか。

口の中で笑いが融けた。

「冗談。

第一誰がその紅茶を淹れんだよ」

「それはカーク」

「彼は城だろ」

「……………」

「睨むなよ」

自分で淹れるとか、そういう選択肢は無いわけな。

ついでに俺が淹れるというのも却下。

紅茶なんて生まれてから一度も淹れたことないし、城で飲んだのが実際初めての一杯だ。

薫り高いその紅茶はそれまで飲んだことこそないが、見たことはあった。

雇い主が上流階級の連中となると、やたらこの匂いが鼻につくのだ。

「第一まだ紅茶のセットはもってきてねえぞ」

「ここにあります」

手品のように王子の手元に茶器が現れる。

白滋に薄墨の青を揺らして、のらりくらりと適当に描いたような線が揺れる。

書いたやつはよっぽど眠かったのかもしれない。

が、それは見ているだけで不思議と心が落ち着く。

今回は落ち着くよりも飽きたというほうが強いけど。

だって、同種のカップも用意よく二つ分だ。

「後は淹れてくれる人がいれば完璧なんですが」

「やったことねえよ」

「じゃ教えましょうか？」

立ち上がる王子に先じてドアに向かう、その先に影が現れるのは予想済み。

「て、あんたっ？」

てつきり王子の護衛とかだと思って思いつきり突き出した前蹴りは、綺麗に決まった。

さきほどまでテーブルにいたはずの。移動していないはずの王子に。

「なんで、いつのまにっ」

どうして前に立っているんだ。

まず攻撃、の俺の前に立つなんて、こいつ馬鹿か。

「大丈夫か？」

悪い、まさかあんたが来ると思わなくて思いつきりいつちまった。おい、立てるか？」

身体を二つ折りにして倒れたまま声もなく、磨いたばかりの床に王子のキラキラ光る金髪が流れる。

その形良い口が、何かを呟く。

「え、なんだって？」

自然と俺は王子の口元に耳を寄せていた。
辛そうな呼吸音に、マジですまないと心から謝る気だった。
こいつが、妙なことを考えなけりゃあな。

耳を近づけたとたん、首に腕がかけられ、そのまま床に引き倒される。

普通なら、ここですぐにやり返したりもできたんだけど、その直前から耳に生ぬるい感触を受けていて、強烈な脱力感に襲われて、それどころじゃない。

「うあああああっ!？」

な、なにっ」

「僕が来ると思わないって、他に誰がいると?」

暴れても拘束が解けない。

耳に吹きかけられる吐息で力が抜ける。

「は、はなれっ」

「そもそも僕の護衛はリンカ、君が倒したでしょう」

「か、カーク、とか……いいから、離、れ、ろっ」

「カークはシャルの執事ですよ。」

主人を置いて、僕について来るはずがありません」

そうかもしれない。

それ以前に、自分であいつが城にいると言い切ったのに、なんて失態。

回想に意識が飛びかけていた俺に、影が、襲つ。

いや、俺に、じゃない。

「どける、馬鹿!!」

腕を振って、王子の腹に叩き落とし損ねる。
その腕を床に縫いとめる黒い短剣を見て、安堵の息を吐いた。

「リンカ!？」

思ったとおり、狙いは俺じゃない。

それは不思議でもなんでも無いし、この短剣の柄に描かれたモノをみれば、至極当然だ。

「まだ来る。」

部屋の外出てる」

剣を引き抜いて、起きあがる。

王子はまだその辺にいるみたいだから、その前に構えつつ、窓に向かう。

短剣に描かれていたのは、職人芸の細工を施された赤い華麗な東洋龍の紋だ。

何度も見ているそれを、俺は知っている。

同時に、嫌と言うほど身体に叩き込まれた感覚が、周囲に殺気を放つ。

窓の外を覗くと、気配は消えた。

おそらく隠れただけかもしれない。
もうここまで見つかったのか。

「王子、俺、先に」

振りかえると、王子は床で蹲ったままだった。
動かない。

「王子!？」

さっきのようなことを考慮しつつ、近づく。
でも、今度は本気で伸びてる。

やばい、こいつにここで死なれちゃ困る。

「お、おいっ」

肩を引かれて、後ろに倒れかけるのを踏ん張る。
俺を押しつけて、濃い灰色の影が割り込む。

「デイルは大丈夫よね、カーク？」

姫の声がどうして聞えるのか、とか。

シャルダンがどうしてここにいるのか、とか。

二人でどうしてそんなに優しい、目で俺を見ているのか、とか。

「気を失っているだけです」

「はあ~~~~っ、驚かせんなよなあっ」

カークが王子を抱えあげて、ベッドに運ぶ。

俺が整えたばかりの、ベッドに。

白いシーツが影を引き、金の髪が同じく真白い上掛けに隠される。
それを確認して、シャルダンと姫がテーブルに着いて、カークが

紅茶を入れて。

「リンちゃんも、そんな顔してないでお茶にしましょうっ?。」

カップを掲げて、小さく首を傾げる。

それを「あ、可愛い」とか思っていたのに、俺の身体は全然別なことを始める。

ぼたりと、床に染みがつく。

丸く弾けて、飛んで。

やべえ。

これからここに客泊まるのに。

もしかして神経質な人で、染みひとつでここに泊まるのぼしやったら、女将さんたちの迷惑になる。

手伝ってたはずなのに迷惑かけたら、意味無いだろ。

そう思って床に落ちた染みを拭く。

でも、それは拭いても拭いても増える。

「なんで?。」

いくつも、いくつも落ちて、急に両脇から抱えられて、姫の隣の椅子に座らされた。

「心配しなくても、ディルはしぶといから」

大丈夫と微笑んで、白いレースの綺麗なハンカチを俺の顔につけた。

柔らかい感触と甘い生クリームの匂いがする。

「あんまり泣くとおめめがとれるわよ。」

「ロンって」

可愛らしい効果音付きで言われたのに、背筋に奇妙な寒気が這い登ったのは何故だろう。

「ひ、姫」

「なあに、シャル？」

ついでにいうと、シャルダンも怯えている。

この迫力はどーゆー環境で身につくんですか、とはとても恐ろしくて聞けない。

甘くて柔らかい砂糖菓子みたいな姫なのはどうしてと考えかけて、つい最近同じコトを考えたことを思い出した。

王子だ。

「……………リンカ」

ベッドの辺りから聞える呻き声に、姫の瞳が淋しさを灯す。

夜の砂浜に寄せる波みたいに、とても暗く寂しい。

どうしてこの王子は、それほどに俺にこだわるのかわからない。

何故と問い掛けても明確な答えは返ってこない。

姫も、シャルダン様も本当の理由は知らないのだという。

ただの気まぐれで、俺で遊んでいるだけなのかどうかと言われても自信はない。

俺の目の前のテーブルに、カークの手で黒いものが置かれる。

先ほど飛んできた紅龍の短刀だ。

禍々しい龍の踊る短刀は恐ろしくも有り、見とれるほどに美しくもある。

「俺、明日の朝出発します」

短刀をひつつかみ、俺は椅子から立ちあがった。

誰とも視線を合わせたくなかった。

「王子にも伝えておいてください」

腕に触れそうな姫の手を寸でのところで避ける。

「デイルが起きるまでいないの？」

「仕事があります」

扉を閉めて、はあと大きく息をつく。

ドアに寄りかかっている時間はない。

黒い剣の柄の赤い龍を撫でる。

その口元に爪をひっかけ、強く弾く。

すると、龍が口を開き、それを引いて、柄が開ける。

中には小さな紙切れが細長く丸めて詰められている。

丁寧に取り除き、柄を元の通りに戻して、黒い剣はベルトの後ろに通して隠す。

「おや、どうしたい？」

厨房に入っていくと、色褪せたアッシュグレーの薄手Tシャツに愛らしいうさぎのキャラクターがアップリケされたエプロンをつけた大柄な体躯の男がいる。

彼　この宿の主人は巨体に似合わず、ちまちまと手先の包丁で何かを作っている最中で、その横を素通りする。

俺は手紙にさっと目を通し、読み終わったそれをすぐさま火にくべる。

そうするのが、俺とあいつの間のルールだからだ。

「めずらしいことしてんなー」

軽く聞こえるように主人にむけた俺の声は、震えない。

無理やりにも明るく振舞うのは得意じゃないけれど、心配をかけるのが得策でないことぐらいはわかってる。

「そら、今日はおまえの送別会って、女将が言ってたからよ」

もうすでに話が回っているところは、さすが女将だ。

「たいしたこともしてやれなかったしな。

最後まで盛り大にやってやるよ」

さっきまでの反発心は出てこなくて、代わりに胸が強く締め付けられる感覚が襲う。

「そんなこと、ねえよ」

この村にいる間、身寄りもないリンカに、泊まる場所と仕事までも世話してくれたし、もうほとんど故郷といっても支障がないぐらい馴染むことが出来た。

全部ここの宿の夫婦のおかげなのだ。

「じらじら。」

そんなに泣くなよ。

まだ宴は始まっちゃいねえんだ」

「な、泣いてねえよっ」

深く追求される前に、俺は厨房から隣の食堂へと逃げ込んだ。

まだ客はまばらで、空いているテーブルが多い。

従業員もそこでおしゃべりに興じている。

まさに平和そのもの。

だれも、この町に刻龍なんて化け物がひそんでいるとは思わないだろう。

俺は壁際のテーブルに付いて、そのまま突っ伏した。

冷たい感触が伝えてくるのは、まるでこれから起こる事柄を予見する様で、心の震えが止まらない。

怖い。

会いたく、ない。

だが、会わざるを得ないだろう。

何より雇い主が会いたがっている。

それに今日の様子からすると、まず、間違いのない未来が用意されている。

どちらに転んでも、俺の望まない未来が。

「リンカ、おごって〜」

馴染みのウェイトレスがぐしゃぐしゃと頭を撫でまわす。

「おい、起きなさいってば。
起きないと、水ぶっかけるわよ」

本気でやりかねない女性なので、仕方なく顔を上げる。

「なにぶっさいくな顔してんの。
笑顔じゃないと折角捕まえた幸せ逃がすわよ？」

彼女を視界に収めながらも、俺の思考は先程読んだ手紙から離れずにあつた。

内容はいつものとおり、刻龍への勧誘がひとつ。
追記されている1行だけ書き添えられた文を除けば、ただそれだけの手紙だ。

「なんだよ、それ」

「異国のオージサマを捕まえたって、評判よお？」

「ああ？」

「今度のアんたの雇い主。」

一緒にここも出てくって、聞いたわ」

神妙な表情になったかと思うと、また思いつきり頭を撫でやがる。
容赦のないこの仕打ちも、王子に付いても刻龍についても、なくなるのは決まっている。

「やったじゃん、リンカ。」

大出世じゃないのっ」

出世といわれてもピンとこない。

もしもそうだとしても、俺はこれからあいつらを裏切らなきゃならないんだ。

出世どころじゃない。

「幸せってのはさ、掴み取るもんなのよね」

どこか悟ったような声に顔を上げると、見たこともないぐらい彼女は優しく微笑んでいる。

余計に、心苦しくなる。

自分が男だと偽り、騙しつづけて来たことを後悔しているわけじゃない。

後悔してしまえば、今までの俺の人生すべてを否定することになってしまう。

それは、いやだ。

俺は自分で選んでこの道を歩いているんだ。

いつだって、自分で選んできた。

なんだってやってきたすべてのことを否定する気はない。

でも。

「あたしもがんばんなきゃなー」

優しい手は、この村で始めて知ったわけじゃない。

それでも、ここはもう故郷みたいなものになっていて。

世界にこんな優しい場所があるなんて、ここに来るまで俺は知らなかったから。

「泣かない泣かない、一生会えなくなるわけじゃないんだから。なんか飲む？」

おごるわよ」

もう顔を上げられなかった。

声も、出せない。

絶対泣いている声が出てしまう気がしている。

「泣くなつてば。

男の子でしょ」

やわらかく抱きとめられる。

彼女のエプロンからは石鹸の香りがする。

それに太陽の香りも。

「いつでも帰ってきていいんだからね」

精一杯のウエイトレスの声は、少し涙を含んでいた。

ここの町の人たちはみんな優しくかったけど、とりわけ宿の店主と女将、そしてこのウエイトレスがよくしてくれたこと、俺は忘れない。

「うん」

腕に力を込めて、俺も彼女を抱き返す。

優しさの香りを忘れないように、息を吸い込む。

俺、絶対、忘れないよ。

何をなくしても、ここだけは、絶対。

「泣くなつてば」

涙声でいいながら彼女はさらに強く俺を抱きしめた。

8 #よくある寄道劇

澄んだ青とか突き抜けるような青とか、そこにわずかな雲母の欠片が漂っていたりする空は、とても旅日和だと言う人がいた。

言ったのは旅をしたことのない人。

聞いていたのは、旅人。

旅人は、ただ苦笑していた。

その旅人にとっての旅がどんな意味をもっているのか、目的などといったことは、旅人にしかわからないことだ。

だから、旅をしたことのない人は楽しそうに日常に戻っていった。

俺は思った。

旅人はきつと晴れの日が嫌いだったんだ、と。

雲一つない快晴の日を、俺は嫌いだったから。

そして、そんな日に出発したことを、あの町を出て数キロも進まないうちに後悔していた。

雨とはいわないから、せめて曇りなら良かったのに。

隣町まではどの方向でも、暫く森の中を歩く。

森の中と言っても、道なき道ということはなく、歩きやすいように土で平らに舗装されている。

轍の跡は少なく、圧倒的に馬蹄や人の足跡の方が多い。

けっこう物騒な道であるはずなのに、今日に限って何も、誰も出てこない。

出てきてくれないと、リゾートにはなんの問題もなく辿り着いてしまう。

「こうしてると、昔に戻ったみたいじゃない？」

馬上から姫が楽しそうに言う。

手綱を握っているのはシャルダンで、姫は彼の前で座っている。二人とも動きやすい旅装で、馬の扱いには慣れているのだろう。動かし方は長年馬に乗り慣れている人のものだ、とも思ったが、シャルダンの手綱を時折修正しているのは姫のようだ。

どうやら、姫の方が数段、慣れていらっしゃるらしく、シャルダンの操作は多分に危うい。

シャルダンの有能な執事カークはというと、3人分の荷物を乗せた馬を引いて、徒歩である。

「そうですね。」

「じゃあ、帰りは盗賊退治にでも行きましょっか。」

え。

「さんせい」

言い出したのは王子、賛成の明るい声は姫だ。

て、待てよ。

「盗賊退治って、何言ってるんだよ。終わったらとっとと国に帰れ。」

王子たちは当然そうするものと思っていたし、俺だって、リーズルで刻龍と会うセッティングをし、護衛までもが終わったら、とっとあの宿場町に戻るつもりでいた。

持ち物は少ないので持ってきてあるし、かまいはしないが、女将

にも皆にもすぐに帰るといつてある。

そうでなくてもあまりこいつらと長く同行したくない。
なにしろこの連中と来たら、一癖も二癖もある上に王族らしくもない。

あまり長く一緒にいて、情が移ったら困るじゃないか。

「じゃあ、今行くしかないわね」

そんな俺の心配を他所に、あっさりと言ってのけてくれるのは姫だ。

いやもう、普通じゃないどころじゃない。

ピクニックにでも行こうかというノリで、盗賊退治に行こうとか言う姫なんて見たことない。

「今って、この辺はダメですよ」

しかし意外にも、言い出した王子から止められた。

「この間やったあとだし、出てこないと思います」

やった？

何を？

まさか、ひとりで盗賊退治なんてしたんじゃないやねえだろうな。

そうだとしても、質が悪いつて有名なこの辺りの盗賊を、いとも簡単に「出てこない」と称する辺りが甘い。

いや、ましてよ。

こいつのこの性格ならあるかもしれない。

王子のくせに魔法使いで、その上幼なじみの折り紙付きの性格だ。もしかするともしかするかもしれない。

が、曲がりなりにも質の悪さにかけては名のある盗賊なのだから、王子に少しぐらい脅されたとしてもあきらめられては困る。なぜって、リズールにさっさとついちまうじゃないか。ついたら、いやでもアイツに遭わなければならなくなる。誰だって、嫌なことは先に伸ばしたいものだ。

「念のため聞くけど、そのボスって」
「無理だ」

聞こうとした質問を、沈痛な面持ちの声で遮られた。シャルダンは、どうしてか暗い顔で歩いている。まるで、いやな過去でも思い出したような。

「デイルは倒した相手のことは、一切思い出さないんだよ。一晩寝たら、綺麗さっぱり忘れてんだ」

こっちは何度そのとばっちりをくらったかわからない、と更にシャルダンの周辺の空気が重さを増す。それはよっぼどの目に遭ったのだろうなと容易に想像がつくほどで、俺は深く同情した。

「いや〜ん、シーちゃんひどーおい。
そんなことないですよ〜」
「それはヤメロ」

疲れたようなシャルダンと反対に、王子と姫は実に生き生きとしている。

昔から、この三人はきつところなのだろう。
そして、標的が一時的にこちらに一筋ずれているだけなのだろう。
そうにちがいない。
そうであってほしい。
そうであってくれ。

「リンカさん」

「なんですか？」

王子とは極力関わりたくないのも事実なので、俺はシャルダンのかける声に即座に向き直る。

すでに彼は笑うでも怒るでもなく、なんといいかなんでもない普通の顔をして、リンカを見る。

まっすぐに目を見て話す人だ。

それは見下すとか、そんなんじゃないかと、リンカの間違いでなければ対等な態度を示してくれている。

「君の系統ルートを聞いてもいいかな？」

もちろん教えてくれるよねと、優しい瞳で問う。

ルーツは、生まれた時に神殿で受ける儀式によってわかる、いわゆる先祖の分類のようなものだ。

神々の系統にいるものもあれば、獣の系統にいるものもいるし、精霊の系統や楽器、植物の系統のものもいるというように、それは多岐にわたる。

それが何を意味するのかを知っているものは少ない。

この人になら、なんでも答えてしまいそうだったが、俺は首を振った。

「俺、儀式を受けたことないんだ」

わずかにその瞳が驚きを示す。

彼のような貴族階級はたいていが神々の系統に属する。

だからこそ、俺のようなものがあるなんて、思いもよらないのだらう。

「そう、か」

でも、それから彼は何も聞かない。

ただ少し残念そうな顔をしている。

そんな顔をされても困る。

わからないものはわからないんだから。

「知りたいと思うことはない？」

考えたこともない。

あれは受けるだけで金もかかるし、俺はこれまでずっと生きるだけで精一杯だった。

一息つけたあの宿場町でだって、別にそんなものは必要なかったし、時としてあるほうが邪魔なことだってある。

「ないよ。」

いらねーし」

俺の軽い答えに、彼は何かを考え込んでいるようだった。

どうにもこの人は王子とは別な意味で貴族らしくなくて、何を思っているのかも読み難い。

それにシャルダンだけじゃなく、姫だってぜんぜんお姫様らしく

ない。

助けが待ちきれなくて、高い塔から命綱もなしに逃げようとしてみたり、いきなり人に女装させたり。

何を考えているのかさっぱりわからない。

俺の前を馬頭と歩調を合わせて歩いている王子は、やはりどうみても物見遊山の青年貴族だ。

性格は穏やかで、いかにも争い事が嫌いそうに見える。

が、その会話内容は正反対である。

「じゃあ、少し遠回りだけど、カルシユの森に神獣伝説があるそうですから、行ってみますか。」

観光がてらに」

護衛もつけずにここまでのおんびりと観光ガイドまでしている王族なんて、見たことない。

「神獣？」

「なんの？」

「たしか、黒い一角獣だったと」

姫の瞳が怪しくひかっただように思う。

女子供は大抵、伝説とかが好きだとはいついけれど、わざわざ自分で見に行こうなんて考える姫なんて珍しい。

どうしてなにがなんでも行きたいんだ、こいつらは。

そんなものに付き合っていられるほど、こっちだって暇じゃないんだ。

リズムルには早くつきたくない。

でも、王子と極力関わりたくない。

そのどちらを優先するかと聞かれても、両方としか答えようがない。

紅竜も王子も、俺にとっては両方が人生で関わりたくない者の一番だからだ。

「リズールに真っ直ぐいかねーのか？
だったら、俺は先に行ってるから」

多少苛つきながら、付き合ってもらえないと歩き出すと腕を引かれ、俺はあっという間に王子の腕の中に収まっていた。

「もちろん、リンカも行くんですよ？」

当然でしょうと断言しながら、王子は口元を綻ばせ、とてもたのしそうである。

どうみても、俺をおもちゃとして扱っているようにしかみえない。

「いかねー」

玩具にされてたまるか。

「僕の護衛でしょう？」

「本当は護衛なんていららないんだろ」

王子は彼自身を守る者なんて必要がないというだけの实力を持っている。

出会ってから、それほど時間はたっていないが、十分すぎる程にその片鱗を見せられている。

護衛なんて邪魔だけで、下手すれば実験体ぐらいにしか考えてい

ないかもしれない。

「風の流転」

ふつと俺を腕に抱えたままその姿がゆらぐ。

いつものとおり、王子の金の髪は光と風をはらみ、緩やかに波立つ。

つまり、魔法を使う前兆だ。

不思議に和らぐ光を内側から放つようで、その容姿も合わせてみると、とても人間には見えない。

童話に出てくる光を纏った導きの使いみたいだ。

どうしてか、俺はそれが怖かった。

触れてはいけないように、声をかけてはいけないように思えて、体が震える。

「逆さの神殿」

王子の紡ぐ魔法の言葉に、なんとか声を絞り出す。

きつと聞いてはいまい。

「何をっ」

自分の体なのに、言うことを聞かない。

思うように声が出ない。

いや、そんなはずはない。

そう思いこんでるだけだ。

きつと声は出る。

王子だって、至近距離で叫ばれたら、無視もできないだろう。

「 我らを女神の元へ導き給え 」

しかし、制止の声を発する前に、身体に浮遊感を感じる。
力ある言葉の余韻がガンガンと頭に響く。

耳鳴りが大きくなり、シャルダンと姫の抗議の声が遠ざかり、風が耳元を通り抜ける音で目を開いた。

高い。

かろうじて姫達の姿が確認できる程度だ。

むろん、それもすぐに木々の陰に見えなくなった。

「こ、こ、ここ」

「すぐに着きますよ」

「じゃなくて、」

俺と王子がいる場所は森の背の高い木々の更に上を、風のように動いていた。

風とは逆方向に動いているようだから、おそらく違つのだらうけど。

とにかく高い場所には違いない。

「姫とシャル」

「少しの間落ちますから、口を閉じておいたほうがいいですよ」
「落ち」

「二人分の体重を支えてこの高さをゆっくりというのは、いくら僕でも厳しいですから」
「え」

考える間もないぐらい、今度は強い落下間に襲われる。
この高さから落ちたら、さすがにやばいって。
いくらなんでもこのスピードからなんて。

「なに考えてんだー！」

「あははははは」

癪だけど、楽しそうに笑う王子に必死でしがみついた。

こうすれば、何があっても道連れに出来る。

なんて、考えていたわけじゃない。

ただ怖かったから、しがみついていた。

風に声が混る。

この状況で何を言われても聞こえるはずがないのに、しっかりと
その言葉の意味まで理解した瞬間、足元がなにかふにやふにやした
ものを踏みつける。

「うわあああつ」

「落ち着きなさい、リンカ。」

もう着きました」

引き剥がされそうになって手を伸ばした俺を、王子は軽々と抱き
上げた。

目の前には少し見おろす形に端正な彫刻張りの青年の顔がある。
まっすぐに見つめてくる瞳は柔らかく、優しく、信頼できるもの
に思える。

「つい、た？」

「はい。」

最初の神殿、フィリストに」

力強く頷く様に安堵する事なく、引つ張られるように、そのまま後ろを振り返る。

誰かに、何かに意識ごと強制的に引つ張られるような感覚だ。

強く呼ばれるというのではなく、柔らかな存在が振り返った自分を迎えてくれるというような。

途方もないことを一瞬信じてしまっている自分がいる。

「神殿？」

でも、当然のようにそこには誰もいない。

風化した石造りの建物があるだけだ。

砂色のレンガを積み上げてつくられていたのだろうが、今は見る影もない。

屋根と呼べるものは見当たらない。

王子の腕から降るされ、廃墟の一番奥へ自然と俺の足が向かう。

廃墟。

そう、ただの廃墟だ。

なのに、さつきと同じ、誰かを求める感覚が溢れていて、優しくて懐かしい空気に包まれている。

俺は親を知らないけれど、きつと母親の腕の中のような、そんな空気だ。

「フィリスト神殿は、最古の神殿であると同時に、女神たちが最初に降り立つ」

「ちよつと黙ってる」

奥に歩いてゆく俺の後ろを、落ち着き払った王子の足音が追ってくる。

でも、俺にはそんなことを気にするほどの余裕がなかった。小さい頃の記憶は、養父に出会ったところからしかない。だから、母親も父親も俺は知らない。自分の系統なんて、調べたこともないし、知る気もない。シャルダンに答えたように、本当にいらなと思うていたんだ。

でも、この朽ち果てた神殿の中にと、どうしようもない郷愁が胸に広がる。

もうすでにいないものを求めようとする、自分がいる。

「リンカ？」

王子の声が、遠い。

壁に手をつく。

リンカを支えようとした腕を振り払う。

手の下に文字の感触。

「古代語、ですね」

「もうここには来ない、って」

「読めるんですか？」

読むというよりも、感覚に近い。

自分は、たぶんこれを知っている。

文字じゃない、なにかを。

愛し子よ、嘆くなかれ

優しさに満ちた言葉が直接心に語りかけてくる。

きつと戻ってくるから、泣かないでと。

できない約束を繰り返している。

できないとわかっていても、戻ってきたいと嘆いても、叶わない
じつ。

すべては、定められたこと。

誰が定めたことかと問われても俺には答えられない。

確かに覚えているはずなのに言葉よりも畏怖が先に立つ。

この世界を与えられ、慈しんだその存在に畏怖と同時に腹もたつ。
だって、どうして取り上げられねばならない。

俺たちは女神によって作られ、存在しているのに。

何故、滅びねばならない。

理由のわからない事柄にどうしようもなく腹もたつた。

リンカ

打ち付けようとした拳の前に声が降りる。

「……な」

ただひとりを残すなんて

彼女ひとりでは

だめよ、やっぱりおいていくなんて

ひとつの音だったものが複数に被さり、争う。

あの子はただ一人ここで生まれた

帝の命令をうけないただひとりだ

あの子が残ればいつか戻る日まで、世界は守られる

落ち着いたひとつの声が反論する。

強い言葉に複数の女神たちの声は押し黙る。

落ち着いた声を放つ女神に、俺は固まる。

この人が寄せるそれはつき放つだけの冷たさではない。

ただ与えらる絶対の信頼に、俺は安堵と不安と動揺に動けなくな
った。

そうだな、リンカ

声を遮り、黒いものが降ってくる。

黒い、羽だ。

(これは、刻龍の……合図っ)

女神の声が消え、現実に対面しているのに、俺はびくりとも動け
ない。

動かなきゃいけないと感じているのに、なにかに遮られるように

指一本動かせない。

唯一動くものは。

「王子、ここを出ろ」

「え？」

「早くしろっ」

石が擦れて落ちてくる砂が煙幕を作りだす。

「リンカも」

「すぐ行く！」

走れ！」

動け、と強く願う。

王子が俺から離れたのを見届けた刹那、俺の頭上影に落ちた。

9 #よくある二人劇(前書き)

王子視点

9 #よくある二人劇

リンカは馬鹿な娘だと思っ。

僕を　　というか権力者全般を嫌っているくせに、こっぴつ時に己を省みず、僕の安全を真っ先に気にする。

こっぴつ人間をお人良しというのだろうなと考えながら、僕は滅多に抜かない剣を抜き放つ。

剣を使うのは苦手なただけ。

「マジック真風　　っ」

魔法を纏わせて振るった剣は、その先に落ちてきていた大きな岩を粉々に分解した。

後には砂煙が上がっているんで、リンカが無事かどうか、わからない。

だが、上に誰かがいるのはわかる。

青い龍の紋が刺繍がされている黒いマントを風にはためかせる男は、黒い布で顔の半分を覆っていた。

「ほう、あの状況で外に出て、すぐさま剣に魔法をまとわせ、岩を砕くか。

なかなか楽しませてくれそうじゃないか」

くぐもっているが、拡張機でも使っているよう彼の声はよく通る。

「こんなところまでくるとは、ご苦労なことですね」

「あんたこそ、わざわざこんな場所で寄り道とはな。

それとも、わざとか？」

からかう声に平然と返してやる。

「ええ。」

もちろん、わざとですよ」

気がついていたので、とでも言いそうな男に畳み掛けていう。

「こうでもしないとリンカと二人きりで話が出来ませんから」

折角リンカを落とすために、幼馴染みたちを置いてきたというのに、こいつのせいで邪魔をされて、僕は自分でも不思議に思うほど不機嫌になっていた。

自分の作った筋書通りに進まなかったというだけじゃない。

僕は自身が本当に、リンカを気に入って初めていたことに気づいた。

触れる度、言葉を交わす度に感じる、リンカの魂の純粹さや強さが僕を引き付け、引き寄せる。

「それを邪魔したんですから、それ相応の覚悟はしてくださいね」
「なにを寝ぼけたことを」

ガラガラとリンカが岩を退かせるために動かす音がする。

彼女が出てくる前に、これは早急に勝負をつけなければいけない。出てきたら、きっとあの時のように巻き添えにしてしまう可能性は十分にあるだろう。

「ちょっと時間がないんで乱暴になりますけど、いいですよね」
「行くぞっ」

僕はポケットから白い布を取り出し、それを広げて地面に置いた。布には既に爆風の魔法を発動するための紋を描いてある。

「発動ラン」

風は僕の声に合わせて集まり、すぐに巨大な竜巻となる。

「なっ？」

「うわああああっ」

刻龍の彼は竜巻につれられて、そのままどこかへ飛んでいった。

瓦礫を踏む足音が後ろから近づいてくるので振り返ると、リンカがうつむいたまま近づいてきていた。

「あなた、本当に護衛が必要なのか？」

「詠唱には時間と集中力が必要なんです」

「でも今」

「それはちよつとした種のある手品みたいなもので」

「さっきの刻龍の幹部のひとりなんだけど」

拳を握り、肩を震わせているのは、心配からかと思っていたけれど、どつやら違ったらしい。

「そうなんですか」

僕があっさり追い払ったのが悔しかったのだろう。

そんなところは全然子供だ。

彼女の身体を抱き上げる。

「なんにせよ、リンカに怪我がなくてよかった」

「てゆうか、自分の心配しろよ。」

狙われてるのが自分だってわかって」

はつとしたように、口を押さえるリンカ。

狙われているのが自分だってのは、もちろん承知していることだ。なにしろ、この長旅の間にいくつこんなことがあったか数え切れない。

うつかり口を滑らせるとは、ね。

せつかくなので突っ込まないで流してしまおう。

「さて、そろそろリズールに行くとしますか」

「え」

意外そうに問い返すとは珍しい。

「おや、不服ですか？

たしかにもう少しゆっくりしたいですけど、戻らないと」

「あ、いや、そういうわけじゃ」

「こうして二人きりという機会はなかなかできなですし、僕としても名残惜しいんですけどね」

「だから、そうゆうわけじゃない」

「姫やシャルは気がきかないし、刺客はもつと無法ですし」
「きけよ」

きいてはいるけど、リンカが怒ったりあきれたりしている姿も可愛いので、僕はついからかってしまふ衝動を押さえられなかった。

「この仕事が終わったら」

「俺は帰るぞ」

「うちに来ませんか？」

うちというのは、世間一般でいうような小さな家ではなく、当然クラスタール城を指していると気づき、リンカは強く僕を睨みつけてくる。

冗談にも程度というものがあると、彼女の強い視線が語る。

「だから、帰るって言ってんだろ」

「考えて置いてください。」

できれば、リンカ自身の意思で来て欲しいので」

もちろん、こちらもせっかく見つけた女神を手放すつもりなんてない。

誰がなんと言うと、リンカが僕にとってのたったひとりの女神だという事実は変わらない。

これ以上の宝などないと伝えられる女神を、僕は手放すつもりはない。

「考えるまでもない。」

行くわけないだろ」

一瞬の逡巡の後、彼女は断った。

ビジネスとしてはかなりのビッグチャンスのはずだ。

しかし、断った。

断る理由はやはり、それほどに僕が嫌われているということなのか。

「いいかげん、冗談はやめろよ。」

あんたには可愛い婚約者がいるじゃないか」

「断りましたよ」

目の前で断ったのに、リンカはまだ信じていなかったらしい。

「そんな簡単なもんじゃないだろ」

「公式に発表するには国に帰ってからですが、姫も納得してますし」

「でも、お姫さんは」

「僕の姫は、リンカひとりです」

まっすぐに見ると、リンカの瞳は吸い込まれそうに深い色をしている。

晴れた夜空の瞳を恥かしさと怒りで潤ませて、泣きそうな顔で僕を見る。

沸き起こる自分の中の感情が語るならば、それは何よりも愛しい光を放つ。

「さあ、リズールに行くぞっ」

元気に僕の腕から飛び降りて、さっさと歩き出そうとするリンカ。歩いて戻ったら日が暮れてしまうに違いないのに。

でも、まあ、リンカと二人なら野宿でも楽しいだろうと、僕には容易に想像できる。

「おい」

「なんですか？」

「ここってどこだ？」

「ルクセールの」

「じゃなくて。」

さっきの道からどんぐくらい離れてんだよ」

「大体、馬で1日分ですか」

「馬？」

「短距離移動でしたからね」

「まあ、戻れない距離じゃないか。

行くぞ」

距離があるといえはやめるかと思ったが、予想に反して、彼女はすたすたと歩き出す。

しかも方向も合っている。

さっきの魔法で、と言われたら何か条件でもつけようかと思ったのに。

「リンカ」

「魔法はいやだ」

「そういわないで」

「魔法使って戻るなら、歩いて戻ったほうがマシだ」

「嫌いなんですか、魔法」

「嫌いだ。」

「魔法も、魔法使いも」

そういえば、城で眠りの魔法を使った時もひどく嫌がっていた。

女神の関係者が魔法を嫌がるとは聞いたこともないし、別な何かがあるんだろうか。

「……僕も？」

「最初っからそう言って……なかったな。」

とにかく、俺は魔法とか貴族とか王族とかは大っ嫌いなんだよっ」

僕は環境のせいか大抵の言葉には慣れていたはずんだけど、リンカのこれは効いた。

心の中が暗く、淋しく、闇が広まってゆく。

前を歩くリンカの腕をとって、抱き寄せる。

「なんっ」

「そんなに、悲しいことを言わないでください」

僕は誰になにを言われても気になったことはなかった。

世界中の人に好かれようなんて思っていなかったから、別に僕を嫌いなら嫌いでいいと思っていた。

でも、リンカに嫌われることは、拒絶されるのはどうしようもなく辛い。

「お、い、なあ」

「嫌わないで、ください」

リンカに拒絶されるだけで、どうしてこれほどまでに自分が絶望するのか、最初はわからなかった。

あとから考えると、たぶんこの時に僕は彼女に落ちていたのだと思う。

女神だらなんて理屈で恋をしたわけではなく、リンカだから好きになった。

ほんの一日前に出会ったばかりなのに、僕にはリンカが一緒にいない世界でどうやって暮らしていたのかを思い出せても、到底同じ毎日が過ごせそうにない。

「な、泣くなよ、男だろっ」

わかった、わかったよ。

できるだけ嫌わないようにはするから離せ」

焦った声でリンカが譲歩する。
できるだけ、では足りない。

「それと、俺は別に王子とか姫を嫌いじゃないぜ。
だって、」

全然王族らしくねーもん。

けなされているのかもしれないのに、僕の心は絶望から開放され
た。

あとは、リンカが魔法を嫌いだという点をクリアすれば良いって
ことだ。

「ありがとう」

「っは、離せて。」

「やめろーっ」

暴れるリンカを押さえたまま、僕はもう一度呪文を唱える。

「え、だから、魔法はっ」

「怖かったら、さっきみたいにしがみついてていいんですよ」

「ぎゃーっ」

本気で怖がっているらしく、しがみついてくるリンカを強く抱き
しめる。

まだ口実がないとこうさせてくれないのはとても残念だ。

触れるだけでも嫌がられるのは、それだけでも少し傷つくんだけ
どな。

魔法の風に乗って運ぶ途中、僕は気がつかれないようにリンカをつむじにキスをする。

この手にした女神が離れていかないように、産まれて初めて女神に希った。

リースルの手前で降りると、リンカは借りてきた猫みたいに大人しくなっていて、さすがに心配になる。

だけど。

「言っても無駄だと思っけど、ここは気をつけるよ。

あんた、高額のお金をかけられてるから狙われるぜ」

「そうなんですかあ」

気遣って言うてくれた告白に頭を撫でて返すと、リンカは口を尖らせながらも恥かしそうに反対を向いてしまった。

「心当たりありまくりって感じだな」

「何故か恨みを買うことが多いからね」

「性格だろっ」

声音がだんだんと優しくなっている気がして、僕はもっと嬉しくなって、もう一度リンカを強く抱きしめる。

「やめろーっ」

大好きだと告白したら、リンカは逃げるだろうから。

「僕を守ってくださいね、護衛さん」

今はただ、そばにいてくれることだけを願う。

「っ、し、仕事だからなっ」

腕の中でリンクは変わらず、つれない返答をくれた。

10#よくある宿屋劇(前書き)

もう少し王子視点

変えるのはよくないんですが……変えてごめんなさい。

10#よくある宿屋劇

リズールの俗称は、石の都という。

この辺りでは鉱物や宝石の類いが高純度で取れることが多いからだ。

だから、坑夫や細工師といった職業のものが多くいる。

そして、当然ながら医者も多い。

鉱物を掘る時の砂塵を吸って、体を患うものがあるからだ。

あまりにそれが多いのと、資源がなくなってしまうのを恐れ、神殿で規制をかけたこともあるくらいだ。

この街は大都市でありながら、領主や王族といった者がいないことでも有名だ。

街の治安、統制はすべて神殿で行われており、ここの神殿長が実権的支配者となっている。

故に、ここで良い政治統制を行った神殿長は、大神殿長となりうる可能性がもつとも高い。

だが、ここで悪政を行う場合、すぐさま神殿長は神官としての資格と権威を奪われる。

「それでいつ、そのアジトに乗り込むんですか？」

先に来ていた姫やシャルダンたちと合流した後、カークがとってきた宿の一室で平然と僕は尋ねる。

部屋はリンカがいうには一級クラスの広さだそうだが、城と比べれば納屋ほどの広さしかない。

内装も至って質素で、大きめのシングルベッドがひとつと、テーブルと椅子が一組しか置かれていない。

床も簡素な絨毯が敷かれているだけだ。

これだけの部屋に王族二人と貴族一人が泊まるはずもなく、二つと同じような部屋をもうひとつとつてある。

本来なら三部屋はとりたいところなのだが、やはり三人も刻龍に狙われているとあっては、そんなことはいっていられない。

「そうじゃねえだろ」

怒っているような、呆れているような声で、リンカが唸る。

彼女はどうも怒りっぽい。

そんなに怒っていて疲れないのかと思う。

でも、怒ってもなんだか微笑ましいので、効果は無い。

「さっき俺が言ったのきいてたか？」

「あんな賞金首なんだぞ」

「わかってるって」

「ぜってーわかってねー」。

シャルダン様たちからも言ってやってくださいよ」

話を振られたシャルダンは、努めてこちらに関わらないようにしている。

傾けているのは、城からもってきたこの地方独特の紅茶葉でいれたレカンタティーだ。

そのせいもあって、リンカの機嫌はとても悪い。

俺の前でそれを飲むのは何かの当てつけかと言いたげな視線が、僕には見えていてなんだか微笑ましい。

リンカのいろいろな表情が見られることがとても嬉しい。

「姫」

「カーク、お茶菓子も欲しいわねえ」
「すぐにお持ちします」

まったくこちらを気にしていない彼らに、またも唸りだしそうなリンカの頭を軽く叩くと、涙目で強く睨まれた。
本人にその自覚はないが、僕には小動物のようで可愛らしい。

「で、いつ？」

なにかを言おうとして開かれた口は、数度開閉したあと、諦めて閉じられた。

「まだわかんねえよ。
夜になってからだ」

言い捨てて、ベッドによると毛布を一枚剥ぎ取り、リンカは床に座る。

毛布を巻き付けて、膝を丸めるとさらに小さく見える。
もう、何か質問に答える気はないらしい。

「まだ眠るには日が高いわよ」

もったいないと姫が近づくと強く睨まれ、彼女の足も止まる。

「あなたたちのおかげで疲れてんだよ」

すっかり居竦んでしまっている姫に代わり、言ってみる。

「どういたしまして」

「ほめてねえよっ」

あの寄り道以来、あんまり可愛すぎて、どうしても僕には笑えてしまう。

それをみて、シャルダンがガシャリとカップを取り落とした。なにかをまた思い出したのだろう。

さて、ここからはリンカのためにも三人にはご退出願わないとならない。

そんな場所、そんな体勢では、休まるものも休まらない。

部屋の中を見回し、できるだけ丁寧な言葉を紡ぐ。

「ああ言ってるし、僕達も休んで置こうか」

まず、姫が立ち上がる。

続いて、わたわたと慌ててシャルダンも立ち、彼らが出た後で力ークが食器をもつ。

「それは置いておいてもいいよ」

「いえ、あちらでシャルダン様が飲まれますので」

なんだかんだ言っただけで主人第一の忠実な部下が出て行ってから、僕は廊下に出す。

「おやすみ。」

姫、シーちゃん、カーク」

彼らの目の前で、ドアを閉める。

これで、部屋には僕とリンカしかいない。

ゆっくりと膝を抱えて毛布に包まるリンカに近づく。

と、彼女が顔をあげた。

なんだよと、声には出さず、目に不審の色を浮かべている。

「ベッドで眠ったほうがいいですよ」

実際、今日はこちらの勝手ですいぶんと連れ回してしまった。

「こっちのが慣れてるからいいんだよ。」

それに、ぐっすり眠れちゃまずい」

「僕のことなら心配しなくても」

「誰があんたの心配なんかするかよ。」

十分強いくせに」

そんな、少しぐらい心配してくれてもいいのに。

しゃがんでも、リンカと同じ目線にはならない。

それをどうにか近づけるために、小さな体を抱え上げ、ベッドに置く。

よほど疲れているのか、諦めたのか、暴れる様子はない。

「じゃあ、何を心配してしているんですか？」

同じ目線では、とても泣きそうなリンカの髪を撫でる。

城の医務室の時と同じだ。

縋るような目に引き寄せられる。

「何も」

かすれた小さなリンカの声は、そうは言っていない。

彼女の小さな体を引き寄せる。

「何も心配なんかしてない。
あんたたちは無事に国へ戻り、俺もあの町に戻るんだ。
心配することなんて」

心配事なんて、一つもない。

リンカのその言葉は、それ自体がひとつの願いの響きだ。
元の当たり前の日常を望んでいる。

あまりに泣きそうなので、僕にはそれ以上聞くことは躊躇われた。
ここで刻龍のことなんて聞いたら、リンカは本当に泣き出してし
まいそうに脆くみえる。

だから、張り詰めたリンカの気持ちをほぐすために。

僕は小さなリンカの額に口づけた。

11#よくある伝承劇(前書き)

まだまだ続くよ、王子視点

11#よくある伝承劇

室内からはくぐもった音が聞こえている。

中にいるのは三人　姫とシャルダンとカークだろう。

中に入るのが気まずいわけではないが、僕には笑って済ませてもらえないかどうか、自信がない。

右顎の辺りをさすり、その痛みに僕は苦笑いする。

「殿下？」

静かにドアが開かれ、カークに招き入れられる。

まったく、気配を殺そうとしてもこの男の前ではまったくの素人技なのだと思い知らされる。

だからこそ、シャルダンの側近として、執事と護衛の両方を兼ねているのだろう。

部屋に入ると、姫はすぐさま立って、荷物から応急セットを持ち出して来た。

その間に僕がシャルダンの隣に座ると、後ろからカークがお茶を入れたカップを差し出す。

「追い出された、のか？」

シャルダンの質問に僕が答えるよりも先に、姫が憤慨した様子でまくしたてる。

「リンちゃんをいじめるからよ」

つけられた薬がしみるのは、一番効いて、一番しみる薬を使っているせいだろうか。

それを堪えて、僕は笑って返す。

「いじめてるわけじゃないんだけどなあ」

ますます不機嫌そうな姫に、湿布薬を叩きつけられた。

「本気だから、タチが悪いんでしょう。」

「デイルの場合」

姫の本気も痛い。

「すごくしみる。」

「え、本気っ？」

「あんなのに、おまえが？」

「あんなのとは酷いな。」

「僕の運命の女神だぞ」

耳慣れない言葉に、カークが首を傾げている。

彼が知らないのも無理はない。

これは俺たちがまだほんの小さな頃に聞いた話だから。

「運命の女神って、子供の時の叔父上の御伽噺の中のあるか。

あれを信じてるって？」

「しかも、あんなガキがそれっ？」

容赦ないシャルダンの言葉には、さすがの僕も傷ついた。

たしかに今二十歳の僕たちと比べれば、まだ十に満たないリンカはほんの子供でしかない。

リンカからみた自分は、どうしたっておじさんと呼ばれるだろう。

「シャル、言い過ぎよ。

確かに嘘みたくない話だけど。

でも、リンちゃんはそんなの関係なく、デイルの心を捕らえたの」

それでいいじゃない、と姫はお茶をすすった。

彼女の言葉に僕は安堵する。

彼女の言うように、確かに最初はただの子供だと思っていた。

ただリンカを取り巻く人々に触れ、彼女自身の行動や言動が確かに琴線に触れて、ただそのままのリンカがとても愛しくなっていくのに時間はかからなかった。

「どんな格好をしても、リンカは綺麗だよ。

このラルク石の原石みたいだね」

小さく秘密の言葉を僕は紡ぐ。

開いた自分の右の掌の上に虹色の光が灯り、リンカに渡した指輪よりも十倍はあるラルク石が現れる。

光はその石の内側から溢れており、壁面に僕ら四人の影を幻想的に揺らしている。

姫、シャルダンもだが、恐らく僕自身の瞳も、とてもなつかしげであることだろう。

石を見ながら思うのは、遠い過去の冒険の思い出。

子供の頃、旅暮らしの叔父上が帰ってくる度に僕たちは話をせがみ、彼が来なくなったら頃から三人で冒険をするようになっていった。その中でも最高だったのはラルク石の輝くばかりの資源を称えた虹色の湖だった。

そこで出会った一人の女性に僕は欠片のひとつをもらったのだ。

貴方のたった一人の女神にそれを渡しなさい。

白い布を一枚纏っただけの彼女はまるで絵本に出てくる女神のよう
うで、ゆるく微笑みながらも真剣な目でそれを託した。

あとはどうやって城まで帰ったか覚えていないのだけれど、三人
で僕のベッドに丸まっていたと、部屋付きの侍従から聞いた。

思い出を忘れないために、彼女との約束を守るために、僕は魔法
でそれを隠し、こうして魔法によってのみ呼び出せるようにした。

子供心にそれがどれだけ高価であるかも理解していたし、義母に
は疎まれていた。

だから、あの女性との約束を守るためにはどうしても隠さなければ
なかつた。

そういう魔法を編み出すまでは時間もかかったが、それまでは三
人だけの秘密の場所へ隠した。

王子が数多の魔法を操るようになったのはそれを隠し、絶対に見
つからないようにするという理由もある。

もともとの素質も手伝って、リンカのいうように大抵の護衛は必
要がないほどの力を手に入れた。

指を伸ばしたシャルダンが触れる前にそれは消え、部屋は元通り
の色を取り戻す。

「そんなのなくてもあの子、面白そうだけどね」

リンカとの約束をすっかり忘れて、姫は楽しそうに笑い、僕もう
なづく。

「それもある。
だからつい、な」

リンカの色々な表情が見たくて、彼女がどんなことを考えて生きてきたのか、生きているのかが知りたくて。

何を言えば笑ってくれるのか、知りたくて。

話を聞いているときのリンカのまっすぐな視線が眩しくも嬉しくあり、言葉一つでいくらでも変化する彼女がもう愛しくて仕方がない。

姫やシャルダンと合流する前、リンカに言った言葉は確かに本心だ。

出会わなければ知らなかっただろうけれど、もう出会ってしまったから。

リンカがいない後の人生をどう生きていけばいいのか想像も出来なくなっていた。

そういえば、と思い出す。

遺跡で壁面の遺文に触れた後から少しだけ様子がおかしかった。出会ってからリンカがそこまで動揺するのを見たのは初めてだった。

必死に何かを探り出そうとしていたようにも思えるけれど、小さく何かを言おうとして、何度か小さな口が開閉していた。

あれは、一体。

小さな物音が聞こえ、隣の部屋だと気が付くより先に体が動いていた。

さつきまで一緒にいたし、リンカ自身の強さも理解している。

だけど、彼女自身がこの町に、刻龍という存在に脅えてもいたのは間違いない現実。

不安が騒ぎ立て、気持ちが落ち着かない。

リンカのいる部屋のドアを、僕がノックしても返事はない。幼なじみたちが駆けてくる足音もする。もう一度、僕は強くノックする。

「リンカ？」

今度は、さっきよりも強く大きく聞こえたはずだ。

「っ入るな！」

強い制止をはらむリンカの声は、反論を許さない。

それに一瞬だけ僕は躊躇したが、奥の焦りの響きとさきほどまでのリンカの不安げな様子が通り、ドアを開けて部屋へ足を踏み入れた。

窓から差し込む夕暮れの弱い光で照らされるベッドで、座ったままのリンカはまっすぐに目の前の影を見つめている。

丁度光と闇の境界線の辺りには丸いテーブルがある。

その側で一瞬だけきらめく紅を見た。

その紅で、僕はようやく気づいた。

テーブルには見知らぬ男がリンカを向いて、座っている。

「こんばんわ。」

リンカのお連れさんか？」

よく見れば、黒装束の背中に、光沢のある紅い糸で城で見た刻龍の紋が緻密に、鮮やかに刺繍されている。

「そうだ。」

もう用は済んだんだから、出て行け」

リンカは、ベッドに座ったまま微動だにしない。

「随分、面白い顔触れだ」

男は楽しげに笑った。

「おっさん」

リンカの畏怖と嫌悪と恐怖と恐怖を緋い交ぜにした声に男が嗤う。声だけでは結構若く、二十代後半ぐらいに聞こえる。

「クラスターの王子。」

次期公爵閣下。

それに……姫」

瞳しか見えないのに、僕は萎縮してしまつ。

男にはそれだけの存在感があつた。

「また来る、リンカ」

「いいから行け」

「例の件、考え直せ。」

「こちらは本気なんですね」

男は黒い風のように消えた。

「……なにあれ……」

僕の視界の端に映る姫は自分の両肩を抱いていた。さきほどの視線を思うと、僕も凍えるほどの寒さが足元からじわじわと追い詰めてくる。

とても自分たちでは敵わない相手と悟れるのは、王族らしくなく何度もしてきた冒険のためだ。

でなければ、どんな言葉で嘔みついていたかしのれない。

「刻龍の使いですか」

普段と変わらない平静なカークの声が、この場ではひどく不自然な気がする。

ベッドに座ったままのリンカは、小さく頭を振る。

「あいつは使いなんかじゃ……」。

くそっ、こんなに明るいうちに来るなんて」

そうはいつても、もうすぐ黄昏も過ぎる時間だ。

早いというほどではないだろう。

王子とリンカの間を縫って、まっすぐに姫が窓へ向かい、外を確認してから閉める。

窓が姫の手で閉められると、リンカはやっと息をつけたようだ。

「リンカ、大丈夫ですか？

まさか、なにかされたんじゃない？」

「んなわけあるか」

反論にいつもの覇気が無い。

彼女の恐れていた畏怖、恐怖そのものが彼か。

僕は歩み寄り、外したマントで小さなリンカを包み、そのまま抱き締める。

身じろぎするモノの、リンカの震える腕に力はほとんど入らない。こうしてみると、虚勢をいくらはつていても、やはりまだ小さな子供なのだ実感する。

「いいかげんに冗談はやめてくれ、クラストー王子」

「冗談なんか言ったことはありませんよ」

リンカから返されるのは、信じられないという弱々しい光で。

力で押し返して来る腕に僕は素直に押されてやり、マントの中の存在を見つめる。

「本気なら、余計にタチが悪い。

お姫様は取り戻したんだ。

あんたは国へ、家に帰れ」

帰れと言いながら、リンカの瞳は縋り付いてくる。

まだ、彼女の手は小刻みに震え続けている。

「さっきのやつは、誰です?」

いつも、何にも負けまいと虚勢を張っている少女が、これほどまでに本気で怯えるほどの恐怖に半ば確信はあった。

だが、確信するにはあまりに大きすぎる相手であり、違ってほしいという淡い期待で僕は問い掛ける。

「刻龍の……頭領だ」

黒ずくめの隙間から見た瞳を思い出し、僕は納得した。
一瞬目が合ったというだけで、あれだけの恐怖を与える男だ。
刻龍の頭領、それにリンカが震えるほどの恐怖を感じても、不思議はない。

「彼が、何故自らリンカを訪れるんですか？」

リンカが小さく息を呑んだのが分かった。

こちらから接触しようとしているのだから、刻龍の誰が訪ねてきてもおかしくはない。

だが、あえて頭領が出てきて、しかも殺す気もないというのが気にかかる。

僕らが部屋に入った時も、僕らを殺すことなど容易だったはずだ。それに本当に殺す気で来ていたなら、わざわざリンカだけの部屋を狙い、座って話などしないはず。

「それは、俺がアイツに気に入られちゃったからさ」

リンカは躊躇い、一度言葉を切る。

しかし、僕がなにかを言うより先に続けた。

「嫁に、アイツのモノになれ、と、言われている」

笑い出しそうながら、リンカは笑わなかった。

笑えなかったのは、それが本気だと彼女が確信しているからこそだろう。

「恋敵か」

なかなか手強いが、まあ、そうこなくては。

リンカを狙うやつがないことのほうが不思議だ。

「そういや、王子と同じだな。」

あの男も最初から俺が女と気づいていやがったよ。

俺の意志も聞かずに、二人とも勝手いいやつて」

リンカの声には本当に、まったく、出会った頃からこの町に入る前までにはあつた覇気が無い。

「一人に、してくれ」

僕にはリンカの言葉がそのものの意味とは反対に聞こえた。

それに今リンカを一人にしたら、連れ去られてしまいそうで。

「今、もう一度あの男に来られたら困るでしょう。」

守ってやるから、安心して眠りなさい」

本当は守られるべきは自分じゃない。

リンカがいなければ、この世界に意味がない。

理由なんか関係ないんだ。

リンカのいない世界は想像することさえ、僕には怖い。

だけど僕が差し伸べた手は、強く押し返された。

「違うだろ。」

あんたが守るべきは姫たちであつて、俺じゃない」

守りを拒むリンカは、顔を上げようとしない。

「頼むから、一人にしてくれっ」

腕を離れ、そのまま布団に潜り込んでしまいうリンカに伸ばそうとした腕は、横から姫に押さえられる。

「引き際も肝心よ」

「ですが」

「あなたがいると余計に安心して眠れないんじゃない？」

さつきも襲うかなんかして、殴られたんでしょ」

襲ったことなんて、ない。

ただ安心して欲しいと、自分がいるということを知って欲しかっただけだった。

だが、姫のいうことも一理ある。

今はまだ刻龍の頭領の来訪で、混乱しているのかもしれない。

「何かあったら、すぐに呼びなさい」

聞いているのかわからないが部屋を出る前にベッドと、部屋全体に魔法をかける。

自分の力で刻龍にどれほどの対抗ができるかわからないが、リンカとベッドに守護と防御の魔法を。

守らなければ、そばに置いておけない。

守れなければきっと、一生後悔すると心が警告していた。

ずっとずっと探し続けていた自分の女神を奪われないために、そのために自分は力をつけてきたはずだから。

「余計なことを」

部屋の戸を閉める前にかすかに聞こえたリンカの苛立つつぶやきに、少しだけ安堵して、僕はその扉を閉めた。

12#よくある取引劇(前書き)

リンカ視点に戻ります。

12#よくある取引劇

俺の目が覚めたのは、月が沈みかける宵闇時だった。

闇の中で目を開き、ついで大きく伸びをする。

いつも通りに感じる心地良い闇に気分が晴れるようだ。

昼間は女神の遺跡という場所でワケの分からない声を聞くし、ここについてすぐに紅竜から会いにきやがるし、なんだかいんなことが一遍にきてしまった。

「よつく寝たなー、久々に」

ベッドのわきで、うつ伏せに眠っている王子に気が付き、俺にもほほ笑む余裕が出てくる。

なんだかんだいって、よく眠れたのは彼のおかげでもあるのだ。たしかに、ベッドの方が居心地も寝心地もいい。

別に俺は王子のことは嫌いじゃない。

それに好かれていて、嫌いになる理由もない。

金を持っているからとかじゃなく、なんとなくだが今まであつてきた貴族たちとは違うとも思う。

姫やシャルダンもそうだが、王子たちと一緒にいるのは、俺にとって普通に友達というようで楽しい。

仕事でもなく、彼らが王族でもなければきつと良い仲間になれただろう。

だけど、俺は平民で最下層近くにいる者で、王子たちは王族だ。住む世界が違いすぎる。

もしもただの人であれば、王子からの誘いにも素直に答えられた

だろう。

どうせこの身は行く当てなどない。

ただ精一杯生き抜くことだけが、亡き養父との約束だ。

まだ生きる目的自体、俺にはそれしかない。

「おはよう、リンカ」

あまりに油断したからではないだろうが、声をかけられるまで俺は気が付かなかった。

彼がきていることに、気が付けなかった。

闇に現される気配に神経が高ぶり、恐怖が血流を駆けめぐる。

黒装束だからではなく、存在そのものを溶け込ませた闇から抜けだした男を前に、俺の肌にしわりと焦りが広がる。

彼は、刻龍頭領の紅竜。

「いつから、いた？」

掠れもしない冷静な自分の声に違和感を感じる。

今ここには王子が眠っている。

このままいなくなって欲しいと、願う。

「そんなに警戒しないでくれ。

良い取引をもってきたんだから」

動く気のない気配が声を立てずに嗤う。

「取引だと？」

「そうだ。」

リンカには、なかなか好条件だぞ
「聞くだけ聞いてやる」

紅竜は至極、楽しげにクスクスと笑っている。
それが、俺には恐ろしい。
王子を起こそうとゆっくり手を伸ばす。

「俺らがその王子と隣の部屋の姫、それに一緒にいる男を狙っているのは知っているな？」

目をそらせないまま、俺は首を縦に振る。

「特にその王子、かなり敵が多くてな。

生死を問わないものも多い」

「賞金もかけられているしな」

「狙ってたんだろ？」

手配書は見せたしな、と紅竜は嗤う。

確かに俺はこいつから見せてもらった。

まだ、こいつに求婚される前の話だ。

俺が逃げ出す前のことだ。

「姫はどうして狙われた？」

「王子のアキレス腱と思ったからだ」

「取引というのは」

とりあえず、姫はもう安全とみていい。

ここには紅竜がいるが、向こうにはカークがあり、一度姫を奪い返したほどの男だ。

そうやすやすとは姫を奪われない。

それに、姫が婚約解消されたなら、おそらく狙いはなくなるだろう。

だが、王子とカークは狙われたままだ。

シャルダンと姫は安全でも、王子とカークの二人がどこまで逃げ切れるのか、俺にはわからない。

ただ、刻龍には魔法使い狩り専門もいる。

いくら王子でも、それに敵うとは思えない。

俺が聞いている限り、あの男は魔法使いの中でも一、二位を争うほどの腕前らしい。

「刻龍が関わらなければ、あれほどの腕だ。

どんなやつにも捕まえられないだろうな」

姫が言うには、王子は五本の指に入るほどの腕前だ。

目の前で青竜を退けた事からしても、紅竜のいうように、王子を捕まえられる者はいない。

「脅すつもりか」

「条件は、わかるな？」

これ以上は俺も譲れないし、待てないぞ」

楽しそうな声は、俺が折れると見越している。

もちろん、昨日までの俺ならきつと条件など呑まなかったし、自分のためなら王子たちを刻龍に売ることも厭わなかった。

だけれど、彼らの温かさに触れてしまった今はもうそんなことは出来ない。

今なら養父の語っていた言葉も行動も分かる気がした。
この身を引き替えにしても、守りたいという気持ちだ。

「俺は男だ。」

今も、これからも」

カークの腕は知らないが、王子なら、或いは逃げ切れるかもしれない。
ない。

「王子達を見捨てるか？」

それもいいだろう、と。

もしも逃げ切れなければ、誰にも悟られずに消されてしまうというのか。

近くで俯せる王子に伸ばした腕を振れる前に落とす。

今は無防備なこの男を守りたい。

刻龍に人知れず殺されてしまうような最期は、この王子に似合わない。
ない。

「最後まで聞け。」

リンカは男で、あなたの嫁にはなれない。

だが、リンカという名をここで捨てる。

次の名は、紅竜、あなたが名付ける」

静かに揺らさないように、王子を起こさないようにベッドを降りる。

俺はゆっくりと、紅竜に近づく。

勝てないとわかりきっている相手に向かって、俺は拳を構えるよ
うな真似はしない。

だが気を張っていても、恐怖で体が震えるのは抑えられない。

「物分かりの良さは、生き残るための条件だよ。
名前はもう決めている。
おまえにぴったりの名だ」

紅竜は動かずにただニヤニヤと、俺がくるのを待っている。
努めてゆっくりと歩を進めても、俺と紅竜の間にそれほどの距離はない。

それだけゆっくりなのは、たった一間が怖いからだ。

「早く、云え」

俺がすべて捨ててしまえば、王子たちは刻龍に狙われなくなる。
普通に王子として国を受け継ぎ、治めることだろう。
誰にも邪魔されることなく。

俺がいなくなれば、きつとこの旅のことだって忘れるだろうし、
姫とのことだって元のように収まるだろう。
それがきつと一番自然で正しい形だ。

あと少しと言つところで立ち止まり、紅竜を強く睨む。

「髪はこれから伸ばすといい。
きつといい女になる。
名前は」

目を細めて俺を嗤っていた紅竜が、腕一本分の距離を引き寄せる。
理由は俺にもすぐにわかった。

「リンカ！」

鋭い王子の声が、闇色の部屋に響く。

「あなたはずっとリンカです。

名を受けるといふことがどういふことかわかっているんですか？」

寝ていたのかと思っていたので一瞬だけ、振り返らないまま俺は目を見開いた。

が、全部聞かれていたようだといふことに安堵している自分がいる。

忘れて欲しいけれど、忘れて欲しくもないとも思っている自分がいる。

出会ってから早く解放されたいと思っていたのに、その実はこんなにも頼りにしていた。

その今さらな事実が無性に可笑しかった。

もう後戻りはできない、今になって知ってしまった。

「わかってるよ。

王子達以上にね」

振り返ることが出来ないまま、赤い竜の刻印された黒マントで姿を隠される。

産まれたときの名前を捨てて、名前を受けるといふこと。

それはこの世界ではその者に命を預けること、支配を受けるといふ意味を持つ。

だからこそ、貴族の飼い犬や刻龍に所属する者達は統一された名前をもっているのだ。

支配をつけるということ則ち、逆らうこと能わず。
一生その身を捧げるといふことだ。

上から、体中に紅竜の嗤う声が響いてくる。

「新しいおまえの名は、ローズだ。

紅竜の女に相応しい名だろう」

紅竜が王子に向けた勝ち誇った笑い以上に、俺は隠しようのない
哀しい諦めの笑いを零した。

13#よくいる人質劇

王子に出会う一年と半月ほど前、俺はひとりでリズールに流れついていた。

一人旅を始めて約一年。

そこそこ慣れも出てきて、旅の路銀を稼ぐための滞在だ。

宿を確保したあとはリスキーな賞金稼ぎよりも、地味なバイトに精を出すことを選んだ。

腕に覚えはあるが、過信できるとは思わないからだ。

折しも、リズールは町の神官長を決める選挙の真っ最中で、祭さながらの人でこった返していた。

リズールの神殿といえば、大陸第二の地位をとり、その神官長は次期大神官になることが定められている。

だから、リズール神殿の神官長を選出するというのは一大イベントとなるのだ。

一週間、候補者たちが神官としての人格、能力を問われ、現神官長自らの手で選び出される。

時期は定められておらず、大神官の交代と併せて行われることが多い。

このちよつとしたお祭りに大陸中の人間が、リズール地方へ流れ込んでくる。

期間限定。

とはいえ。

「限度つてもんがあんだろ」

空になった皿を流しに置きながら、俺は疲れた声で零した。

俺のバイト先「ストレーナー」も例に漏れず、いつになく賑わいを見せている。

いつになく、というのは喻えでなく、この連日の影響が大きく関わっているのは、誰がみても間違いない。

朝から店中が目まぐるしく働いているというのに、一向に客足も喧噪も途絶えることがなく、しかも増える一方ときては働いているものであれば誰でも呟きたくもなるはずだ。

「五番にこれ！」

休む間もなく、大量に料理の乗った直径一メートルはあるトレイを二つ渡される。

「はぁーい……」

それを軽々受け取り、五番テーブルつて窓際だっけ、とか考えながら歩き出した俺の背を威勢のいい主人の声が追った。

「それ運んだら、ちっと休め、リンカ！」

「はーいっ！」

今度は元気のいい声を返して、俺は五番テーブルへ向かった。

休憩とようやくの食事。

どちらも心踊らないわけがない。

なによりこの料理の美味さでバイトを決めただけに、賄いに期待するのは当然ってものだ。

うきうきと踊る足取りで五番テーブルに向かった俺は、しかし、そのテーブルを見た途端に瞬間冷却の魔法コールドをかけられるように足を止めた。

そこには両足をテーブルに投げ出し、男女の綺麗所を両脇に侍らせた男がニヤニヤと俺を見ていた。

年は二十代後半くらい。

体格は至極良く、取り立てて悪い顔ではない。

ただ、大きな傷が人目を引く。

そのせいで、周囲の客が怖がっているというだけではなさそうだが、五番テーブルを中心にして、異様な静けさだ。

「じくろーさん」

口の両端を吊り上げる笑い方に背筋を毛虫がはいのぼる感覚を覚え、ざわざわと全身の毛が逆立つ。

だが、俺は努めて何でもない風に声をだす。

「足」

「お？」

「これ、置けねえんだけど」

隣にいた美青年が何かを言おうとして、男に止められる。

「だって、兄貴」

あからさまに不満な二つの色を受けながら、俺はひとつずつ皿をテーブルに並べる。

男はただ、それをじっと見ているだけだったが、なんとなく気味が悪い。

料理を全部置いて、さっさと立ち去ろうとしたが、そうはいかないとばかりに俺に声がかげられた。

「おじよーちゃん、結構、腕立つだろ？」

問いかけというよりも確信に満ちた台詞で、俺は振り返ってしまった。

会ったことは、ない。

しかし、リンカの見かけだけで「おじよーちゃん」などというわけがない。

旅に出てから一度も女と見破られたことはないのだ。

男の笑顔の奥の瞳からは、推し量る様子が見て取れる。

俺は警戒して、自然と身体を開き、腰を落として構えた。

直後、俺がそうするのを待って、空気に強く圧力がかった気がした。

男がほんの少し実力を見せているのだと気づいたが、それは殺気にかなり近い。

「お嬢ちゃんじゃねえ、リンカだ」

のどの奥で男が笑うと共に、不穏な気配も静まっていた。

「夜の散歩は趣味なのかい？」

今度こそ立ち去ろうとしていたのに、またも男は振り返ってしまったのだった。

このときの男は得体の知れない、ただの不審人物だった。だが、後に俺の一番望まない形で、彼が刻龍の頭領であることを知ることとなる。

そのときのことを思い出して、俺は幾分自嘲気味な笑みを浮かべた。

紅竜が俺に近づいてきたのもその後興味を惹かせてしまったのも、結局は俺自身の行動の結果だ。

今更悔やんでも遅いが、紅竜との最初の約束の期限はとうに過ぎている。

どちらにしろ答えを出さなければならなかったし、答えを出さなくても紅竜が俺を諦めるつもりがないことは明白だった。

紅竜は最初からそのつもりで近づいてきたのだと、後になってみれば容易に想像がつく。

でなければ、紅竜があんな場所にわざわざ食事にくる必要もない。それに、もしも俺が本当に男だったとしても、性別なんて些細なことと言いつつてしまふ人種であると俺は気づくべきだった。

大風が部屋に流れ込んできて、顔面にうちあたり、息が苦しくなって思考が中断された俺は窓に近づいて、急いで閉める。

後に続こうとしていた風が窓にぶつかって、ガタガタとイヤな音を立てる。

思い過ぎだろうが、何をしているんだと責められている気がした。

何故そんな所に大人しく囚われているのか、何故あんな王子を守ろうとしているのか。

冷静になってみなくても、会ったばかりのあんな王子を助けてやる義理など、俺には無い。

人の話は聞かないし、横柄だし、能天気な馬鹿王子のふりして人のこと騙すし。

ただ王子のことを思う度に、俺は感じたことのない温かな気持ちに戸惑う。

客と割り切っていれば、感じることもなかったはずの気持ちに、ゆるぎなかったはずの決意が揺らぐ。

一緒にいると、ただ暖かい。

あの腕の中にいると感じたことのない穏やかな温かさに包まれて、安心してしまう。

ただ、それだけしかないのだけれど、あの腕がなくなるのは惜しいと思ってしまうから。

「本当に、ただの金蔓だったんだけどなあ」

風は少し収まって、窓もあまり音を立てなくなってきた。

外は緑の木々が深く覆われていて、どうしようもない孤独感を募らせる。

猫の額ほどの空からは柔らかな一筋の光が伸び、まっすぐに俺を照らす。

これから起こることを祝福するというよりも、何か不安にさせる光だ。

今の俺は、いつもの少年の姿ではない。

頭には白いヴェールをつけ、服はなんの装飾もされていないおろしたての白いドレスだ。

月の白い光にドレスもヴェールも淡く光を放ち、鏡に移った自分を見たときは神々しささえ感じた。

自分と自覚したときは、かなりげんなりとした気分になったのだが。

たとえその場が粗末な山小屋の、壊れかけた机と椅子、シーツだけ真っ白のベッドしかない殺風景な一室であったとしても、これは婚礼の衣装であり、ここは花嫁の控え室だ。

俺は月の光から抜け出して、固いベッドに座る。

なれない姿のほずであるのに、俺自身は服の違和感を感じていない。

着慣れているように感じる不思議はあるが、ただそれだけだ。だが、動きにくいという点で、精神的な疲れはある。

「腹は減ってないか？」

突然、黒装束の男がノックもなしに部屋へ踏み込んできた。

その腕には籠いっぱいの果物と焼き菓子とサンドイッチがある。紅竜自らが、花嫁のご機嫌伺いに来たというわけだ。

籠を部屋に一つしかない小さなテーブルに置き、直ぐに紅竜は俺の元へ歩いてくる。

あの時とは違い、躊躇いも迷いも無い足取りで、殺気と見紛う威圧感も無い。

「お前は腹が減ると切なくなるとか言って、ぜってえ動かなくなるからなあ」

言いながら伸びてきた手に、俺は微かに怯えて目を閉じた。
ただの普通の男に見えるのに、それが紅竜であるというだけで反
射的に、だ。

手はただ優しく俺の頭を撫でただけだったのに。

「そんなに怖がらなくていい。

儀式が終わるまで手は出さないと言ったはずだ」

最初に会ってから求婚されるまでと同じ優しさ。

これが、この男の術なのだ気づいたのは求婚されてからだった。
まさに求婚された時の状況を思い出し、こみ上げる不満と不快を
押さえつけ、俺は言葉を吐き出す。

「夜までにやることがあると言ってませんでしたか？」

姿にふさわしい言葉遣いは自然と出てくる。

教わったこともないのに、体が知っていたかのようにだ。

対して、一時紅竜の手が唐突に止まった。

それを隠すでも誤魔化すでもなく、紅竜は俺の隣に腰掛ける。

簡素なベッドでも彼の座る勢いで一度だけ歪み、その拍子に俺は
体勢を僅かに崩した。

それを難なく受け止めた紅竜に支えられる形になり、俺は静かに
紅竜を見上げる。

紅竜も俺を見下ろしたので、互いの視線が交わったが、先に視線
を外したのは紅竜で、ゆっくりと俺の身体を起こして、体勢を直し
てくれた。

「ほとんどは終わった。
後は月を待つだけだ」

月を待っているのは名付と結婚という二つの儀式の舞台を整えるためののだと、事前に説明は受けている。

理由は、俺が聞く必要など無い。

時間がゆっくりと過ぎてくれるなら、俺には願っても無いことだ。

「約束は守っていただけなのでしょうね？」

確認の意味で聞いたのに、紅竜は少し居心地が悪いらしく、小さく身じろぎする。

だが、視線を合わせてからはそれもなくなった。

「何度も同じことを聞くなよ。」

そんなに俺は信用ならないか」

そんなの当たり前だと鼻で笑いたくなくなったが、堪える。

犯罪者の親玉相手に、俺が信用するわけが無いと紅竜だって知っているはずだ。

俺が真っ直ぐに見返すと、紅竜はまた視線をさまよわせる。

何かを隠しているようにも見えるし、妙な様子に俺は小さく首を傾げる。

「なんかリンカがそういう言葉使うのって
変ですか？」

この姿ではこの方が自然だと思いますが」

「いや、変じゃないからおかしいんだ。」

二人のときは元の口調で話せ」

柄になく照れたように頭を掻く紅竜の様子に、ようやく俺は合点がいく。

まさかと思ったが、刻龍の頭領である紅竜は俺なんかを相手に緊張しているらしい。

「じゃ、また来る」

そういつて姿を消すのは、今日はもう四回目だ。
またしばらくしたら来るだろう。

「変なやつ」

俺はベッドに座ったまま両目を閉じた。

見張られている目は感じないが、決して逃げられやしないことだけはわかる。

何と言おうと、紅竜は刻龍の頭領で、ここは彼らのアジトのひとつなのだ。

世界最強といわれる犯罪集団に、たった一人で刃向かうほど俺は愚かではない。

王子たちは本当に助かるかどうかという確信は、まだ持てない。

紅竜が言うのを信じないわけではない。

しかし、刻龍全部が本当に紅竜に従っていると、王子の件を見過ごすという命令を承諾すると、どうしても俺には考えられないのだ。

何度か仲間と話す姿を見たことはあるし、従っている姿だっけ知っている。

だけど、どうしても俺には。

どうしてここにいいのかといえば、自分がこうすることで少しでも時間が稼げればという浅はかな考えからだ。

王子たちに早く遠くへ逃げてほしいと思う反面、自分を助け出しに来てくれるような期待という、二つの気持ちに揺れる。

俺は俺自身がどうしたいのか、まだ決めかねていた。

14#よくある相談劇(前書き)

王子視点。

14#よくある相談劇

僕は自分がそれほどリンカを好きだという自覚は無かった。

姫たちには確かにそう口にしたし、僕自身も自分自身を偽る愛の言葉を口にしてきた自覚はあった。

リンカは僕自身にとって必要な駒になることは確かで、そのためであれば「好きだ」と偽ることも造作ない。

それは姫もシャルも、わかっていたことだ。

今の僕らに必要なのは、僕が王になるために本国にいる僕の継母つまり、女王に対抗するだけの力なんだ。

神権政治が主となる国で、女神の眷属はいるだけで切り札となり得る力を持っている。

たとえ、それがただの子供だとしても。

本国から離れている今なら、いくらでも代わりを立てればいいだけの話だった。

「それで、黙ってリンちゃんをさらわれるのを見てたっていうの。なにしてるのよ、ディルっ！」

わかっていたはずなのに姫はこうして目の前で怒っているし、僕は去り際に見えたリンカ笑顔が脳裏に焼きつき、自分でも思った以上にダメージを受けている。

リンカが姫のように簡単に泣いてくれたら、ここまで残らなかつたかもしれない。

だけど、涙を流すことさえ諦めてしまった笑顔は、僕の胸に強く爪を立てていった。

あの少女が僕を助けるために自らを犠牲にしたことは明白で、それが望んでのことではないことは間違いない。

でなければ、あんなにも恐怖していた相手に、自分から進んで向かうことなどないだろう。

「やっと見つけた女神をさらわれて、どうする気なのよ」

僕も姫も、継母ほどではないにしろ、神官としての力はあるし、これだけ離れた場所ならいくらでも偽装は簡単だ。

代わりなんて、いくらでもいるはずだった。

でも、今はどうしてかリンカ以外に考えられない。

彼女以外に女神の眷属を務められると思えないのは、その魂に触れてしまったからだろうか。

どれだけ相手を嫌っていても、自分の正しい道に行く、真っ直ぐで高潔な曇りない輝きが眩しくて。

いつのまにか僕は虜になっていたのかもしれない。

なくして初めて気づくなんて、愚か者のやることだと考えていた。だけど、本当に失くしてから気がつくなんて、僕は思わなかったんだ。

だって、まだ出会ってから二日も経ってないし、リンカと僕とは歳が離れすぎている。

なのに、いなくなっただけなのにこんなにも苦しいなんて思うわけが無かったはずなんだ。

「どうするっていつてもリンカは自分で望んで、」

「そんな脅されたに決まってるじゃない。

大方、デイルや私を楯にされてね」

知らないはずなのに言い当てる姫に僕は顔を背ける。

事実、リンカはあの紅竜ってヤツから切望されていたのだから、

リンカが紅竜の元へ行くこと事態が（紅竜がリンカを女神の眷属と考えていないとしても）十分な条件となりうる。

だが、リンカの行動は不可解なことばかりだ。

僕を、王族を嫌いだといいながら、仕事だと僕を守るためにその身も名前も惜しまない。

何故と訊ねても、たぶんリンカ自身にも明確な答えはないだろう。

「先にあの男がきたときのリンちゃんの様子、見てたはずだわ。

あれは明らかに怯えてたでしょう。」

だから、わざわざ結界張ってそばにいたのでしょうか」

姫の言うとおりだ。

僕は女神を奪われなかったために、そして、リンカを逃がさないために結界を張った。

だが、それは容易に刻龍によって破られ、俺はそばにいたのに、何も出来なかった。

ただ、リンカが連れ去られるのを見ていることしか出来なかったんだ。

落ち込む僕に畳み掛け、姫が言葉を繋ぐ。

ただの姫ではありえない、強い声が僕の心に訴える。

「三万歩譲って、リンちゃんが望んで浚われたのはいいわ。

でも、それでいいの？」

「デイルはどうしたいの？」

良いわけがない。

だけど、僕にはあの男に勝つ自信が無いんだ。

あの紅竜とかって男から、リンカを取り返すことなんて。

「デイルは王子なんだから、思うとおりにしていいの。
いえ、むしろそうすべきね」

今ここで僕の肩書きなんて意味が無いし、もしそうだとっても王子としての僕は思うようになど動けない。

思うように出来るのならば、最初からそうしていると姫だって知っているだろうと、僕は幼なじみを下から睨みつける。
しかし、気丈な姫は怯むことなく睨み返してくる。

「言いたいことがあるなら、はっきり言いなさいよ」

「僕にリンカを助け出せというのか？」

「そうよ、私の知るデイルならそうするわね」

姫は頷くが、その自信はどこからくるのだろう。
僕はそこまで我侷を押し通したことはないのに。

「そんな手が通用する相手か。」

あの男は、

「手がないと言わせないわよ」

見透かす姫の瞳から、僕は目を背けた。

確かに、ないと言わない。

だが、これまでとは相手が違いすぎる。

僕は自分の作戦を過信してはいないし、本物の犯罪者に通用するなんて思っていない。

「だから、その手は通用しないさ。」

あの男、世界でも五本の指にはいる強さなんだぞ」

「三本の指に入る魔法使いが何を言っているのよ」

「魔法使いと剣術使いでは勝負になんかならないといっているんだよ、姫」

負けじと言い返す姫に、吐き出した僕の吐息は思った以上に苛立っていた。

だが、いらついているのは姫も同じらしく、向かい合ったテーブルの上で細い指がカツカツと爪音を立てる。

互いに交わる視線に甘さは欠片も無く、譲る気が無いのは長年の付き合いから分かっている。

そして、二人では終わらせられないということも。

姫の秀麗な眦が上がり、桜貝色の唇が開き、何かを発する前に別な声が遮った。

「できるよ、おまえなら」

部屋の奥に小さなテーブルを置いて、彼の執事カークが淹れた紅茶を冷ましつつ、傍観者を決め込んでいたシャルダンだ。

僕らよりもよっぽど落ち着いて、王族らしい。

「できるよ。」

十倍返しのデイルファウスト、だろ」

そして、一気に残りの紅茶を飲み干した。

もうかなり冷めていたのだろうが、猫舌のシャルダンにはその方が都合がいい。

言葉を遮られた姫は少し呆気に取られた顔をした後、両目を閉じて何やら小さく呟いてから、笑顔をシャルダンに向けた。

実に、姫らしい、作り笑顔を向けられたシャルダンは紅茶のカッ

プを持ったまま、蒼白の顔でガタリと音を立てて席を立つ。

「ふふっ、懐かしいわね。

王立学院でのあだ名じゃないの」

知らないものから見れば愛らしい笑顔も、僕らにとっては軽い恐怖となる。

わかっけていて助けしてくれる辺り、シャルダンが人がイイのか馬鹿なのか。

それとも、そんな姫が好きだという嗜好なのだろうか。

「リンちゃんを奪い返して、ついでに報酬も頂いてきちゃいましょ
うよ」

こちらに向き直った姫の満面の笑顔の向こうで、シャルダンが大げさに胸を撫で下ろすのが見えて、僕も小さく笑った。

シャルダンの今後はともあれ、おかげでさっきまでの重い空気は泡と消えてしまったようだ。

安堵した僕と姫の前にもカークがレカンタティーを淹れてくれる。

「報酬なんて、盗れるわけないだろ。

今は王子なんだから」

「あら、昔からよ。

仮って言ったのはあのおばさんだけなんだからっ」

僕を敵視している叔母にして、現在の皇后である女性にして、自身の母である女性を「おばさん」と言い切った姫の眉が顰められる。僕を殺そうとしてしていると知ったときから、姫はそれが姫自身のために行われていると知りながら、僕に協力してくれてきた。

「あれは、子供だったからな」

まだ何も知らず、シャルダンと姫と三人で遊んでいた無垢な頃を思い出し、思い出に一時身を委ねる。

それは温かくもあり、切なくも、甘くも、苦くもある。

母のいない僕にとつての叔母は、母のように慕い、同じくらい信賴していた女性だった。

「……デイル……」

変わらずにいたかったという幼稚な願いを心の奥に沈めて、不安そうに僕を見る姫に笑いかける。

「でも、奪い返すっていうのは面白そうだな。

あの男の素顔も見たい」

僕の笑顔に安堵してくれた姫が柔らかい微笑を浮かべると、シャルダンも嬉し気に頬を上げる。

「そういえば、黒装束に気をとられて、見ていなかったわね」

「さぞかし人に見せられない顔をしているのだろうな」

「あははっ、かもしれないわねえ」

見られない顔を想像して、姫は明るい笑い声を立てる。

全員が落ち着いたところで、僕は目の前に置かれた、カークの淹れた紅茶のカップを手にし、姫もまた自分の前にあるカップを手にした。

前触れは何もなかった。

あったのかもしれないが、僕らは誰も気づけなかった。

それほど紅茶を多く淹れたわけでもなく、誰かがテーブルを揺らしたわけでもないのに、姫の前の紅茶のカップから、薄茶の液体が溢れる。

カシャンと小さな音が遅れて続き、半分に割れた白磁のカップが悲鳴を上げた。

和やかになり始めた空気を空間ごと引き裂いたのが何なのかは、すぐに判明した。

僕の向ける視線の先には、壁に突き刺さった一振りの昼の光をも遮る黒光りする剣がある。

長さ、形状からグラディウスとわかるが、刃は不気味に漆黒の嫌な輝きを放つ。

誰も動かない中で僕はそれに近づき、両腕に力をこめて、一気に引き抜く。

深く食い込んでいるから抜くのも大変かと思ったが、予想に反して、するりと軽く剣は壁を離れた。

近くでよく見れば、剣は黒曜岩を特殊に加工したものらしく、刃の向こう側で部屋の木目の床まではつきりと見える。

黒というよりも半透明。

そこに緑青系の白っぽい光がぼんやりと浮かび上がる。

「ごくり、と鍰を飲んだのは姫だろうか。」

剣を僅かに返すと、恐怖でなく期待と興奮に包まれた姫の瞳の輝きが見えて、僕は苦笑した。

子供の頃からそうだが、本当に姫君らしくない人だ。

「なに？」

「招待状だよ。」

「ご丁寧なことだ」

「つつーか罨だろ、それ」

僕がその剣を一振りすると、風を切る音に加えて、通常の剣では起こりえない光が舞い、僅かな風が僕と姫、シャルダンの周囲を守り包む。

風は僕を守る精霊のひとつだ。

部屋の中の何にも影響はないが、これが魔力の備わる剣だと言うことを示してくれる。

「今夜、リンカの婚儀と……名付けを行うと云ってる」

収まる風に姫の柔らかな陽色の髪がふわりとその肩に戻る。

「場所はどこななの？」

「リズールの　つまり、この街のそばにある森の中だそうだ」

「まあ親切ねえ」

「ってゆーか罨だって」

シャルダンが何度も「罨」と繰り返すが、そんなことはわかって
いる。

だけど、その先にリンカがいるのが確かなら、招待に応じるほか
無い。

僕はもう一度リンカに会わなきゃいけない。

そして、今度こそ本当の意味で、僕の妻になってほしいと願い出
るつもりだ。

「折角のご招待だ。

受けてやんなきゃな」

最初の日に見たリンカの挑戦的な笑顔、その夜の宿で見た驚き焦る顔、城の医務室で見た縋るような瞳、姫がさせた女装で怒っている姿、僕の腕の中で震えていた魔法移動中の姿　そして、最後に見た全てを諦め震えるリンカが、僕の記憶の中で黒いマントに覆い隠される。

「シーちゃん、これやる」

黒いグラデイウスをシャルダンの手に乗せると、彼は大げさにバランスを崩した。

それを気にも留めずに、僕は姫に作り笑顔を向ける。

「紅竜さんへのお祝いは何がいいかな？」

「デイルが行けば十分よ。」

「賞金首なんですよ」

僕に賞金をかけているのが自分の母親と知りながら、姫はあっさりと言っ。

それはもちろん僕が捕まらないと信頼しているからの発言だ。

「リンカにもプレゼントを買ってってやんなきゃな。」

よし、買いに行つて来るか。

カーク、つきあえ」

「はっ」

ドアに歩き出した僕の背に、剣を床に置いて落ち着いたシャルダンのぼやきが追いかけてくる。

「カークは一応、俺の部下なんだがなあ」

「シャルが気にしてないんだからいいじゃない」
「気にしてないわけじゃないんだが」

普段は有能な男だが、姫を前にするとうじうじくよくよしてはつきりしないシャルダンが深く息を吐く声を聞きながら、僕はドアを開けて、廊下へと出る。

ついてきたカークがドアを閉める前に、姫のぼやきも加わる。

「あーあ、あたしって、男運ないわよねえ。

デイルは顔も身分もあるけど、所詮あたしなんか見てないし、親戚にまともなのいないし」

「俺は？」

「下僕」

ぱたんと閉まったドアの向こうで、姫の即答の後に奇妙な静寂が訪れたことだろう。

内容はともかく、似たような光景はこれまでに何度か見かけている。

僕よりもよつぽどシャルダンのほうが姫の隣にふさわしいのにな、と僕は小さく呟いた。

聞いていたはずのカークは普段どおりに何も言わぬままで、僕は小さめの苦笑と彼を連れて、宿を後にした。

15#よくある婚礼劇(前書き)

リンカ視点。

15#よくある婚礼劇

程良い闇に月が輝く夜、リズールの西南西に位置する檜、椎などの常緑広葉樹が生い茂る深い森の奥で、闇の中に静かにほつと啼く梟の声を合図にひっそりと明かりが灯る。

ひとつ、またひとつと道案内をするように、深い緑の奥の奥へと続く明かりは刻竜のメンバーらが持つ松明だ。

全員が黒装束に全身を包み、その背には目立たないが黒い糸で刻竜の文様が刺繍されている。

俺の後ろから同じ黒装束ながら、緋色の刻竜の文様を背負った紅竜が声をかけてくる。

彼の背後に控えている数人もすべて黒と赤と白以外の糸でそれぞれの背に刻竜の文様を刺繍してあるのを、俺はもう随分前に見せてもらった。

「綺麗だろう」

ふわりと後頭部から背中にかけて温かくなっただと思っただら、俺は後ろから紅竜に抱きすくめられていた。

だが、それだけじゃなく、俺の頭に白くて光沢のある大きな布をかかけたのだというのは、視界の上半分と肌に触る感触で気がつく。

闇の中に俺一人だけ、シンプルな白いドレスに身を包み、遠目に見れば、刻竜に囲まれているなど気がつかないだろう。

人の温かさが去り、隣に紅竜が立つ。

見上げる体軀は闇になれた目でもとても大きく、それ以上に大きな存在感に圧倒されてしまい、俺は小さく舌打ちして視線を逸らした。

風にふわりと白い布が流れ、俺の視界を軽く遮る。

俺だって伊達にこの年で一人で生きてるわけじゃない。

この白い布が値打ち物であることもわかるし、普通の女性なら大喜び間違いなしだということもわかる。

だが、俺にとってはただの白い布でしかない。

「リンカ、俺はお前のために最高の花嫁行列を用意したつもりだ」

まっすぐに闇に燈る火を見つめ、俺は口を強く引き結ぶ。

紅竜の言うように、松明に照らされた地面はキラキラしい虹が浮かんで、幻想を際立たせている。

道に散りばめられているのは小粒のラルク石だ。

爪先程度の一粒が一〇〇〇オールはくだらない高価な宝石を惜しげもなくばらまけるのは、刻龍に有り余るほどの財力とそれを稼ぐ実力があるということだ。

敷き詰めないだけましと思うべきなのだろう。

「行くぞ」

紅竜からかけられた声に俺は一步を躊躇する。

足元に広がる一面の虹の綺羅綺羅しい道は自分には分不相応で、かといって踏まずに進む足場などない。

先に歩き出した紅竜が二歩目で気がつき、俺を振り返る。

その視線が俺を下からゆっくりと見上げ、視線が交わると、左の口端をかすかにゆがめ、面白そうに俺に手を差し伸べる。

「どうした、抱いて連れて行ってやるうか？」

面白がっているのは分かるが、紅竜の瞳はこれまでとは違って、

不自然なほどに柔らかい。

それもこれも俺が女の格好をしているからなのだろうか。

「自分で歩ける」

差し伸べられた手を拒み、俺はドレスの裾を両手で摘んで持ち上げて、右足を踏み出した。

ぱきり、と足元で虹の砕ける音がする。

二歩目の左足の下でも、ぱきり、と薄いガラスが砕けるのと似た音がする。

耳障りな音だが、同時に自分の全てを棄てるには相応しい音なのかもしれない。

俺がリンカでいられる時間はあとわずか。

自分で選択したことなのだから、最後まで自分は自分の足で歩いておきたい。

俺が隣に來ると、紅竜も俺にペースを合わせて歩き出す。

彼の下で潰れるラルク石は何を思っ、悲鳴を上げるのだろうか。

それとも、なんとも思わないのだろうか。

俺の見上げる紅竜の向こう側で、細い細い弓月が雲間から姿を現し、一時彼を照らして消えた。

「フッ」

隣を悠々とあるいていた紅竜の口から、堪えきれない微笑が零れるのを俺は聞く。

「何がおかしい」

「さて、ね」

紅竜は何も語らず、ただ楽しそうに俺の隣を歩く。

ふと見上げた顔は本当に楽しそうに、子供のように邪気のない笑顔では、とても最強最悪の暗殺集団　刻龍の頭領には見えない。

そういえば、と気がつく。

いくらリズールの町から少しばかり離れているとはいえ、ここはまだリズールの警備範囲に入る程度の郊外だ。

だが、こんなにも明るくしているのに、警備兵が来る気配もない。既に見取されているのか、あるいは、正面きって刻龍と敵対するような者はいないということか。

わかつてはいたことだが、僅かに俺は落胆した。

神殿にいるのは大抵貴族や王族だし、もともと期待していなかったのだが、かすかでも期待していた自分に驚き、口元が歪む。

嫌いにならないで。

王子の声が、言葉が唐突に過ぎる。

そんなはずがないのに、存在を近くに感じて、同時にあの二人でいた時の自分よりも幼い様子の王子を思い出して、頬が熱くなる気がした。

俺は貴族や王族といった連中が嫌いだけど、王子たちは嫌いじゃないと言ったのは嘘じゃない。

でなければ、いくら雇い主でもここまでして守ろうとなんてしない。

好きなのかと問われれば、たぶん俺は違つと思う。

だって、まだ会ってから三日も経たない。

ただあんな男でも容姿や肩書きではなく、内面に惹かれているのは間違いなくて、愛情とも忠誠とも違う想いに俺は戸惑う。

思い出すなと自分自身に言い聞かせ、俺は強く奥歯を噛む。そして、名付けの儀式のことへと思考を巡らせる。

俺は俺がリンカの名を棄てることなどないと思っていた。もともと孤児だった俺は養父に幸運にも拾われたが、拾われる前から名前があったという珍しい事例らしい。

俺は物心がついたときには、リンカと言う名前を持ち、使っていた。

それだけに過ぎない。

今更だが、俺は誰に名前をつけられたのだろう。

誰なのかわかっていたら、聞きたいことは山ほどあるが、今日これから名前を変えてしまえば、それも意味などなくなる。

隣を歩く紅竜の足音が止まり、俺も足を止めて顔を上げた。向かい風に一度目を閉じてから開くと、並ぶ火が目に入る。視線を少し上げれば、頭上を覆っていた木々の葉はなく、闇夜に瞬く星が地面に広がるラルク石よりも澄んだ光を放つ。

上も下もきらめく光に包まれて、圧倒される。

丁度、刻龍たちが全員黒装束というのと闇というのが重なって、俺はまるで世界に自分ひとり残される錯覚に陥った。

それは、初めて感じる感覚ではなく、これで三度目だ。

「おっと、どうした？」

紅竜に肩を支えられ、俺は自分が倒れかけたことを知る。

なんでもないと振り払い、前を見るが、俺の思考は生まれたばかりの疑問に支配されていた。

全てを失う感覚の一度は養父を失くした時だが、もう一度は記憶にない。

だが、確かにこれは三度目なのだと思う。

棄てられた記憶もないのに、喪失を感じるわけが無い。

だが、心のうちでは間違いなくこれが三度目だと伝える。

(でも、自分の意思で失うのは初めてだ)

俺は自分を無理やりに納得させ、しつかりと前を見据えた。

どうせすぐに意味などなくなることを考えても、無駄でしかない。

こんな奥深い森の中に不自然な広場が、俺の前にあった。

中央には幅約二メートル、奥行きは三十センチ程度、高さはメートルの表面が平らな岩が据えられてある。

岩の上には高槻が置かれ、その上に二つの朱塗りの杯が並べられていた。

俺たちの前に黒装束の一人が進みでて、その杯に透明な液体を注ぐ。

とくとくと注ぐ音を聞きながらの香りは、澄んだ上級の酒の香りを届けてくる。

差し出された一つを紅竜が手にし、促されるままに俺も手にした。

「始めるか」

紅竜の声を合図に俺は目を閉じる。

今更、暴れるつもりもないし、そうしたところで意味も無い。

そつと、俺の頬に紅竜の手が触れるのを感じる。

前髪に紅竜の吐息を感じて、俺は吐き気を堪えて、強く口を結ぶ。

(知らなければ、よかった)

王子に出会わなければ、俺はこの手を受け入れてもまだなんとも思わないだけで済んだ気がする。

あの手の暖かさ、腕の中の心地よさを思い出すだけで、他の誰に触れられても、俺は。

「随分仰々しいな」

耳慣れてしまった少し低めのテノールが聞こえ、俺は目を開いて顔を上げる。

ここにいてほしくない声で、だけど今一番聞きたかった声だ。

「妻のためだ、当然だろう。」

なあ、デイルファウスト・ラギラギウス・クラストー王子」

紅竜の言葉と共に、正面の木々の闇から人の姿が現れるのを俺は凝視して見つめていた。

別れた時に使っていたあの上等のくすんだ緑のマントではなく、汚れ一つ見えない純白のマントをつけて、その下は白地に金糸で刺繍が施された正装らしき装いの王子が姿を見せる。

闇の中、俺と同じく映える姿に喜びと共に舌打ちした。

なんで、よりにもよって、そんなに目立つ格好をしてやがるのかと襟首を捕えて、説教したくなる。

「なんつで、」

「俺が招待状をやった」

何かを言おうと口を開く俺を遮り、紅竜があっさりと楽しそうに白状した。

その様子はどう見ても俺の反応を楽しんでいる。

会いたかったんじゃないのかと目で問われている気がして、俺は視線を外さざるを得ない。

会いたかったのは確かだけど、今ではないというのも紅竜だってわかっているはずだ。

それに、王子だって俺が来てほしくないと、本国へと戻って欲しいと願っていたことだって事実だ。

「だからって……っ、来るんじゃないよっ」

どうして逃げてくれなかったんだ。

これじゃあ、俺がなんのために紅竜の花嫁になろうとしているのか、わからないじゃないか。

「お祝いにきたんだよ、リンカ。

君のためにね」

刻龍に囲まれているというのに、王子は臆することもなくまっすぐに俺に近づいてくる。

誰も阻もうとしないのは、それをする必要が無いからだろう。

何しろ、ここには刻龍でも最強のメンバーが揃っている。

そこを出し抜いて逃げ出すことなど不可能だ。

「なんで来たんだよ」

俺の前に立つ王子は最初に出会ったときと同じ笑顔で、でも目だけが優しさに満ちていて、俺はひどく泣きたい気分だ。

「リンカ、やっぱり君は女の子だね。」

とてもよく似合っているよ」

どこから取り出したのかわからない、王子が差し出した俺の視界を塞ぐ程の季節の花を盛り込んだ豪華な花束を、俺は両腕で抱えて受け止めた。

だから俺は王子がその後何をしていたのかはわからない。

貴重で透明感あるユーチャリスを始めとし、ややクリーム色の巻きが美しいホワイトヘリテージローズ、深い赤色が印象的なレッドヘリテージローズ、一番外側の花びらにほんのりピンクの刺し色がある、やわらかいイエローヘリテージローズ、ひらっとした花びらが印象的な白いフロリバンダローズ、繊細で小ぶりのホワイトトリスローズ、中心から外への赤いグラデーションが綺麗な濃いめのトリスローズと華やかに薔薇が飾られ、白いジャスミンの花、ミニサスアイビーやふの入った柔らかな印象のフレンチアイビーが緑を彩る。

俺には相応しくもない豪華な花束だ。

「花嫁にブーケは付き物だよ、紅竜さん」

能天気な王子の声に能天気な王子の笑顔を浮かべて、俺は泣き出しそうな自分の顔を特大のブーケに埋めた。

しかし、すぐに何か刺すような痛みを感じて身を離す。

抱えているだけでも身動きが取れなくなる花束だ。

俺の些細な変化は誰に見咎められることもなかった。

一見して、薔薇の刺は除いてあるし、花束自体にも魔法の気配は無いように見える。

「祝いご苦労。」

儀式が終われば、晴れてクラスターの王子は自由の身だ。

誰に狙われることもない自由を謳歌すればいい」

「刻龍が手を退くだけで、か」

「わかるだろう、クラスターの王子」

二人の会話が俺を素通りする中、俺はようやくそれを見つけた。

奥の葉に隠された 誓いの言葉。

「そんなつまらないもの、僕が望んでいると思うのか？」

急に背後から紅竜に腕を掴まれた俺は、バランスを崩した拍子にその花束を手放してしまった。

目の前を舞う切り花の編み目の先で、微かに王子の口端が上がったようだが、俺はそれを気にする余裕もない。

「紅、な、につ！」

王子が出てきた場所とは別の、丁度今王子が背にしている辺りから、女性の強い声が発せられる。

テンペスタ
「嵐！」

それが魔術を紡ぐものと俺が思い当たる前に、王子が続ける。

「魔術の意思は僕に従え。
僕の女神リンカは僕の元へ戻れ」

王子の言葉が終わった時には俺の前は白に覆われ、その身に纏う香りは俺が王子の腕の中にいるのだとすぐに知らせる。互いに息つく時間もなく、王子はさらに魔術を重ねる。

「^{ラン}解放」

王子の髪が、マントが青と緑に色づく魔力風にはためき、裏側に黒く描かれた魔方陣が目に入ること、それが既に用意された魔法なのだとは俺は気付いた。

俺の耳元で、かすかに王子が安堵の息を吐き、俺を強く抱きしめる。

決して逃がしはしないと、手放さないと無言で告げる。

「リンカは馬鹿だよ」
「っ」

反論する前に、俺は風が唸る声を聞いて、急いで王子の腕から抜け出す。

王子も力を緩めてくれたおかげで、完全に抜け出さないまでも、俺は状況を目にすることができた。

俺と王子を囲むように球形に巡らされた、虹色に揺らめく半透明の幕の向こう側では、強い魔力の奔流が渦巻き、嵐のように木々の葉を強く揺らし、周囲の刻龍メンバーさえも木の葉と同じく夜空へと巻き上げる。

残っているのは地に根を張った木々と王子と俺、それから刻龍で

も色のついた刺繍を背に持つものだけだ。

ここにいる刻龍の色つきの力は知っていたが、同等かそれ以上の魔力と実力をもつ王子はとんでもない化け物だと、俺は改めて思う。

この場に来るまでに王子が使った魔術は合計三つ。

まず、王子自身ともう一人の女性を隠すための姿隠しにひとつ。

俺と紅竜に巡らされていた見えない魔術の檻を破り、俺を強制的に引き寄せるのがひとつ。

さらに、今の魔力風から俺と自分を守るために一つ。

すべて高等術式で、綻びの欠片もない証拠に俺も王子も傷一つない。

これだけの高等術式をやったのけている癖に、汗一つ掻いていない辺り、やはりこの王子の魔術力も信じられないほどでたらめだ。とても普通の平和な王侯貴族が持ち得るものではない。

「ちっ、外したか」

王子の舌打ちと、素の言葉に俺ははっと顔を上げる。

目の前には黒装束のフードを魔力風で押し上げられた男がいた。背には深紅の龍が棲む男で、久しぶりに俺はその素顔を見る。

さして特徴の大きくない造形であるため、それは一際目を引く。

顔を大きく斜めに切り裂く向こう傷と鷹の目を思わせる視線と合わせれば、只人が戦慄し、恐怖するものだ。

「残念、イイ男じゃないの。」

てっぺり二目と見られないような顔かと思ったのに「

王子の舌打ちする声に次いで、姫の嬉しそうな声がした。
先ほどの女性の声に聞き覚えがあると思ったら、姫のものであるらしい。

声の聞こえた場所の木の枝から身軽に飛び降り、駆け寄ってこようとしている姫が着ているのはドレスでも旅装束でもなく、ベージュのロングブーツとショートパンツにハイネックの黒いシャツ、その上からカーキ色のジャケットを羽織り、手には数枚の長方形の紙を持っていて、長い髪は後ろで高く結び上げ、ポニーテールにしている。

「っ、
壁！」^{ヘキ}

刻龍のひとり、紅竜と俺たちの間にいた緑竜が札を手に、魔術を開放すると、轟音と共に土煙を上げつつ地面が盛り上がり、姫と俺たちの前に土肌色の分厚い壁を作り出す。

だが、俺から姫が見えなくなる寸前、姫はすばやく手元からもう一枚を掲げて壁へと差し向ける。

「^{ヘイメル}
槌っ」

姫の唱える声と共に、土壁のすぐ上空に忽然と現れた灰色の槌が重力に引かれるよりも強い勢いで打ち付けられる。

轟音と衝撃でまた舞う土埃に思わず俺は目を閉じたが、すぐに王子の小さな笑い声に目を開く。

確かに目の前は土煙で何も見えないが、風も粉塵も王子が作った球形の壁の内部までには届いていない。

まるでその威力を知っているかのように完全な結界だ。

「大丈夫ですよ、リンカ。」

「姫は僕の認める札士です」

「姫が？」

「そうです、と肯きながら王子がそつと俺と同じ高さまで屈んで、額を軽く合わせる。」

「つい抵抗を忘れた俺と王子の視線が交わる。」

澄んだ秋空の高い高い場所と同じ色の王子の瞳は迷いも曇りもなく、ただ温かく、戸惑いを俺は覚えて視線を逸らした。

「そんな場合じゃないのに、俺の顔が、耳が熱くなる視線だ。」

「信用されているのはわかってるけど、少しは心配してくれてもいいんじゃない？」

先ほどよりも近い距離に、聞き覚えのある不満げな声音に既視感を感じて、俺はびくりと身体を震わせる。

ゆっくりと振り返った先で、あの時と倍は離れているものの、あの時と同じく半眼で俺を　王子を睨む姫の姿が目に入る。

「格好だけならどこにでもいそうな町娘だが、やはり王子の幼なじみというのかとても迫力がある。」

その姫の背後に黒い影が迫るのを見て、俺は声を上げた。

「姫っ！」

咄嗟に飛び出そうとする俺を王子が抑える。

その向こうで紅竜の振りかぶる剣が、勢いをつけて重く振り下ろされた。

「紅竜は簡単な魔法を使えて、かつそれを剣に纏わせて使うことのできる魔法剣士だ。」

彼が今もつ雷を纏う魔法剣の衝撃波で、昼間の太陽のように眩しい火花と強い爆風が巻き起こり、俺は反射的に顔の前へ差し上げた腕だけでは耐え切れずに目を閉じる。

「っ、姫……っ」

その威力の程を身をもって知っているだけに、俺の不安が大きくなる。

直撃を受けたら、絶対に助からない。

せめて、少しでも外れているようにと、祈りながらゆっくりと目を開けた。

王子が俺を抱く腕にもかすかに力がこめられる。

「女の子相手に、容赦なさ過ぎるんじゃない？」

その中で聞こえて来た姫の軽口に俺は安堵した。

少なくとも生きてることだけは確認できたからだ。

「冷や冷やさせるな、ウイドー」

同じく安堵と共に非難めいた声音を王子が口にすると、次第に良くなる視界の中に尻餅をつき、後ろ手に地に手をつけて身体を支える姫の姿が現れる。

振り下ろした紅竜の剣は姫まで届かず、半端に留まっていた。

その理由は紅竜の剣を細長い棒のような得物で受ける者がいるからに他ならない。

受け止めていたのは白く頬まで痩せこけた、まさに痩身といったひよろりとした細い目の男で、パステルブルーのジャケットを素肌に着て、膝までで乱雑に切られた黒のジーパンを履いている。

服にはシルバーチェーンやら、どこかの勲章みたいな黄色いバッジやら、青や赤のバッジやらをジャラジャラとつけて、首にもシルバーチェーンのタグプレートをつけている。

一見白髪にも見えそうな薄い金色の短い髪を逆立てて、瞳を隠す茶色の色つきのメガネをかけて、耳には丸いリングピアスをつけて。如何にも弱そうな男が紅竜の剣を受け止めていることに、俺は驚いた。

「間に合っ たんやからええやないか、殿下っ」

軽口を叩きつつ、ウィドーと呼ばれた男は持っていた棒を力任せに振って、あるうことか紅竜を弾き飛ばした。

驚愕に目を見開く俺の前で、彼は億劫そうに座っている姫の右の二の腕を掴んで、乱暴にこちらへと放り投げる。

「うわ」

「きゃっ」

俺はなんとかそれを受け止めるが、後ろで王子が支えてくれなければ転がっていたことだろう。

それだけ軽く見えて、重い衝撃だった。

「それに遅れたのはわいだけのせいやないぞ。

殿下がそつちのお姫はんに気を取られてたからやないか」

言うてから、男はまっすぐに俺を凝視する。

何か言いたげに口を開閉し、それから茶色の色つきメガネを少しずらしてニヤリと笑った。

「こないなとこで会えるなんて、なんて幸運や。

お嬢はん、わいとデートせんか？」

訛りの強い言葉で何を言っているのかいまいちわからない俺が聞き返そうとすると、王子が後ろから強く抱きしめてくる。

「ウイドー、後で紹介してやるから今は戻れ」

王子に命じられ、不満そうに口を曲げた男だったが、すぐに笑顔になった。

「紹介は不要や。

だって、嬢ちゃんはいの運命の女やからな」

俺に投げキスをするウイドーの姿が、紅竜の振り下ろす剣の先で陽炎のようにゆらりと消える。

それを残念がるでもなく、紅竜は振り下ろした魔法剣を鞘に治めた。

俺を抱く王子の指が深く俺に食い込む。

「ウイドーの奴……っ」

「噂どおり、たいした王子だ。

あれが風の守護精霊ってやつか」

紅竜の言葉に俺は眉を潜める。

確かに精霊は人の姿を模すとは聞くが、それにしだって生身の人間と違いは見えない。

たぶん俺が今までに出会った中で、彼以上に派手で軽い人間はいないだろう。

それにいくら人間を模しているといっても、あまりに俗物的だ。

王子が何かを答える前に、ウイドーに投げ飛ばされた姫が呻きと共に目を覚まし、俺の前で胸を揺らして、身体を起こした。

「デイルといい、ウイドーといい、私のことを何だと思ってるのかしら」

土埃のついた髪を軽く叩いて整える彼女に触れられない俺は、恐る恐るの声だけをかける。

「お、おい、急に起き上がって大丈夫なのか？」

「慣れてるから平気。」

それよりさ、リンちゃんはどう思う？」

痛むのか後頭部を擦りながら、彼女は俺を見つめる。

王子と同じく碧眼だが僅かに混じる赤茶の虹彩のせいか、妙に迫りに満ちている気がする。

「どっつて」

姫にとりあえず状況を考えろというのも忘れて俺が見つめ返していると、姫の方が先に視線を外して、俺の背後に視線を向けた。

「そっつえば、さっきの札ね、デイルに急遽作ってもらったんだけど、リンちゃんには怪我ないわね？」

強く睨む姫の視線には、俺の耳元に息を吹きかける距離で王子が囁くように返す。

「僕の結界の中で、怪我なんかさせるわけがないだろう。」

それに姫の力も知っているから、強すぎる札は渡さないことにし

てる」

「ということ、強い札持ってるのに今までくれなかったのね」

「分相応のものを使うべきだと言っているだけだよ」

睨むというよりも挑む視線を王子に向けていた姫が、視線を外さないままにいきなり俺の腕を掴んで引き寄せる。

「うわ」

柔らかな胸に抱きとめられる感触に、俺は顔が熱くなると同時に甘やかな芳しさに心地よさを感じる。

かすかにフラッシュバックする覚えのない温かな思い出から記憶を閉じて、俺は目の前を見つめた。

紅竜も他の刻龍も俺たちに攻撃を仕掛けるでなく、見守っている。その不気味な対応に、俺は小さく身震いした。怒るならまだわかる。

だけど、紅竜は口の両端を吊り上げるように笑っている。笑って、いるんだ。

背筋を冷たいものがじわじわと這い登ってくる感覚に陥りそうな俺は、急にヴェールを取り払われて、それをした姫を見た。

すかさず姫は俺の頭に茶色くて大きなものを被せる。

既に一度つけられているのでわかるが、栗色の背中ぐらいまでの長さのカツラだ。

「リンちゃんはなんでも似合うから白のヴェールだけでもいいけど、こっちの方がもっと似合うわよ」

いったいどこから取り出したのかとか、なんで持ち歩いているの

かとか姫に突っ込みたいことは多いが、本当に今は空気を読んで欲しい。

それとも、わざとなのか。

「折角の舞台を台無しにしてくれるとはねえ」

やけに楽しそうな紅竜の声にかすかに姫の体が震えた。

それで俺は姫が気づいていて、気がついていないフリを、虚勢を張っていたのだと気がつく。

そんな俺たちを守るように王子が立ち、強く紅竜を睨みつける姿を見た。

守られていると俺が気がついた時、急に王子の眉根が強く寄せられて、長いまつげが上下に数回動かされる。

「デイル？」

何か不思議なものを見るような、そんな視線を辿ると、そこには紅竜が怪訝そうに眉を顰めている。

「姫、こいつの顔、見たことないか？」

紅竜の素顔を知る人間はほとんどいないはずなのに、王子が言い出す。

「そう……言われてみれば。

なんか、こつ、面白いのがあったような気がするわね」

姫も片手を頬に当てて、秀麗な眉目を顰めて唸る。

そうして、カ一杯悩む二人に俺は問いかけた。

「面白いのって？」

「そう、なんか、見たことが……あるようなないような」

二人の要領を得ない返答に俺も眉を寄せる。

「紅竜が頭領になったのって、四年前だったよな」

「よく憶えてるな」

「自慢してたじゃないか」

嬉しそうに紅竜は言うが、そんなに昔の話でもないから忘れるはずもない。

加えて、そのせいで俺は仲間でもないのに刻龍の余計なことまで数多く知らされている。

その中でも頭領に関するものといえば、実に刻龍らしい掟だ。

刻龍の頭領は代々決闘においてのみ継承される。

弱ければ上に立つ資格なしとされるのは当然だろう。

何しろ、元々が犯罪者の集団だ。

押さえつける能力もなければ、統率など出来るはずがない。

先代は世界唯一の魔法と拳闘を使う男で、刻龍でも最長の十九年を務めたという。

また刻龍の悪名のほとんどを広めたのはこの先代だとか。

その他にも紅竜が顔を隠せるから、刻龍に入ったとかも聞いた気がする。

「あぁっ、デイル、あれよ！

あんときのおっさん！！」

俺の思考を中断させて、姫の嬉しそうな声と手叩きが聴こえた。
おっさんって今もおっさんじゃねえかと、心の中で俺はこっそりとつつこむ。

「あれって？」

「ほらあ、城の時計台から足滑らせて落っこちて、落ちる途中で鐘の紐に引っかかって、鐘鳴らしたやつ」

思いも寄らない壮絶な解説に、俺は思わず無言で姫に聞き返していた。

「あ……あつ、八つの時にきた刺客か」

俺と同じぐらいの歳には既に命を狙われていたのかとわずかに驚いたものの、姫の話と合わせるとあまりにもアレだ。
内容が情けない。

「紅竜？」

王子たちが八つというと、まだ刻龍に入る前の若かりし頃ではなからうかと俺は紅竜に目を向ける。

俺から見て、心なしに紅竜の表情は強張っているように見える。

「あの時は確か僕が剣術習いたてで、誕生日に贈られたばかりの剣で遊んでたら、刺客がきて」

「デイルのデタラメ剣術に窓から足を滑らせたのよね。
顔の傷はそのときのじゃない？」

違っぞ、と紅竜が必死な目で俺に訴える。

「信じるなよ、リンカ」

「そういや、その傷の話だけは聞いてねえな」

それほどの傷、内容が内容なら紅竜の性格で武勇伝を話さないわけがない。

「そうだったか？」

これは、俺が先代と決闘した時に……」

「とりまきのねーちゃんとかがその前からあったって言ってたけど」

「ちっ、あのバカ女」

小さく舌打ちして零しているが、耳のいい俺には丸聞こえだ。

「他に古竜を倒した時だとかも聞いたけど、あんたから聞いたのはひとつもないな」

紅竜は少し視線を外した後で、口端を上げ、歯を見せてニヤリと笑った。

「まあ、そんなことはどうでもいいじゃねえか」

同時に空気がビリビリと震え、黒い圧力がかかる。

俺を守るように抱きしめる姫の身体も震えてはいたが、彼女はまったくすぐに紅竜を睨みつけていた。

王子も、この殺気と同じ圧力に気がついていないはずはないのだ
けど。

ふわり、と広がるマントの影に見える表情にはかすかに笑みが浮かんでいるように見える。

「デイルファウスト王子、儀式を台無しにしてくれた代償は負ってもらおうぞ」

更に強くなる圧力に耳鳴りと頭痛と吐き気がこみ上げてきて、俺は両手で口を抑えた。

「ちょっと、ウイドー！

ちゃんとリンちゃんもカバーしなさいよねっ」

姫が叫んだとたんに圧力が消え、俺は深く息をついて顔を上げた。目の前で雪の結晶に光が当たったみたいキラキラと光る風が、俺と姫と王子の周囲を舞い踊っている。

姫を見ると、彼女は俺の視線に気がついて、小さく笑った。

精霊の力 確かに紅竜の一撃を抑えてはいたが、この圧力まで消せるほどの実力の持ち主というのはそうそういない。

そして、それだけの高度な精霊が人間の守護をすることなど稀と聞く。

その希少な守護を受けている王子に視線を向けて、それから俺は紅竜を睨んだ。

「紅竜、話が違つたる。

俺があんたのものになつたら、王子は狙わないといったじゃないか」

「ああ、だがまだ儀式は完了していないだろう？」

嘲笑う紅竜を前に俺が悔しさを噛み締めていると、王子は楽しそうに笑った。

「こいつは端から約束を守る気なんかないよ。」

その証拠に、僕をここに招待したんだからね。

おそらく、先にリンクに名付けの議を施した後、僕たちを消すつもりだったはずだ」

それに姫が重ねて続ける。

「名付け主の命令には、逆らえないものね」

この世界で力を持つものの一つが、名前、である。

名は体を表し、名前によってヒトは世界に存在することを許されるといわれている。

加えて、改名するというのはその理を乱すことになってしまったり、名付け主には逆らえなくなるのだ。

だから、よほどの事情でもない限り、誰も改名をしようとはしない。

俺が紅竜に名前をつけると言ったのは、すなわち刻龍に入るという意味もあった。

「紅竜は、そんなやつじゃないっ」

俺を見る紅竜を見て、それから俺は具現化する不安を振り払おうとして、何度も首を振った。

相手が相手だけに、まったく過ぎらなかつたわけじゃない。

だけど、俺が信じなければどうにもならないじゃないか。

信じて欲しかったら、自分がまず相手を信用することだ。

養父にはそう教えられてきたし、そのおかげで何度も救われてきた。

悪人でも善人も変わらない理が崩れたら、俺は何を信じたらいいかわからなくなる。

痛くなるほど強く首を振る俺を止めたのは大きくて少し冷たく、
だけど傷もない滑らかな王子の両手だった。

真っ直ぐに見上げられるように俺を固定する王子の姿がわずかに歪む。

「リンカ、僕たちのために犠牲になんてならなくていい。
そんなことのために結婚なんてする必要はないんだ」

犠牲になるつもりだったわけじゃない。

ただ、王子を助けたかっただけだ。

「そんなつもりじゃないっ」

他に俺に何が出来たかわからない。

だけど、何もしない後悔だけはしたくなかっただけだ。

養父を失ったときのように、先が見えているのに何も行動しないでいたら、俺は。

「リンカの名も捨てるな。

軽々しく捨てていいものじゃない」

簡単に、捨てるわけじゃない。

俺は理屈じゃなく、ただ王子には生きて欲しかったんだ。

性格に問題だってあるし、王族で魔法使いで、俺にとってはそれだけで嫌いな部類の人間だ。

「……俺……」

「ただ、俺はどんなやつであっても、少しでも関わったやつが死ぬのは嫌なんだ。」

紅竜の落ち着いた声が王子の向こうから聞こえてくる。

「刻龍は約束を違えない。」

俺のもとに来れば、王子たちに手を出さないとこのも本当だ」

俺はその言葉を信じたい。

「ただ、ここに王子を呼んだのは紅竜で、姫や王子のいうようにそれだけでも既に紅竜への信頼の針はぶれる。」

「紅竜、俺は……俺は……」

信じたいけれど、信じきれない。

「ただ、王子たちの命は今紅竜の手の上にある。」

「リンカ」

王子と紅竜の二人が、俺の名前を呼ぶ。

「どちらも深く関わったわけじゃないし、出会った時間が早かろうが遅かろうが、大して違いはない。」

「それなのに、自分でもなんでこんなに王子に肩入れするのか、理由は説明できない。」

でも、王子に生きていて欲しいと思う俺は間違っているだろうか。

王子に背を向けようとした俺に、姫の柔らかな声が届いた。

「リンちゃんは自分の心の向く方へ行くの。
私たちのことは気にしなくていいから」

俺が振り返ると、姫は笑っていた。

敵中であつてなお、戦っているときでさえ、先ほどから華のような笑顔は絶えることがない。

本当に楽しそうに微笑んでいる。

王族だとか貴族だとか、そんなものは関係なく強い女性なのだと
思う。

その強さが俺にもあつたらいいのにと、何度も願った。

だけど、やっぱり俺はいつだってこういう決断の時は迷ってばかりだ。

俺の心の向く方は どちらなんだ。

「リンカ」

迷い続ける俺に、王子が静かに語りかける。

「僕の昔のあだ名は、十倍返しのデイル、というんだ。
心配しなくていい」

冗談めかした軽い言葉に、俺は状況も忘れて笑みを浮かべた。

（十倍だつて？

百倍の間違いだろ）

俺は思ったことは口にせず、王子を顧みる。

王子は世界で五本の指に入るほどの実力を持った魔法使いで、猫かぶりでも嫌な男だ。

その嫌な部分も含めて、いつのまにか俺は信用していたのは確かだ。で、実力もこの数日でわかりきっている。

刻龍にもその程度の魔法使いがいるということも、王子一人では刻龍に勝てないということも、わかっている。

でも。

「一人じゃないもんな、王子は」

俺はドレスの裾を持ち上げ、一気に脱ぎ捨てた。

シンプルなおかげで引っかけかかりは一つもなく、俺はすぐに白のキヤミソールと白の短いパンツ姿になる。

女物の下着を着けるのが嫌だと言ったら、すんなりと用意してもらえたものだ。

「悪いな、紅竜！」

やっぱ、俺、こつというのは性に合わないわ」

先ほどは足下まで隠れるドレスでわからなかった茶色の編み上げロングブーツの踵を軽く打ち付け、つま先から飛び出した縦回転するナイフを空中でキャッチする。

口元が自然と笑みを形作り、ちらりと向けた俺の視線に王子が満足そうにならず。

「王子たちの命はどうでもいいってことか」

瞳を細めた紅竜は怖いけど、俺はもう決めたから。王子を信じると、決めたから迷うのはやめたんだ。

「よかないけど、俺は俺だから。やっぱ、誰のものにもなれん」

つ、と首筋を冷や汗が通り過ぎるのを感じながらも、俺は紅竜から視線を外さずに、全神経を研ぎ澄ませる。

少しでも隙を見せれば、俺も王子も姫も、命はない。

「それは困るなあ」

俺がそうして警戒しているというのに、急に王子が俺の体を軽々と抱き上げた。

「また時計塔から落としてあげるから、遊びにいらっしやいな、紅竜さんっ」

王子の隣で姫が笑い、自らの左耳につけていた瑠璃のピアスを外して落とす。

「ラン解放」

同時に王子があの時と同じ短い呪文を唱えると、姫が落とした蒼い玉は地面に付く前に俺たちを包む円を地面に水平に描いた。

魔法特有の色の付いた光が俺たちを囲み、王子も姫も俺も魔法風に服も髪も煽られる。

はためく王子のマントの影、その彫刻張りの横顔はとても頼もしく、俺は視線を外さずに見つめる。

「高等転移門だっつ？」

紅竜の後方で緑の刺繍を持つ刻龍の男　　緑竜が、焦ったように喚く。

転移門それ自体は一般的で、室内から屋外へ出る程度であれば簡易術式制御者であっても作り、発動させることはできる。

ただし、簡易術式制御者の転移門は効果時間も短いため、描いてすぐに発動させる必要がある。

緑竜が言っている「高等転移門」というのは、物体に転移式を組み込み、いつでも発動させることのできる移動術式である。

効果範囲、移動距離は作成した者、発動する者の両方の魔法能力の高さに委ねられる。

「あれだけの小さな物体でなど、ありえんっ！」

俺もそれ自体の発動を見るのは初めてだが、収めてあるもの大きさが、異常なほど小さいということはわかる。

裏マーケットのリストでも、こんなピアス程度の大きさは見たことがない。

「ありえないは」

「ありえないわよ」

王子と姫の不敵な言葉と共に、俺たちの足元の魔法陣が光の柱を立ち上らせる。

刻龍の姿が全て白さに掻き消える中、俺を抱く王子の腕の力が強

まった。

俺にしかわからない震えが腕を通して伝わり、俺は王子を見る。

世界でも類い稀な力を持つ王子が怖れているのがなんなのか、俺にはわからない。

わかるのはひとつ。

寝物語の姫君のように、俺が王子に救われたのだということだ。

「馬鹿だよ、王子は」

俺の静かな咳きが聞こえているかわからないが、光の中で王子は笑っていたような気がした。

16#よくある転移劇

冷たい風が俺の頬を撫で、王子と姫が同時に息を吐く。

「意外と早く戻っちゃったわねえ」

「今回はかりは、僕はまだ死ぬわけにはいかないからな」

王子にマントで包まれ、横抱きされたままの俺が辛うじて見ることができたのは、灰色の石で作られた小さな室内だ。

小さいと言っても、大人が十五人程度入れる広さはありそうで、正方形の部屋の一边には濃い紅の分厚いカーテンがあり、カーテンの隙間から本やら書類やら筆やらと者が散乱している様子がわかる。部屋の床には白いチョーク石で描いた完全な円形を描いた魔方陣があり、中にも読めない文字や絵が描いてあるが俺には何が書いてあるのかわからない。

王子のマントにくるまれているからマシではあるが、地下水道のようないびりとした空気の冷たさに俺は身が震える。

「リンちゃんの服、私の貸そうか？」

「ああ、頼む」

二人が話しながら木の扉を開ける軋み音に、俺は眉をひそめる。

「おい、ここはどこなんだ？」

「ってゆーかもう降ろしてくれよ」

俺の声が聞こえていないのか、二人は冷たい石の廊下を歩き出す。

「あーあ、もうちょっと遊びたかったなあ。
せつかく、さらわれてるって名目で遊べるチャンスだったのに」

つままないなーと口にする姫の言葉に、俺は嫌な予感をヒシヒシと感じていた。

さっきの転移門で移動したまではわかるし、王子が本物の魔法使いであることも、化け物じみた魔法許容量を持つことも、使う実力があることも俺は知っている。

単純に考えて、相当の距離を移動できることも。

だが、北の大国クラスターはリズールから一マイルや二マイルなんて距離じゃないし、王都はクラスターの北部にあるし、途中で山越えだつてある。

地図上での直線距離にして、八百マイル。

通常の転移門はせいぜい百マイルがいいところで、それ以上なんて聞いたことがない。

そんな距離を移動できる転移門など、にわかには信じがたい。

「なあ、ここどこなんだよ？」

王子の体を叩いて尋ねると、少し腕を緩められ、王子の意外そうな表情を目にできる。

そこまで驚くことを口にした覚えはないのに、失礼な男だ。

「寒くありませんか？」

「寒いに決まってるんだろ」

俺が言い返すと、王子は数回瞬きした。

わからないんですか、と無言で問いかけてくる王子を、俺はまっすぐに見つめて返す。

俺たちを見ていた姫が呆れた息を吐き、何かを口にするのと同様に、俺の耳に複数の足音が届いた。
金属の擦れあう音も混じる。

「デイルファウスト殿下、よくご無事でお戻りに、なられました……っ」

先頭にいるカークを押し退け、真っ先に白銀の騎士の甲冑をつけた壮年男性が、王子の前で膝を折る。

後に続く者も同様だ。

次々と自分にかしづく男たちを前に王子が気まずい苦笑をする。

「おいおい、大袈裟だなあ。

皆も息災で何よりだよ」

王子の言葉に、カークを除いた全員が感涙しているようだ。

「もったいなき言葉であります。

我ら、殿下の帰還を心待ちにしておりましたっ」

先頭の壮年騎士が涙ながらに応える。

王子は柔らかな作り笑顔を張り付かせているようだ。

「王妃様は奥室にて、西の魔女殿と談笑しておられます」

「西の魔女殿が？」

意外そうに王子が問い返し、カークへと視線を送る。

カークはいつも通りの表情にしか見えないが、関係する者なのだろうか。

「偶然ではありませんよう」

「そうね、めーちゃんはお母様を怖れてるみたいだから、適当に…
…うん、私の部屋に呼んでくれる？」

騎士たちがいなくなっただけから、姫がカークに笑いかける。

「ま、めーちゃんが本気出したら、お母様もデイルも敵わないけどね。」

「一応ね」

俺にはカークが心なしか安堵の表情を浮かべたような気がした。
て、王子以上の魔法使いがいるのかよ。

「お父様はどこにいるのかしら？」

次に姫が問うと、カークは一礼で応じる。

「陛下は講義謁見の間でコゼット公爵と執務を行っておられます」

王子はそれをきくやいなや、迷わない足取りでスタスタと廊下を
歩き出した。

振動で落ちそうな気がした俺がしがみつく、王子が俺を抱く腕
を強くする。

「準備は出来ているか」

姫も俺たちを追いかけてきて並び、斜め後ろからの声でカークが
着いてきているのもわかった。

「はい、祭壇の間にて先ほどからお待ちです」

俺には当然のように意味不明だが、誰がとも何故とも言わなくても王子も姫もそれで理解できたらしい。

「何々、そつちが先なの？」

妙に嬉しそうな姫はともかく、俺はとにかく王子の腕から逃れようと試みた。

この腕の中は居心地が良いけれど、もしも俺が予想する通りの場所ならば、この状態は非常に良くない展開を引き起こすに違いない。

「もちろんだよ。」

そつでなければ納得しない方が多いからね」

「デイルは外面いいものね」

笑いを含めて姫が口にする、王子はびたりと足を止めた。

「もうちよつと言い方があるだろう、姫。」

リンカもあまり暴れないで」

「だったら降ろせ」

俺がすかさず言うと、王子は逃げるから嫌だと言った上にあることが、走り出した。

「走んなあああつ！

ゆ、ゆれるっ」

「着いたら、すぐ降ろしてあげますから、我慢してください」

振り落とされないように俺がしがみつく、ますます王子は走る

速度を速めるので、俺は寒いということも相俟って、動けない。

俺が王子の腕の中で揺られながら見た後方では、姫とカークは何かを話しているばかりで、二人とも王子の行動についてはまったく気に留めていない。

そこからのだが、これまでの短い期間の間だけでもこれが王子のやり方だと気がつき、俺はげんなりと気持ちを曇らせた。

遠ざかっていく幾つかのドアは王子の身長よりも高く作られていて、それぞれ別な場所にラルク石を使った模様がついている。

しかし、それ以上に気になるのはこの回廊だ。

一定の区間を抜けることに、それまでの俺の五感を狂わせて行くようで、徐々に気分が悪くなってゆく。

その原因がこの城全体に強力な力が作用しているせいだと聞いたのは、後になってからだ。

女神を守るための檻だと、この時の俺にはよくわからなかった。

「王子、どこに行く気だ？」

まさか、さっきの、こう……何とかの間じゃないだろうな」

「公儀謁見の間？」

まさか」

良かったと俺が安堵したのはつかの間だ。

「もちろん直に連れて行きたいのは山々ですけど、その前に最低限の許可を取ってこないといけないんです」

僕と血がつながっているとは言ってもこの国の王ですから、と話す王子が走る速度を少し落としたのがわかる。

「本当はリンカにもちゃんとした姫の格好をしてみたいところですが、姫の準備を待ってられないというのは残念です」

王子のというのが前回の姫の手でさせられた女装ではなく、本格的な衣装だということぐらい、いくらなんでも俺は気がつく。

「ちゃんとじゃねえって！」

回廊はいつの間にか冷たい石造りへと変化していて、俺は怒鳴り返せる程度には回復していた。

石の回廊は先ほどのような方向感覚を狂わす作用はなくて、ただ延々と石の柱が続いている。

既に走るのをやめた王子の腕の中から見えた回廊の窓からは、星と月の煌きが行く先を照らしていた。

ここが大神殿の最深部に近いといわれなくても、俺は回廊に零れている空気の欠片から微妙な変化を感じていた。

ここに来るまでの道は俺を受け入れない、反発する圧力で押さえ込まれる感じで気分が悪くなったが、この石の回廊はどこか懐かしい空気を持っている。

記憶の中にこんな感覚になる場所なんて、ひとつしかない。

でも、あの場所は既に存在しないんだから、あり得るはずがない。

急に王子が立ち止まって、俺をどこかの扉の前に降ろした。

扉から溢れてくる力に、俺は自然と身体が強ばる。

この温かく優しい力は俺を歓迎しているけれど、俺は。

「……は？」

扉には何の宝石も使われていなくて、ただ不可思議な文様が彫り込まれていた。

中心には一枚布を纏う豊満な身体の女性が二人描かれていて、扉の中心で互いの手を併せている。

他にも両扉それぞれに二人ずつが描かれ、左下には木陰で休んでいる女性がいて、左上では同じ木の上で鳥と遊んでいる女性がいて、右下では水辺で遊んでいる女性がいて、右上には七つの光の輪を投げて回す女性がいて。

彼女たちは有名な創世の女神たちだ。

一人足りない、と俺でもすぐに気がつく。

「怖いですか？」

俺にというより、自分自身に問いかけるように王子が言う。

肩に置かれた王子の手から、いつになく彼の体が強張っているのがわかった。

「王子が怖いんだろ」

「ふっ、ばれましたか」

感情を隠そうとしない王子はどうしてか震えていて、だけど俺にはその理由がわかる気がする。

力があるものは誰だって、ここに描かれていない、あの女神を恐れる。

ここにないということはこの向こうにいるというのと同じ意味で捉えていいはずだ。

すべての女神が同じ場所にあるからこそ、ここは大神殿たりえる

のだから。

王子は一度大きく深呼吸してから、扉を叩いた。中から男のしゃがれた声が応え、意外なことに王子は一礼をしてから扉に手をかける。

「老師、失礼します」

王子が力を込めると重そうな軋み音を響かせて、絵が半分に分れた。

ゆっくりと開いてゆく扉の隙間から白い光が溢れてきて、俺は思わぬ眩しさに両目とも閉じる。

それは目を射すような光でなかったし、暖かな春の空気の中で居眠りする空気が流れてくる気がしたが、それでも瞬きせずにはいられない光量だったのだ。

どんな魔法を使えば、こんな目の眩む部屋になるんだと俺は目を閉じたまま呻く。

俺の周りをぐるり、温かな力が巡り過ぎる。

目を開けた俺はまたぱちぱちと瞬きした。

改めてみた室内はいたって質素で、乳白色の大理石で四方と天地を囲まれている以外には何も無い部屋だ。

扉にいなかった女神の姿も描かれていないし、あの温かい光はどこから出ていたのかと俺はキョロキョロと周囲を見回した。

「その娘がそうじゃな？」

しゃがれた男の声は、俺のすぐ近くで聞こえた。

すぐに声を顧みだが姿はない。

そういえば、部屋の中には俺と王子の姿しか見えない。

「座ってください、老師。」

僕は構いませんが、リンカはまだ老師に慣れていませんから」

王子は真っ直ぐ空に話しかけているが、その視線をたどっても、俺には誰も見えない。

「王子、だれかいるのか？」

まさか幽霊と話しているわけでもないだろうと考えたが、俺は自分の掌がじんわりと汗をかくの感じる。

俺の隣に並んでいる王子は、お願いしますともう一度丁寧に願い出た。

誰かが俺の背中側から肩を押し、俺は前に倒れそうになって、反射的に振り向き様に握った拳を向ける。

「ほっ」

何か柔らかい布のようなものが拳に触れた気がしたが、当たらない。

攻撃が交わされたことはよくわかり、俺は苛立ちを隠さずに叫んだ。

「なにしゃがるっ」

ため息で返された返答に俺はますます苛立つ。

「やれやれ、おなごがそんな言葉を使うでないわ。」

神力が落ちるといふのを聞いたことはないかな？」

声がまた目の前で聞こえたかと思うと、俺の正面に肌色の人の頭が現れた。

頭の次には大きな目がぎょろりと現れ、皺くちゃの首、肩、腕、身体、足と順に出てきて、最後には身長百二十センチメートルぐらいの、異様に大きな目をもつ、しわしわの老人になった。

老人が着ているのは青白の神官服だが、こんな子供サイズなんて俺は初めて見る。

リゾートにも故郷にも神殿はあったが、皆屈強な身体をしていたから、そういう服しかないと思っていただけに、俺は怪訝に老人を睨みつけた。

「ねえよ、んなこと」

「わしもない」

ケタケタと老人はおかしな笑い声を上げる。

王子が諫めなかつたら、俺はすぐにでも殴り飛ばしているところだった。

「老師、気持ちわかりますが、今は先に例の……」

「そう急かすな、デイルファウスト殿下よ」

老人はのんびりとした口調だが、その言葉には王子をも従わせる力があった。

「娘よ、名はなんと申す」

「リンカだ」

いつもの口調で答えた俺は後頭部を叩かれ、叩いた王子を顧みる。

「なんだよー」

「他はどうでも構いませんが、リンカ」

俺を諷める王子をしゃがれ声が明るい笑い声とともに遮る。

「ホッホッホーッ」

リンカさん、お主、血の気は多い方かな？」

「へ？」

「まあどちらでも構わんがの」

いかにも面倒くさそうに、老人は杖を取り出して掲げる。

それまでのからかい気味の様相が一辺し、真剣なものへと変わる。

まるで神官みたいな清らかな空気が一瞬で俺を包み込んだ気がして、時間が少し止まった。

「あ、術式を忘れてしもうた」

気のせいかと俺は小さく安堵し、だが次には安堵した自分を不思議に思う。

安堵したということは、逆にいえば不安だったということだ。

こんな老人など畏れるに足らないはずなのに、俺は何を不安がっているのか。

「大丈夫、大丈夫じゃ」

リンカさん、目を閉じて心を少し鎮めなされ。

そのように騒いでいては、真実は見つけられぬよ」

別に騒いでいるつもりもなかったし、この老人にかなり不満はあ

ったが、俺はどうしてか言うことを聞いてしまっていた。

「そうそう、そのままじっとして居るのじゃよ」

目を閉じて闇の中にある俺の額に何か柔らかいものが当たり、闇が弾けて、いつぱいの白い光になる。

「リンカ!?!」

「落ち着きなされ、殿下」

下を見ると意識のない俺を王子が抱きかかえていて、老人に文句を言っているのが遠くに聞こえる。

近くに行っても影みたいに触れられないのが不思議だ。

王子たちのことが気にならないわけでもないが、俺はそれよりもっと強い旋律が自分を引っ張るのを感じて、天を仰ぐ。

部屋全体をぐるりと巡るキラキラ輝く風の流れが見えて、それは天井を通り抜け、さらに高い場所を目指す風と光の柱みたいに見える。

その柱そのものが音を発していて、それは水の流れだったり、せらぎの音だったり、風の吹く声だったり、虫の合唱だったりする。風の流れに混じる白いものは白雲だろうか。

「リンカに何かあったら、ただじゃすませませんからね、老師」

「おーこわっ、短気ではおなごにもてぬぞ」

「あなたに心配されたくありませんね」

王子と老人の声を聞きながらも、俺はその柱の先に呼ばれているような気がして、二人に背を向けた。

その瞬間、抗いようのない強い力に引っ張られ、二人の声があっ

という間に遠ざかっていく。

風と光で出来た柱の中は外から見ていた以上に強い風力と光量で構成されていたから、俺は強く目を閉じてしまっただけ、ただその流れに身を委ねた。

不安は不思議なほどなくて、流れの中にいるのは泣きたくなるほど懐かしかった。

17#よくある系統劇

暖かくて柔らかな光が俺の瞼にそつと触れる。

鼻先に香るのは春の日差しが作る若草の匂いのようにも思えるが、春は少し前に終わったのになとはつきりしない頭で俺は考える。

「ユーシィ、ニンゲンがいるよ」

「こら、そつという言い方しないの」

囁く会話が俺の耳元をそよ風と同じく、そつと通り過ぎる。

ひとつは甲高い幼女の声で、ひとつは落ち着いた大人の女の声だ。

「だって、ユーシィ、この子変よ。」

ニンゲンなのに、アタシとおんなじなもの」

甲高い声が続ける「変」と言う言葉がちくりと胸を刺す。

孤児だった俺には言われ慣れてはいるはずなのになんで今更傷つくのか、俺もよくわからない。

「アタシとおんなじに、ユーシィみたいな女神の加護を持つてる」

女神と聞いて、俺はゆっくりと目を開けた。

うつすらとぼやける視界の向こうには、陽色の波打つ髪を垂らした、白くて長いドレスを着た女がいる。

その前には白くてふわふわした何かが、ひよこひよここと長い耳を揺らしている。

ウサギのようにも見えるがそれにしても丸過ぎる体型で、どちらかという和白くて丸い毛玉に無理矢理耳を生やした感じだ。

「別に变じゃないわよ。
だって、この子はリンカだもの」

事も無げに言われて、俺は吃驚して目を見開いた。

「ユーシイ、知って」

「あんた、俺を知ってるのかっ？」

起き様に俺が噛み付くように問いかけると、白い毛玉は転がるように女の背後へ逃げて、すぐにその肩口から俺を伺いみてくる。

でも、そんなことはどうでもいい。

目の前の女は驚くでもなく、少し潤んだ空色の瞳で俺をじっと見つめる。

それが意味するところはわからないけれど、心のどこかで俺はこの女を知っている気がする。

「忘れるはずないわ」

女が伸ばした白くて細い腕に微動だに出来ない俺に、女の細い指が触れる。

微かに見える赤い線は先の尖った葉っぱに触れてできたミミズ腫れだろうか。

「どれだけ姿が変わっても、私たちは忘れないわ。

だって、あなたは」

女が何かを続ける前に遠くで誰かが誰かを呼ぶ声が聞こえてきた。ユシイと聞こえるな、なんてぼんやりと考えていた俺の前で、毛玉が騒ぎ出す。

「ちょちょちよつとやばいよ、ユーシィ！
アレスが探してるっ」

言った方はすごく焦っているが、言われた女の方はおっとりとうねなんて呟いている。

「そろそろお茶会の時間だからね。

今日こそは私にゲームで勝つって息巻いてたから、探してるんじゃない？」

「そんなのユーシィが勝つに決まってるのに、アレスっては何無駄なことしてるの……じゃなくて、このニンゲンがアレスに見つかったらヤバイでしょって！」

「なんで？」

毛玉はポンポンと女の周りを飛び回りながら訴えているが、女は一向にそれが伝わっていないのが俺から見てもわかる。

「というか、これはなんなんだろう。」

無造作に手を伸ばすと、簡単にその耳を捕まえられた。

「痛いっ、何するの!?!」

耳を掴んでいるつもりだったのだけど、身体と思しき球体部分がぐりんとこちらを向いて、サファイアみたいな赤い目をいっぱいに見開き、身体が半分に分れるんじゃないかというほど大きな口を開けたので、俺は驚き、手を離してしまった。

「ひどいニンゲンだわ！」

「痛いじゃないのっ!?!」

目の前で跳ね回りながら抗議してくる物体を俺はじつと見る。
こんな生き物は見たことがないから、魔物か妖精だろうか。

「ユーシイ、こんなニンゲン放っておきましょう。

アレスを待たせたら、……うぶっ」

怒りながらの白い物体の提案は、あっさりと女の手には遮られた。

「確かにアレスに見つかったら、少し面倒になるから」

笑顔で差し出された女の手と顔を交互に見て、俺はどうしたものかと迷う。

それに気づいているのか、女は俺の手首を掴んで、あっさりと立たせた。

「私じゃ送ってあげられないから、ソプラ姉様のところに行きましょう」

簡単に手を取られて、俺は内心で動揺していた。

身体に染み付いた拳闘士の技は無意識下でも、自然と俺を警戒させて、掴ませないはずなのに。

完全に安心しきっている自分に、俺は一番動揺していた。

誰かに手を引かれながら歩く。

そんなのはたった一度養父にされただけなのに、この女と歩くのはひどく懐かしい気がして、夢でも見ている気がして。

「リンカは毎日何をして過ごすの?」

「毎日楽しい?」

「一緒にいる人たちがリンカに優しいと、私も嬉しいなあ」
ぶんぶんと繋いだ手を振って、女は楽しそうに歩く。
でも、それも少しの間のことだ。

風に音が混じる。

聞いたことのない旋律が、強く俺を揺さぶる。

「良かった。」

ここからはソプラ姉様がリンカを導いてくれるね」

またね、と言われて俺が顧みた時には隣に女の姿は既になかった。
あの毛玉もない。

残された俺は音の方へ顔を向ける。

音の種類は聞いたことのないもので、だけど覚えのある音律の並び。

一歩ずつ、俺は前に進みはじめる。

聞いたことのないはずなのに、覚えのある音律、香りのよい緑の木々や色とりどりの見たことのない花々、争いとは無縁の世界を俺は導かれるように進んでいく。

触れることも匂いを嗅ぐこともできるのに、現実味がない。

ここは俺の生きていた現実ではないとわかるのに、これこそが現実であるべきと誰かが俺の中で騒いでいる気がする。

(違つ)

歩きながら、俺は否定する。

「ここは現実じゃない。」

俺がいるべき場所じゃない。

俺がいる場所は血生臭いけれど暖かい、人の血が、温もりが通う世界だ。

こんな風な突き放した温もりなんて、いらぬ。

いらぬ。

「お久しぶりですわね、リンカ」

急に手を取られて、俺は目の前に立つ女を見上げた。

さっきのユーシイと違って奴とは別の女のはずだが、容姿はよく似ている。

違う点といえば、女の体から発せられているような穏やかな音律だ。

俺が引き寄せられた、音の波。

「でも、ここに来てはいけなはずなのに、誰が遣わしたのかしら。徒に送らないでって、いつもいつてあるのに、しょうのないヒトね」

女の口調から、おおよその状況を彼女が読み取っていることがわかる。

さあと促されるままに俺は柔らかな草の上に座らされた。

抵抗一つしない自分の異変は感じて、逆らうことができない。

逆らおうとも思えない。

「リンカはまだここに来てはいけないの。
だから、もうしばらくはあの場所で生きて、導いてあげて」

女が小型の豎琴を取り出し、静かに歌い出すと、彼女の纏う薄布
がリズムを取り始める。

女の歌う音は心地よく、聞き覚えのない子守歌に包まれて、俺の
目蓋が重くなる。

(誰、だ?)

愛しき女神の娘

貴方は女神の願いを託されし者

永き世を導き……

歌は音になり、音が風になり、風は光になり、俺は微睡みに流さ
れた。

18#よくある終幕劇

目を覚ました俺が最初に見たのは不安そうな青空色の瞳で、すぐにそれが端正な王子の顔の一部と気がついた。

王子の前髪は俺の前髪に触れていて、鼻先一インチもない。それぐらいの距離で、俺は王子に抱きしめられていた。

「お、王子っ？」

王子は少し驚いた顔で数度瞬きし、そのまま顔を近づけてきて。

俺の肩に顔を埋めた。

「……よかった」

それは心の底からの安堵で、こんな風に心配されることがない俺は戸惑う。

なんで俺なんかをそこまで心配するのか、今も俺には分からない。だから、こういう時にどう反応したらいいのかわからない。

感謝も謝罪も違うだろうし、だからって慰めるのはもっと違うだろう。

俺はただ微かに震えている王子の背中に手を伸ばす。

「大丈夫じゃと言ったんに、わしゃ信用ないのー」

しゃがれた残念そうな老人の声で、俺は伸ばしかけた手を止める。無意識とはいえ、自分が何をしようとしていたのか考えると、逃げ出したいほど恥ずかしい。

だけど、王子の腕の中から逃げ出すのが難しいことはわかってい

るので、俺は視界の範囲だけで状況を判断するしかない。

王子の金髪や身体が邪魔でよく見えないが、石造りの天井はすごく高い場所にある。

こんなに高い天井を最近見たのは、王子に連れてこられた大神殿しかない。

そういえば、あの場所へはここから飛ばされたんだと俺は思い出す。

それほど時間が経っていないのは、王子の匂いやマントの汚れ具合からもわかった。

「王子、俺……」

俺は手を動かせるだけ動かして、王子の身体を叩くが反応はない。

「おい、王子」

「そのままで構わんよ、リンカさん」

目の前に皺だらけの顔が逆さまに映り、俺は瞬間的に身体を硬直させていた。

「豎琴を弾く女性には逢ったかの？」

「たて、ごと……？」

こういうのだ、と老人が宙に描いて見せるが、俺だってそれくらい知っている。

ただあまりに唐突だったから、聞き返してしまったただけだ。

「会ったよ」

「ほうほうっ」

イラついた俺の返答に対して、老人は嬉しそうに笑う。

「元気じゃったか？」

「病気には見えなかったな」

「そーかそーか」

俺の皮肉にも上機嫌に頷き、老人が何かを口にすると、俺と老人の間に大きめの厚紙が出現した。

その寸前、かすかに俺は老人の目に涙が光っていたのを見た気がする。

でも、すぐ後に訛声で調子の外れた下手な鼻歌が聞こえてきたから、気のせいだったのだろう。

老人は自分の顔ほどもある大きな白い羽ペンを取り出して、厚紙に何かを書き込んでいる。

「おい、王子」

その隙に俺は王子をもう一度叩く。

もう震えてはいないから、何か別な考え事でもしているのだろうか。

「いい加減に離せ」

さっきよりも強めに叩いたせいか、王子はしぶしぶと顔をあげて、俺を見下ろす。

「老師は信用してますけど、」

俺の頬にそつと王子の大きな手が触れる。

「それとこれは別です。」

僕は本気でリンカを「

「できたぞー」

俺と王子の顔の間を丸めた紙が遮る。

顔を向けると、にやにやと人の悪い笑顔の老人が俺たちを見ていた。

「大切にするのは構わんが、余裕のない男は嫌われるぞ」

不機嫌の証に眉間にシワを寄せた王子が老人から紙を奪いとる。

おかげで少しばかり距離ができた俺は安堵の息をつくことができた。

いくら顔に興味がないといっても、鼻先の触れ合う距離での会話は落ち着かない。

「あなたには言われたくありませんね」

「年寄りのいうことは素直に聞いとくもんじゃないよ」

話しながら紙を広げた王子が一瞬固まる様子に、俺は首を傾げる。紙が厚くて、俺からは何も見えないから、何故王子が固まったのかわからない。

「これは……本当なんですか、老師」

老人が深く頷くと、王子は辺りに花でも飛ばしそうな満面の笑顔を浮かべた。

「リンカっ」
「わっ」

また俺を抱きしめてきた王子はさきほどよりも強い力で、苦しいぐらいだが、喜びだけはいやというほど伝わってくる。

「な、なななんだ!？」

おいこらヤメロっ!!」

「リンカはやはり僕が直感したとおりの人です!

これで僕は堂々と言うことができる」

「あ!？」

何言ってるんだ、王子、」

俺の疑念に答えることなく、唐突に俺から身体を離れた王子が老人に向き直る。

「ありがとうございます、老師っ」

対して老人はホッホッと奇妙な笑い声をあげる。

「殿下が礼を言うと、槍が降るからやめなされ」

少し離れたからと言って抱かれていることに違いはなく、俺は王子と老人の間の見ない会話にかすかな予感を感じていたから、逃げたくて仕方がない。

「離せつてば」

「それじゃあ、僕はもう行きますね」

俺を抱えたまま王子が歩き出すから、当然俺は慌てた。

王子の足は戸口ではなく、外の光が入り込むテラスのような場所へと向いている。

「下ろせって言うてんだろ、王子っ」

「暴れないでください、本当に落としてしまいますよ」

そう言いながらも王子の腕が緩む様子はなく、勝手に開いた大きな窓から俺たちは外へと出た。

上から降ってくる眩しい光に俺は目が眩んで、少しだけ目を閉じる。

「老師」

王子が一度部屋の中を振り返る。

その笑顔は陽の光よりもまぶしく見えて、俺は一度は開いた目をすぐに細める。

この人はなんでこんなにも俺を気に掛けるのか、まだ俺にはわからない。

「老師、僕はリンカを妻にします」

堂々とした宣言は何度も耳にしているが、冗談に聞こえたことは一度もない。

「そのつもりでわしを叩き起したんじゃろ。」

わしや昼寝の最中じゃったに」

老人はそれを驚きもせず、欠伸で答えて、俺たちに背を向ける。その背に王子が言葉を続ける。

「あなたの証明が一番効くんですが、ここまでしてくださるとは思いませんでした」

「なんの話じゃ。」

「わしは嘘の証明など書かぬよ」

「そうでしょうね」

王子の視線が俺に降りてきて、その甘やかさに俺は居心地の悪さを感じて顔を背けた。

「後ほど大神官殿宛で極上の神酒を届けさせますが、飲みすぎないでくださいね。」

「おそらくすぐにでも……」

「わかったわかった。」

もう昼寝するから、すぐには起こさんでくれれば、それでよいよ」

老人の気配が唐突に消えて、俺は室内へと目を向ける。
残滓もないが、あれは何者だろう。

「リンカ、もう少しだけ我慢してください」

「え？」

俺が何かを問い返す前に、ふわりと俺たちを魔力のこもる風が巡りだす。

魔力風で王子の金髪も緩やかに波打つ。

「 風の間隙、空の裂け目…… 」

王子の魔力が解放たれる瞬間、俺は強く王子の襟を掴む。

安心させるように笑いかけてくれるが、不安ばかりが俺の中を過る。

この人はなぜこんなにも俺に拘るのだろう。
俺はただの孤児で、綺麗でも可愛くもないし、女にさえ見えないのに。

「王子」

魔力の風が止んだ場所で、俺は王子を見上げたまま問いかける。

「なんですか、リンカ？」

王子は最初と変わらない笑顔を返してくれるが、もう俺はそれが作り笑いじゃないと見分けられる。

瞳の奥の甘やかさに気がついたのはあの遺跡の後で、俺はそれから必死に目を背けてきた。

王子と俺は住む世界の違う人間だ。

何をどう望んでも、俺と王子が一緒にいることなんてできない。どれだけ王子が望んでも、無理なものは無理なはずだ。

俺が願っても、いや、俺が願えば王子は　。

「何してるの、二人とも」

固い姫の声音に、俺は我に返る。

自分が何を考えていたのか、何を言おうとしていたのかを思い出して、恥ずかしい。

俺は腹黒王子なんかどうでもいいはずだ。

目的はこいつから金をせしめることであって、一緒にいたいなん

て望んでもいない。

勝手にこんな遠くに連れてこられて、迷惑しているはずだ。

「な、なんでもねえ、よ……」

緩んでいた王子の腕から抜け出した俺は姫が抱えているものを前に一歩後付さる。

それは記憶がそうさせるのだから、もう不可抗力だ。

姫が手にしているのは、青いベルベットの光沢を持ったひらひらしたドレスで。

「姫、五分でできますか」

「任せて」

姫を助けに行った時の状況を思い出して逃げたい俺の両肩は、後ろから王子にしっかりと抑えられていて。

「すぐに迎えに来ます、リンカ」

俺にささやいた王子はそのまま俺の背中を姫に向かって強く押し出した。

「ちよ、まで、王子……っ」

「リ、ン、ちゃんっ」

がっしりと姫に両肩を抑えられた俺を残して、王子のくぐり抜けた扉はあっさりと閉まってしまった。

「リンちゃんにはレースとかフリルよりもシンプルなこつこつというタイ

「ブが似合うと思うのっ」

「ひ、姫」

「時間はないけど、私が世界一の美少女にしてあげるわねっ」

これだけ嬉しそうな姫を留めることができるわけもなく。

俺は観念して、抵抗そのものを諦めた。

そもそも俺が姫に怪我を負わせることができるわけもなく、怪我を負わずに彼女から逃げ切れないのは前回で身にしみている。

この姫は王子の幼なじみというだけあって一筋縄ではいかないのだ。

大人しくドレスに袖を通し、鏡台のない部屋の中で椅子に座らされた俺は、姫を前に問う。

「なあ、姫、」

「動かないで」

「……はい」

しゃべるのもダメだと無言の意思を感じて俺は仕方なく問うのをやめた。

そのあとはされるがままに化粧を施され、きっかり五分後に部屋の戸がノックされる時には目の前で姫が満足そうな笑顔を浮かべている。

「私、天才っ！」

美容師に転職した方がいいんじゃないかしらっ」

王子も王子だが、姫も行動が謎だ。

人を着飾るのは趣味だと以前に聞いたが、姫は本気で王子が好きだと俺でもわかる。

その王子は俺に求婚していて、了承しているとはいえ、それでも姫にとつての俺は俺の意志に関わらず恋敵となるはずだ。なのに、俺を着飾ろうとするのが理解できない。

部屋をノックする音で、返事をしながら戸口まで駆けてゆく姫を、俺は呼び止める。

「姫、なんで、あんたはここまでするんだ？」

姫にとつちや、俺がいない方が都合いいはずだろ。

俺がいなけりゃ、姫は王子と結婚できるんだから」

好きなんじゃないのか、と俺が問うと姫は至極真面目な顔で俺を見返してきた。

「そうね、確かにリンちゃんの言うとおりよ」

「だったら、」

「でもね、それじゃいつまでもデイルは私を好きにならないし、私も不満の残る結婚になるだけだわ。

そんなのはまっぴらっ！」

姫の白くて小さな手が彼女のドレスの裾をきつく握り締める。

「私はデイルを好きよ。

でも、私を愛してくれない人とは一緒になれない。

だってそんなの……そんな哀しい結婚なんて、私に似合わないでしょ？」

一瞬姫は泣くかと思った。

だけど、俺の予想に反して姫は凜とした綺麗な笑顔で微笑む。

「姫、まだですか？」

戸の向こうから、少しばかり焦った王子の声と忙しないノックの音が響く。

「リンちゃんは嫌かもしれないけど、私はデイルの願いが叶って欲しいと思ってる。」

だから、どうかデイルを

一際大きなノックに、姫の声はかき消された気がしたけれど、俺には聞こえた。

「おまたせー、デイルっ」

「何をしていたんですか？」

部屋に入ってきた王子が俺を見て、あの時のように息を飲む。王子も着替えてきたのか、服もマントも新調している。

「んー、女の子同士の内緒話よ。」

ね、リンちゃん」

姫のさっきの言葉が俺の中で木霊する。

どうか、デイルを好きになってあげて。

俺の前にゆっくりと歩いてきた王子が俺の前に跪く。それは、絵本で見るような騎士の礼だ。

「……リンカ」

王子が白い手袋をした俺の手をとる。
見上げてくる王子の視線は愛しさが溢れていて、姫に言われなくても俺はいつの間にか王子のことを好きになっていたのかもしれない。

「どうか、僕の願いを叶えてください」

俺はきつく両目を閉じる。

「僕の女神になってください、リンカ？」

それは古くからある求愛の言葉で、俺は俺がそれを言われるに値しない人間だと知っている。

どんなに望んだとしても、俺にはその資格がない。

俺は　あの時に決めただ。

「王子、立ってくれ」

目の前が影に遮られたのがわかり、俺は静かに目を開いた。

彫刻のような造詣を持った端正な顔、白磁の肌に、金を繕り集めた輝きを宿す髪、そして、果ての無い魔力。

容姿も地位も何もかも、王子は俺とは別の世界の人間で、そして、俺は王子を利用しようとする汚い下層の者だ。

「茶番はここまでだ、王子。」

あんだ、最初から何もかも気がついてたはずだろう。

俺がアンタたちを売ろうとしていたことも、全部知ってたんだろ
うっ?。」

目の前の王子の表情は揺らがない。

「俺は女神の眷属なんかじゃねえし、王子が思うほど綺麗な人間じゃないんだ。」

あんたの隣にいられるような人間じゃないんだよ」

だから、と俺が続ける前に王子が俺の顎に手をかける。

「だから何です？」

「っ、だから、そんなもの受けられないって……っ」

俺の叫びが塞がれる。

大きく目を見開く俺の前には王子の蒼天の瞳が閉じられていて、長い睫毛が震えているのが見て取れる。

顎をつかんでいる右手はそのままに、左手で俺は王子に腰を掴んで引き寄せられる。

王子と触れ合う口から俺に伝わってくるのは甘い痺れで、触れているだけなのに泣きたくなるほど優しくくて。

俺に抵抗できなくさせる。

「リンカが汚いと言うのなら、僕の方がもつと汚い。」

僕は僕の意志でこの手を染める事なく何人も人間を陥れてきたんだ」

北の大国クラスターは冷酷非情な王が治める国と、俺も聞いていた。

王子といるほどにそれに王子が関わっているだろ言うことにも気がついていた。

「リンカ、誤解しないでほしい。」

僕は願いと言う形をとってはいますが、最初からあなたを手放すつもりないんです。

女神の檻に閉じ込めて、あなたを幽閉することもできる」

だけど、俺は知っている。

非情なだけじゃ人はついてこないし、王子は真実の優しさを知っている。

だからこそ、城に戻って迎えてくれる人がいて、姫やシャルダン様のような味方がいるのだと。

「……あなた、馬鹿だな」

「リンカには及びませんよ」

「俺が大人しく幽閉されるとでもいうのか。」

刻龍が破れない檻なんかあると思っっているのか？」

助けだされたとはいえ、紅竜があのまま俺を諦め、引き下がるわけもない。

どんな檻も刻龍にとつちや意味のないモノだから、すぐにまた俺は捕まり、今度こそ逃れられないだろう。

そして、舞台を台無しにした王子達は。

俺の肩と胸が苦しくなり、耳元で王子が囁く。

「だからこそ、リンカは僕の隣にいななければいけません。

そうしなければ、弱い僕はすぐに死んでしまいますからね」

冗談めかしているけれど、大切に俺を抱きしめる腕の力が語っている。

「あんたを守れと？」

「はい、そういう契約です」

王子は優しいから、俺がそうしなければ動けないとわかっているから。

道を作ってくれる。

逡巡する俺を腕を緩めて見下ろす王子がどうだと微笑んで見せる。本当に噂通りの大した策士だ。

だけど、俺はその索に収まるような人間じゃないんだ。

両腕をつっぱって王子から体を離す。

「本当に馬鹿だよ、王子」

「ふふっ、そうかもしれませんが」

笑顔で肯定する王子を、俺は真面目に問い詰める。

「あんだ、最初から全部知ってて仕組んでるのか？

俺が本物の、女神の眷属、と知ってて」

久方ぶりにそれを口にすると、離れた場所で姫が息を飲んだ。

王子は驚かないと言うことは、やはり。

「いいえ、リンカ。

僕が知ったのはついさっきです」

「うそつけ」

「本当です。

でなければ、大神官の署名まで求めに行く必要などないでしょう。それより、僕はリンカが知っているとは思いませんでしたよ」

そうだろうと、俺は顔を背けて、卑屈に笑う。

「知らなきゃ、ここまで生きてこれねえよ。」

とつくにどこかに売り飛ばされてどこぞでくたばってるだろうな」

俺が自分の系統リットを知ったのは養父と出会ってから数年を過ごしてからのことだ。

俺が養父を師と呼んだその日に、彼から俺が女神の眷属であると知らされた。

それが何を意味するのかと言うことも、全部を聞いた。

「女神の眷属は至宝、手にするモノに世界のすべてを与える　な
んで伝承があるせいで、何人も殺されたって聞いている。」

だから、俺は自分を守るために拳闘の技を、禁忌にまで手を染めて身につけてきたんだ」

俺がひとつ腕を振るう。

何の小細工もしていないのに、小さな風が起こり、王子の左袖が切れて、その先で壁に大きな亀裂が入った。

非常時以外には決して使わない、暗殺術。

「俺はこの技で生き抜いてきた。」

いくら女神の眷属でも、そんなやつに　資格なんかねえだろ」

幸せになってくれというのが養父の遺言で、それだけを掴むために俺は生きてきた。

でも、人殺しの技を身につけて、それを使ってきた俺にそんな資格なんて、女神の眷属である資格なんかとつくにないってことぐらい、自分でもよくわかってる。

「王子、あんだだつて、それだけの力を持つてる。誰かに守ってもらう必要なんかねえだろ」

この旅の間俺が何度も感じていたことだが、王子の魔力は本当に無尽蔵で果てがない。

世界に三人もいないといわれる本物の魔法使いだと言うのも、今じゃ疑いようもない。

「俺も、今更誰かに守られたくなんかねえんだ。

だから、」

「ふっふっふっ、はははっ」

俺の言葉を王子の笑いが遮った。

「言いたいことはそれだけですか、リンカ」

「お、おう」

王子は綺麗な作り笑顔を俺に向けてきて、おもむろに俺の腕を掴んだ。

「言ったでしょう、僕はリンカが女神の眷属だろうが、他のなんであるうがどうでもいいんです」

「なっ」

そのまま俺を引きずる力には迷いが無く、決意の表れなのか、俺にはまったくその手を外すことができない。

「僕にとってはリンカがリンカであることだけが重要で、それ以外は些末な事。

もしあなたが女神の眷属ではないのだとしても、僕に釣り合う系

統をでつちあげるつもりでした」

姫の隣を通りすぎる時に助けを求めたが、相変わらずの笑顔で見送られてしまった。

「なんだよ、それっ」

「僕は最初から素手で叔母上の親衛隊を殴り倒すリン力を気に入って、そして、姫を助けようと真剣に考えてくれるあなたを好きになった。

ただそれだけのことなんです」

女神の眷属であることがどうでもいいだなんていう人間はこれ二人目だ。

あの紅竜だって、どこかで俺が女神の眷属だと聞きつけたから手にしたがつたっていうのに、それを関係ないだなんて。

「離せっ」

「まったくそんなことでこの僕が振られるなんて、冗談じゃないですよ」

王子がどこかの綺羅びやかな大扉の前で立ち止まる。

扉の両脇には剣を携えた兵士が両脇に控えていて、床には赤い天鵞絨の絨毯が敷かれていて、これではまるで「謁見の間」みたいじゃないかと俺は青ざめた。

「で、殿下、いつお戻りになられたので」

「父上は仕事中かな？」

王子の問いに答えながらも兵士たちが王子と俺を交互に見比べる。

「コゼット公爵と談笑をしておられますが、その、」
「そうか。」

「じゃあ、開けてくれ」

この扉が開かれたら、ますます後戻りができなくなる気がして、俺は躍起になって王子の腕を外そうと試みる。

「こ、国王陛下！」

デイルファウスト皇太子がお戻りになられました」

一人が扉の中へと入り込む間に王子が俺の腕を引き寄せ、しつかりと片腕で抱きしめる。

王子の上品な太陽の香りが近くで香り、先程のキスまで思い出されて、心臓がうるさい。

「な、なにすんだ、離せっ」

「こらこら、仮にも国王陛下への謁見なのだから、言葉遣いはもう少しご婦人らしくお願いしますよ、リンカ姫」

「ひ、姫っ？」

何を言い出すんだと俺が抗議する前に、大扉が開き始める。

その向こうには威厳のある壮年の男性と、立派な服を来た白髪の小男がいる。

白髪の小男は俺たちを見て、ひどく驚いているようだ。

「デイ、デイルファウスト殿下……っ」

王子が冷ややかな目で小男を見てから、まっすぐに威厳のある男性の前へと進んでゆく。

俺を片腕でしっかりと抱いたまま。

「ただいま戻りました、父上」

「よくぞ無事で戻ったな、デイル。」

まあ、お前に限って、無事に戻らぬこともあるまいが」

王子が父上と呼ぶと言うことはすなわち、この男性はクラスター国王とすぐに俺は理解した。

本当に俺をこんな場所に連れてくるなんて、今更疑うべくもないが本気なのだろうか。

「ところで、デイルよ。」

おまえはサフラン姫を迎えに言ったのではなかったか。

その娘は何者だ？」

サフラン姫って誰だと思ったが、流れからして、俺がずっと姫としか聞いていなかった女性のことだろう。

「姫ならばすでにそこにいるコゼット公爵のご子息と帰還しております。」

どうやら、どなたかの差金で刻龍に攫われているようでしたが、ここにいるリンカ姫の手をお借りして、無事に取り戻した次第にございます」

姫をさらったのはシャルダン様じゃなかったかと考えかけた俺の肩が強く王子に掴まれ、見上げる。

「リンカ姫とおっしゃられるか。」

サフラン姫の父として、礼を申し上げます」

国王と言う人に頭を下げられて、俺も流石に慌てる。
貴族や王族は嫌いだが、頭を下げられたいわけじゃない。

「や、やめてくださいっ。」

私は王子に頼まれただけで……っ」

「本当に、有難うっ」

深く深く頭を下げられては俺の立つ瀬が無い。

どうしたものかと王子を見上げると、任せるとでもいうのか軽く頷いた。

「父上、こうして無事に戻ったばかりで恐縮なのですが、今日は急ぎの願いがあって、参上しました。」

本来ならばきちんとした手順を踏んでおきたいところなのですが」

王子の言い回しに、俺は眉根を寄せる。

これは、この流れはなんだか嫌な予感しかしない。

「お、おい、王子」

「姫を救うのを手伝っていただいた折に私はこのリンカ姫の勇敢さ、聡明さに心揺れてしまいました。」

つきましては、サフラン姫との婚約を破棄し、こちらの姫との婚姻を望みたいのですが、許可願えますか」

やっぱりか、と俺は自分の腰に回された王子の腕を強く掴んだ。

「な、何言い出すんですか。」

その件については……っ」

「彼女も私を好いてくれておりますし、大神官殿に系統の検査をしていただいたところ、何の問題もないとわかりました」

王子が国王にさつき老人に渡さえた紙を差し出す。
受け取った国王はその内容と俺を何度か見比べ、柔らかな笑顔を
浮かべた。

「おまえのことだから、他の姫君を黙らせる手はすでに打つてある
のだろうな」

「当然です」

「では、私が言うことは何も無い。
好きにするが良い」

王子が口の両端をあげて、嬉しそうに笑いながら頭を下げる。

「有難うございますっ」

「后にはきちんと挨拶しておけよ。」

私にもあれはどうにも手に負えぬ」

「はいっ」

失礼します、と二人で謁見の間を出たすぐあと、廊下にだれもい
ないのをいいことに、俺は王子の襟を掴んで締め上げた。

「誰が誰を好いてるって!？」

「いい加減なことをいいやがってっ」

「う……っ、嘘ではない、でしょう。」

リンカは僕を好きなのだから」

驚いて、俺が手を離すと、王子は荒い息を抑えて、数回深呼吸す
る。

俺は一度も王子にそんなことを言った覚えはないのに、なんでそ
んなことがわかるんだ。

「なんでそんなことがわかるのかって顔をしていますね。そりゃわかりますよ。」

リンカは素直ですからね。

それだけ全面に好きだと出されては気がつかない方が無理です」

強気に笑う王子から距離を取ろうとしたが、すぐに俺は王子と位置を入れ換えられてしまった。

後ずさりしてもすぐに背中が冷たい壁につく。

「リンカ、あなたは自分で思うよりもずっと素直で可愛いんですよ。この僕が手放したくないと思うほどに、とても魅力的な女性です」

王子の右手の細い指がこのドレスに着替えた部屋の時のように俺の顎にかかり、持ち上げる。

「そろそろ覚悟を決めてください」

「覚悟って、何のだよ」

柔らかく王子が俺に微笑む。

「もちろん、この僕を落とした覚悟ですよ。」

僕はこれと思ったものは手に入れる主義です。

いつかリンカの心も僕のものにしてみせますからね」

近づいてくる王子の整いすぎた顔に、俺は強く目を閉じる。

そんな覚悟はないけれど、俺はとっくに王子に心を寄せている。知らないうちに信頼している自分に、気がつかないわけがない。

来ると思ったキスは来なくて、俺は恐る恐る目を開ける。

鼻先の触れ合う距離にいる王子はひどく切ない顔で俺を見て、だがすぐに強く笑って俺の鼻に噛み付いた。

「痛っ」

「さて、リンカで遊んでいるのもこの辺にして、僕の部屋に行きましようか」

鼻先を摩る俺の体がふわりと浮かび、この城に来た時と同じく王子の腕に収まる。

「へ、部屋!？」

「叔母上に挨拶に行けと言われたからには、作戦を練る必要があります。」

「カーク、あなたの主人と姫と西の魔女殿を僕の部屋へ呼んでおいてください」

短い返答が聞こえて俺が振り返ると、すでにそこには誰もいないが。

「……カークが、いたのか」

「彼はいつもいますよ。」

「魔女の眼がありますから」

「は!？」

「西の魔女殿は僕以上の魔法使いです。」

「きっと良い知恵をもっていることでしょう」

王子が言っていることは、俺には分からない事だらけだ。

だが、少なくとも王子が俺を無理やりどここうするために部屋へ連れて行くのではないとわかり、俺は安堵の息をついた。

「本当なら、すぐにもリンカを僕のものにしてしまいたいです」
「……っ」

「それは後にしましょう。」

大神官殿にも厳命されていますしね」

残念だといいながらも王子の足取りは軽い。

「それよりも、先に部屋にいて見せつけた方がいいかな」

「な……っ」

「そうですね、せめてリンカが僕を好きだと言ってくれるまで、彼らが来るまで口説きましょうか」

とんでもないことを言いながら足を速める王子だが、相変わらず腕が緩む気配もなく。

俺はこれからもこんなのと付き合っていけるのだろうかと軽い頭痛と、僅かばかりの和やかな幸福を噛み締めた。

「しかたねえから、守ってやるよ。」

「ディルフアウスト・クラスター」

立ち止まった部屋の前で俺を降ろした王子が、室内の騒々しさに軽く落胆しているのを見て、俺は王子の左手を握って小さく囁く。

それが聞こえたかどうかはわからないが、少なくとも俺を見て微笑んだ王子は、悔しいけれどやはり格好良い本物の王子の顔をしていた。

18#よくある終幕劇(後書き)

続きは外伝。

外伝1#吊いの花(前書き)

冬の話

シリアス風味

客演、姫

外伝1 # 弔いの花

ひたひたひた……

冷たい石の床を素足で歩く音が聞こえる。

ひたひたひた……

昨夜降ったばかりの雪を抜けてきたきたのか。

その心意気は誉めたいが、正直バカじゃねえのと言いたくなる。

こんな寒い夜に素足で石の床を歩くなんて、よほど足の裏皮が厚いわけでもなければ赤く爛れ、血を滲ませていることだろう。

てゆうか、マジで馬鹿だろう。

ひたひたひた。

足音が部屋の扉の前で止まったことに気がつく。

そつとベッドを抜け出し、気配を殺してドアの脇に移動する。

別に自分の部屋なんだからそこまで警戒しなくても、といわれたこともある。

が、どこからでも紅竜は入ってくるし、方々から刺客は来るし、言った当人は夜這いにきやがるのだから、仕方がないと思ってもらいたい。

よくよく考えたら、普段から碌でもない状況なのは、全部ここに俺をつれてきた王子のせいじゃないか。

でも、不思議と憎めない。

最初にあんなに毛嫌いしていたのが嘘みたいだ。

ドアの側面についたとたん、大きな音を立てて扉が開いた。

「リンちゃん、あっそびつましょおっ」

「なっ、姫え？」

薄紅色のネグリジェを着て、白く細い腕に何故か酒瓶を二、三本抱えてはいるが、緩く編み込まれた金髪も普段より火照って赤い頬も、紅の花をつけたような唇も、どうみても姫である。

彼女はふらふらとこちらに近づいてくると、無邪気な笑顔で微笑んだ。

つられて笑い返したものの、おそらくは引きつっていたに違いない。

「姫、酔ってますね」

えへへーとだらしく笑いながら、彼女は俺に抱きついてくる。抱きつき癖程度なら別に構わないんだけど、何度か彼女の酔っている姿を見ている俺は彼女を無理矢理に立たせ、ベッドに連れて行く。

「リンちゃんもお、一緒に飲もうと思ってえ」

背中を押されながら陽気に話し、酒瓶を振り回す。

外見からはとても想像できない醜態だ。

口を開かなければ、深窓の姫君にしか見えないというのに、もっともない。

「はいはい。」

今日はいったいどんな口実で飲んでたんですか？」

一応彼女も王族の一人であるし、日々外交業務もある。そうそうは飲ませてもらえないと聞いたこともあるのだが、どうやら彼女はちよくちよく御台所に行つては、仲の良い使用人からもらってきているらしい。

わかつていて渡しているのかどうか気になるところだ。

「ちよ、姫。

脱がせないでっ」

「じゃ、自分でやる?」

「脱ぎません!」

いいじゃない、とふくれて彼女は椅子に座る。

テーブルに持ってきた酒瓶を並べ、ポケットから紙札を一枚取り出す。

紙札に描かれているのは文字のような模様のような不可解なもので、彼女の持つ武器でもある。

通常、彼女はその紙札を使って刺客を退けたりしているらしい。直接見たことはないからなんとも言えないけど。

彼女は紙札を一別した後、そのまま空中に放つて、またポケットから取り出す。

それを何度か繰り返し、床に数十枚の紙札がばらまかれた後、彼女は紙札を一段と高く放り投げた。

「お酒飲むグラス2つ召還えいっ」

「するなよっ」

紙札をそんなしょうもないことに使うのは、彼女以外に見たことがない。

てゆーか、酔った勢いで札を使うな。
もつたいない。

酒臭さがこちらまで漂ってきたので、仕方なく窓を開ける。
吹き込んだきた風が冷たいと姫が笑う。
いつにもまして陽気だ。

「何かあつたんですか？」
「何も無いわよっ」

だんつと強く拳をテーブルにたたきつける。
どうみても何も無いとは言い難い。

「あーあ。
リンちゃんが男だったらなあ」
「俺もそう思います」

もしも俺が男だったら、こんなところに連れてこられることもないだろうし、姫だって王子の婚約者のままだったろうし。

「あ、でもそれじゃリンちゃんて・遊べないから駄目」
俺「で」遊ぶな。
本当に。

「リンちゃんは変身させ甲斐があるからなあ。
……男でも変わらないかもだけど」

女神の眷属はまず美人になるから。
そんなことを言われても俺は伝承の詳細まで知らないから、わか

らない。

よく知らない俺は、姫の向かいの椅子に座り、手近な酒瓶から少量をグラスに注ぐ。

住まわせてもらっている場所は神殿の最奥だから、不謹慎だがバレもしないだろう。

ここに近寄ることが出来るのは少数の王族と大神官、神官長たちとシャルダン様ぐらいだ。

例外的に紅龍も来るが、許可云々ということとなるとあるわけもないので除外していいだろう。

「ねえ、デイルはリンちゃんに優しいでしょ？」

そうなのだろうか、と首をかしげている俺を無視して、姫は続ける。

「いいなあああ私も優しくさーれーたーいーいいい」

誰に、と聞くのは憚られた。

彼女がデイルファウスト王子を好きなのは周知の事実だからだ。ただ王子に見る目がないだけ、としか俺には思えない。でなければ、俺を選んだりしないだろう。

「私の系統はさあ、^{ルーツ}」

ああ、また始まった。

これから約三時間は続く話だ。

「て、何度も話したか」

「ええ」

そういうと、しばらく彼女は黙っていた。

酒を飲みもせず、グラスを手の上でただ弄んでいる。

彼女らしくない憂いを帯びた表情は儂げで、どんな男でもたちまち彼女の虜になってしまっただろう。

だけど、俺は女で、姫のことを図らずもよく知っていて。

彼女の憂いは俺が原因で。

かける言葉は見つからなかった。

いなくなるという選択肢をどうして選択しないのか。

と、以前紅竜にも言われた。

「帰ればいい。

俺の所へ」

帰るも何も、俺は紅竜と住んだことなんてほんの一、二日ぐらいしかない。

気に入られてはいるが、まったくの他人だ。

後半はともかく、帰れば、という言葉に少なからず動揺した。

帰りたい、でも、離れたくないという気持ちに気がついたからだ。

結局、俺も結構王子が気に入っているのだ。

「リンちゃん」

消え入りそうな姫の声に呼ばれて、思考を中断する。

「なんですか？」

姫は椅子を立ち上がって、よろよろとこちらに歩いてきて、俺の

前に座った。

「遊んでいい？」

いいわけあるか。

反論した言葉に上から声が被される。

「いいよ。」

思う存分、やっちゃって

戸口に王子が寄りかかり微笑んでいる。

しまった。

姫の足が傷つきもししていない時点で王子が来るのも予想しておくべきだった。

「やったーっ」

「うわ、こら脱がすなっ」

「えー」

「えー、じゃないっ」

なんとか姫の腕を逃れている隙に、王子はちゃっかりと椅子に座っている。

あーもう、この男は。

「 囁く風 春の日の安らぎ 彼女に穏やかな平安を 」

俺の目の前で彼女の目元がとろける。

そして、幸せそうに目の前で眠りに就いた。

倒れる寸前の姫を俺が抱き留めると、幸福な寝息が聞こえてくる。

まあ、本人が幸せならいいんだけど。

「おいこら、姫をここで眠らせるわけにはいかないだろ」

「いーじゃないですか、別に。」

よく眠ってるし、ちよつとやそつとじゃ起きないですよ」

「そーゆー問題じゃねえだろ」

俺の元に王子はゆっくりと歩いてきて、姫を抱える。

彼女を見る目はごく親しいものに向けるものだと思うが、姫がいうには家族みたいなものだかららしい。

王子にとっては妹みたいなものだ。

王子が使ったのは、姫専用の安らぎの魔法。

しかも自作の簡易呪文だ。

あいかわらず、ほいほい魔法をつかうやつだ。

でも、姫のためだけに作られたこの魔法は、今のところ、彼女にしか使われてはいない。

王子は彼女を俺のベッドに寝かせる。

姫が眠っていると言っただけで、粗末な木造りのベッドが豪華に見えてしまうから不思議だ。

「じゃ、行きましようか」

「どこに」

唸るように尋ねても王子は答えず、いつも微笑むだけだ。

あいにくと俺には魔法が効かないし、王子にやられるような腕でもないの、さっきのように無理矢理に連れて行かれることはないのだが。

「ここ最近、どうも逆らえない。

差し出された手に自分の手を重ねる。

当然引っ張られて、その腕の中に抱かれる格好になる。

「 彷徨う風 流水の雲 彼女の望む場所ラースイスへ 」

え、と思ったときにはもうそこにいた。

俺が育った町で、養い親が眠る墓所に。

「なんで」

知っているのか、という声はでてこなくて。

ただ風だけがひゅうひゅうと喉を通り抜けた。

来たいなんて一言もいっていない。

ましてや、養い親の話なんて誰にも言ったことはない。

それなのに、どうしてここがわかったのだらう。

「 剣士より強い拳闘士アルバ・クルーラ・ラースイスは、貴方の師でしょう? 」

師であり、父であった彼と過ごしたのは六年。

赤ん坊だった俺を拾い、六歳まで育ててくれた。

近所の火事で逃げ遅れた子供を助けるために崩れそうな家に飛び込み、大火傷をして戻ってきた彼は次の日に息を引き取った。

初めて大声をあげて泣いた。

一晩中泣いて、埋葬した日の夜に俺は町をでた。

年若いせいもあったが、たいした仕事ももらえなくて何度も死にかけた。

でも、何故かそういうときに助けられてしまう。死んでもいいと思ったのに死ねない。

師匠であり父である彼の言葉が頭から離れない。

「大事を成し遂げるまでは、絶対死ぬんじゃねえぞ。そんなことしたら、許さねえからな」

死んだ人間がどう許さないのかと思ったが、もしかしたらこうして助かってしまうのは師のせいかもしれないと思った。だから、生きようと思った。

そして、王子と出会い、今、ここにこうしている。

「り、リンカ？」

声を出さずに泣く俺に動揺していた王子は、最初に出会った頃のことを思い出させた。

あのときから、全部始まっていたのかもしれないと、王子の腕の中で思った。

ディルと出会うことも、こうして好きになるということも。

「ありがとう、ディル」

ひとしきり泣き終えてから、アルバ師の墓に向かい合う。

「あ、花……」

「出しましょうか？」

お前は奇術師か。

いや、魔法使いだったな。

「いいよ。」

魔法で出したものなんて飾ったら、アルバにどやされる」

そうですか、と少し残念そうに、だが何かを含んだ言葉で話す。
でも、まあいいか。

「酒」

「え？」

「もってんだろ」

マントに手を突っ込み、腰から袋を引き抜いて素早く戻る。

「はやっ」

師の墓に酒瓶をひっくり返し、ほとんどを注いでから自分も口にする。

生前は一緒に飲ませてくれなかったけど、まだ子供だって怒るか
もしれないけど、俺からの選別。

（アルバ、俺、元気にやってるよ。
もう、大丈夫）

心の中で頭を下げた。

* * *

帰りは徒歩がいいというリンカが先に歩いて行ってしまった後（城からそう離れていないと気がつかれた）、僕は墓を振り返る。

「アルバ師、あなたにはこっちの花のがいいですよね」

この墓は僕にとっても特別だ。

アルバはかつて守り仕えてくれた護衛隊長であり、僕にとっても武術の師匠であったから。

城を出てから道場を開き、孤児を育てていた話も聞いていたが、リンカがその一人と知ったのは本当に最近で、偶然だった。

柔らかく微笑んだ後、僕はまじめな顔で墓に頭を下げる。

「彼女を僕にください」

遠くから聞こえるリンカの声に呼ばれ、僕はそつと場を去った。

後には静かな夜と一つの酒に濡れた墓石だけが残り、城に帰った僕に珍しくリンカは素直に寄り添って眠ってくれた。

了

外伝1#弔いの花（後書き）

読了有難うございます。

これは改訂が完了する前から書いていた外伝です。

友人にはこれはこれでいいけど、本編の改訂を終わらせてくれとお約束のツッコミを受けました（笑）

城に来て、だいたい一年？いや、たぶん一ヶ月程度ですね。

外伝2#可愛い人(前書き)

激甘、微えろ？

たぶん15禁程度です

まあ、直接的ではないですが…

外伝2#可愛い人

キインと何かが弾かれる音がして、僕ははっと目を覚ます。

傍らには眉根を寄せた厳しい顔をしている少女が、雲しかない窓の外の空を睨みつけている。

少女は真っ白な女神の正装をしていて、背中の中程までようやく伸びた髪は白いベールと花冠で飾られ、その他は何の装飾もない。それでも、彼女　リンカは僕にとつて誰よりも美しい女性だ。リンカが女神の眷属でなくても、おそらく僕は同じことを思うだろう。

だって、リンカが美しいのは外見のせいではなく、硬い鉱石のような内面の強さからくるからだ。

僕と出会ってからゆっくりと磨かれたリンカという名の鉱石は、既に万人が軽く目を細めるほどには輝きだしている。

だから、僕は早くリンカを閉じこめてしまいたかったのだが。

僕はリンカの腕を引いて抱き寄せる。

だが、それでも僕の女神は険しい顔で外を睨んだままだ。

かすかにリンカの淡い桜貝色の唇が動くのが見える。

僕、以外の誰かに向けて。

「リンカ」

「黙ってる」

姿をどれだけ女性に見えるように飾っても、リンカの男言葉はとうとう今日まで直らなかつた。

二人で居るとき以外はきちんと使っているようだから、僕は特に

リンカを注意を促したことはないが、シャルダンや姫は度々指導しているようだ。

僕からすれば、気を許してもらえている気がするから、別にそのままでも構わないが、シャルダンが言うには叔母上に見せる弱みとなってしまうからだそうだ。

僕のためというのなら、行儀作法で時々リンカがシャルダンや姫といるのは構わない。

だが、今日ぐらいは僕だけを見ていて欲しいものだ。

「リンカ」

「ああ？……っ！」

無理矢理にリンカの顎を僕に向かせ、口を吸う。

張りつめているリンカの神経がだんだんと柔らかくなって溶けてしまうのがわかって、まだ僕は執拗にリンカの中を蹂躪し続ける。かすかに開いた目で僕がリンカの頬に暖かな紅が差しているのを確認すると、彼女の正拳が僕の鳩尾に食い込むのはほんの少しの差だった。

「い、いきなりするな！」

リンカは照れ隠しに笑っているが、しかし逃げずに僕の腕の中にいてくれるのは嬉しい。

以前なら、この時点で反フィートは離れているのだから、たいした進歩だ。

「そんなこといわれても」

リンカはとても可愛いからと僕が口にすると、リンカは首から上全部を赤く染め上げる。

「ば、か……」

リンカの振り上げた拳が軽く僕の胸に当たった後、珍しく彼女はそのまま腕を滑らせて抱きついてきた。

こんな風になってくれるまで、本当に時間がかかっているだけに、僕は嬉しくてリンカを抱きしめる腕に力を込める。

「バカップルがいる……」

低い虚ろな声でいうのは僕の信頼する幼なじみであり、時の第二大臣にまでなったシャルダンである。

その後ろで姫が温い微笑みを浮かべ、さらに後ろの影にカークが控えている。

「さっさと出てくればいいのに」

三人がいることを僕はわかってはいたけど、リンカが可愛い反応をしているのを、今日ぐらいは見せつけるのも悪くないと考えていたんだ。

「あーはいはい、式の前にあんまりイチャつかないの。」

リンちゃんのお化粧も落ちるわよ」

姫はリンカを気づかうように近づいてきたが、リンカが僕にしがみついたままなのを無理矢理にはがすつもりはないらしい。

最初から姫はリンカを気に入っていたようだけど、最近はずますますリンカを強く味方してくれるから、僕も助かる。

女性同士の問題に僕が手を貸すと、リンカのためにもならないから。

と、急にリンカが僕から離れて、扉の影に控えているカークの元へ駆けてゆく。

リンカは入口でカークと一言三言話してから、シャルダンを振り返った。

縋るような目で。

「シャルダン様、その……」

リンカが何を言いたいのかはここにいる全員がわかった。そして、そんなリンカを見て思うことも同じだろう。

「いいよ。」

カーク、行け」

「別にシャルに断る必要はないわよ。」

カークだって断れないって」

今にも泣き出しそうな、限界まで下がった眦に縋る瞳、それに見てわかるほどの信用。

どれをとってもひどくそえられる可愛らしさだ。

「たしかにそうだけど、お前らが言うな」

怒りたいような泣きたいような情けない顔のシャルダンを、僕は姫と二人で笑う。

これがいつもの光景で、ずっと続く姿だ。

そんな中で、リンカだけが笑っていないのは、彼女がシャルダンとカークにだけは自分の立場を弱く考えているから、笑うに笑えない

いのかもしれない。

僕の婚約者と決まった時から、すでにリンカは彼らの上にいるはずなのだけれど、それでもシャルダンとその執事に敬意を払うのは、シャルダンの人徳の成せる技ということだろうか。

「カークは、そんなことないと思います。

シャルダン様たちが居なかったら、たぶんお……私の頼みなんてあっさり断りますよ」

リンカは真剣な顔で言うが、頼んでいるときの自分の顔を鏡で一度見た方がいい。

あれで断るようなら、よっぽどの理由だろう。

困った顔のリンカを僕は招き寄せ、自分の膝に座らせる。

「リンカ、自覚が無いようだから言うておくけどね」

あんまり他の人に可愛い顔をしたりとか、可愛いことを言ったりとかしないでくれ。

抱きしめたくなくなってしまふから。

どう反応したものが困っているリンカの小さな額に、僕は軽く音を立てて口付ける。

「このバカップルはこのまま馬鹿親になりそうね」

「いやいや、わからないぞ。

ディルのことだから、子供に嫉妬するんじゃないか？」

「そうだったらそうだったで面白そう」

「……姫……」

長い長い鐘の音が聞こえたあと、姫がはっと気がついた声をあげた。

「あ、そうだ。」

「時間よ、二人とも」

「そうだ、それで呼びに来たんだよ！

急げっ！」

ひどく慌ててシャルダンが言う。

そんな二人をリンカと二人で笑い、僕は彼女を抱えたままですものように魔法を唱える。

今までいた僕の豪華な部屋から、一転して石の回廊が続く大扉の前にいても、リンカは驚かなくなった。

リンカの姿はどこにいても眩く見えて、僕は隣の女神に自然と膝を折る。

リンカは僕を見下ろし、満開の向日葵みたいに笑って言った。

「こういうのは一日一回だけぞっ」

「はいはい」

「はいは一回っ」

「はい」

よし、と満足そうに頷くリンカの手をとり、僕はその甲に口付ける。

それから立ち上がり、リンカの頭を胸に引き寄せ、旋毛にひとつ。

この儀式が終われば、リンカはやっと僕のモノになり、僕はやっ
とリンカのモノになれる。

その誓いをたてる扉が重い音を立てて開いてすぐ、祝福の歓声が
僕らを包み込んだ。

了

外伝2#可愛い人(後書き)

読了有難うございます。

王子とリンカの結婚話はお気に召しましたでしょうか？

なかなかゴールにたどり着かない二人を改訂中に、くっつけてみた短編でした。

(当然、友人からは本編の催促がありました(笑))

書いた年に、友人が式を挙げたり、私もプロポーズされたりと、今になるとイベント満載の年に書いたなあ……

外伝3 #ある日常(前書き)

王子とリンカがいちゃついてると、城の生活を書きたかったとい
うか…

外伝3 #ある日常

俺の前には肩口にかかる黒髪をひとつにまとめた少年がいる。

歳はだいたい十三で、身体に合わない大きめの兵士服のパンツの裾を折り、上には袖の長くて白い薄手のシャツを着ている。

少年は両足を斜めに開き、軽く握った拳を上げて、俺に向かって拳闘の構えをしている。

その上、挑戦的な少年の強い目は自信ありげに笑っている。

「はあっ!」

鋭く打ち込んできた少年の一撃を辛うじてかわした俺が手にしているのは稽古用の木刀だが、それを動かす間もなく、少年が回し蹴りを放ってくる。

当たる、と俺が身構えると、寸前で少年の動きが止まる。

「……リンカ様」

「やる気ねーなら、俺の勝ちでいいな？」

にやりと笑った少年　いや、リンカ妃の言葉に、俺は仕方なく頷いた。

「負けました」

今のこの人を女性と見抜くどころか、まさか近日王位継承するデイルファウスト王子の妃とわかるものは少ないだろう。

正装している時と今の姿では、リンカ妃はあまりに違いすぎる。正装している間はまさしく女神と見紛う威厳と美しさがあった、

誰でも傳かすにはいられなくなるのだ。

「おっけー。」

「んじゃ、賭けは俺の勝ち」

晴れ晴れとした表情で俺に背を向け、そばのベンチに置いていた兵士用の上着を取り上げるリンカ妃に、俺は声をかける。

「賭けなんて、最初から成立しませんよ、リンカ様」

「そんなことないだろ？」

だって、おまえ仮にも俺の護衛隊長なんだから、それなりに強いはずだし。

それに勝てたら外出して良いって賭けは成立するじゃねえか」

確かに俺は最初に出会って、リンカ妃から外に出る条件を持ちかけられたときにそう言った。

「それは貴方がここに来たばかりで実力を知らなかったからです。

これだけの力があれば、そりゃ護衛もいらなとおっしゃいますよね」

正直、もしも彼女が女神の眷属でなく、本気で対峙したとしても、今の俺ではリンカ妃に掠り傷一つ負わせられないだろう。

それぐらい、この人は強い。

元は拳闘士として日銭を稼いで生活していたというが、納得もでききる。

振り返ったリンカ妃が、快活な笑いをこぼす。

「あはは、でもおまえ最初から本気できてくれたじゃねえか。」

だから、俺も本気で返してる」

「嘘でしょう。」

リンカ様はまだ手加減しているじゃないですか」

「おまえだって、まだ手え抜いてるじゃねえか」

そうは言われても、こちらにも万が一でも本気を出せない理由がある。

「そりゃあ、リンカ様に傷でも負わせようものなら殿下に半殺しにされますからね。」

いや、半殺しでも甘いでしょ。

あの殿下なら間違いなく、瀕死寸前まで追い詰めますよ」

「人望無えな、おい」

「もしも私が王妃方の人間なら間違いなく焼き殺されるでしょうね」

笑っていたリンカ妃が笑いをおさめ、空を仰ぐ。

デイルファウスト殿下と仕事をした縁で知り合ったというから、

おそらくその時のことでも思い出しているのだろう。

いや、それともこちらに来てからの事件のほうだろうか。

「殿下は仲間や自分を慕うものにはとても優しい方ですよ」

一応のフォローをする俺に、リンカ妃は諦めの息を吐き出す。

「優しい？」

あれで？」

「リンカ様がそう感じられるのは、いつも逃げようとなさるからでしょう」

「別に逃げようとしてるわけじゃねえんだけどな。」

その、一緒にいるとなんていうかこっぴどくかしいんだよ。

それに、あんなの連れてたら落ち着いて商売できねえじゃねえか」
わずかに頬に朱が混じるのはデイルファウスト殿下のことを思い返しているのだろう。

俺もそれほど多くを見ているわけではないから知らないが、明らかにデイルファウスト殿下のリンカ妃への愛情は度を越している。

ごまかすように、リンカ妃が俺に背を向ける。

「さあ、今日も稼ぎに行くぞ！」

そもそも今では生活するために稼ぐ必要もないのに、何故リンカ妃がでかけようとするのかは、俺にはわからない。

「なんでそんなにお金が欲しいんですか？」

リンカ様が一言殿下に言えば、いくらでも」

塀の蔦の割れ目に手を這わせ、小さな出入口を探すリンカ妃は、小さく笑った。

「あんな、それは俺の金じゃない」

そうは言うが、此処に来た当初ならばともかく、既にリンカ妃が女神の眷属でないと疑うものもいなければ、王族ではないと蔑むものもごく一部の対立派だけしかない。

「ですが、あなたは」

「仮に女神の眷属だろうが、そんなもんは俺には関係ない。

金は自分で稼ぐからこそ意味があるんだよ」

俺が尚も疑問を投げかけようとすると、リンカ妃は片手で俺を追いやる仕草をする。

「あーもううつるせえよ。」

これは俺が自分で稼がなきゃ意味がないんだよっ」

リンカ妃は俺にとって、本当に分からない人だ。

サフラン姫はともわかりやすいというが、俺には今もまだよくわからない。

「んじゃ、約束通り夕食までには戻るから、それまでデイルを誤魔化しておいてくれよな」

わかるのは、リンカ妃がとてもデイルファウスト殿下を大切にしている、周囲にいる俺や他の兵も信頼してくれているということだ。信頼している割に、こうしてひとりで出掛けたがるのはやはり腑に落ちないのだが。

小さな子供一人ぐらいしか通ることの出来ない通用門からリンカ妃が姿を消すまで、俺はじっとそれを見つめていた。

俺には此処を通ることを出来ないから、別なルートで城下へ出てリンカ妃を探さなければならぬ。

戻ってはこないだろうなとさっさと諦めて、俺は鍛錬場の出口へと身体を向けた。

「相変わらず、頑固ですね」

「で、殿下!？」

いつからそこにいたのか、デイルファウスト殿下が戸口で寄りかかり、リンカ妃の消えた方向を見ている。

「自分の大切な女性が出ていったことを知りながら、何故止めなかつたのだろう。」

「普段の溺愛ぶりから考えると、ディルファウスト殿下のこういう点も俺にはよくわからない。」

「あー何も言わなくていいですよ。」

「わかっていますから。」

「リンカが城で大人しくしていられるなんて、僕は最初から考えていません。」

「確かに、婚姻ぐらいでつなぎ止めておけるような女性なら、ディルファウスト殿下がここまで溺れることもなかったかもしれない。恐れながらも、おそらくはディルファウスト殿下も俺と同じ思いを抱いているはずだ。」

「リンカ妃はいつも城下で何をしているのが心配だが、その反面で何をしてくれるのが楽しみでもある。」

「びっくり箱のような女性だとディルファウスト殿下自身も言っていたが、まさにその通りだ。」

「お怒りにはならないのですね。」

「ふふっ、リンカが大人しくしているなんて、貴方も想像できないでしょう?。」

「はあ。」

「はいともいいえとも答えるわけにもいかず、曖昧に返す俺をディルファウスト殿下は急にきりりと政務と同じ真面目な顔を見た。」

「護衛は必要在りませんけど、一応見ておいてもらえますか。」

「はっ。」

俺は儀礼通りにデイルファウスト殿下に頭を下げ、そのまま予定通りにリンカ妃を追いかけようとする。

その背に、デイルファウスト殿下のお声がかかる。

「ああ、服は着替えていってくださいね。

剣も置いていってください。

短剣一つで十分でしょう」

とても意外な言葉に俺は足を止めて、デイルファウスト殿下を顧みた。

「え!？」

いや、それではリンカ様に何かあった場合に対処しきれないと

「君は拳闘も最近は稽古しているんですね。

だったら、なおさら、彼女の拳も見ておく方が良い。

良い勉強になりますよ」

確かに俺はリンカ妃の護衛隊長となって以来、拳闘の稽古をしている。

だが、城で行ったことはないし、デイルファウスト殿下はどこでそんな話をきいてきたのだろうと眉をひそめる。

それに後半の言葉の意味は、仕事内容とは明らかに違う。

「……それは、リンカ様を守るというためではなく……?」

「そう。」

君が強くなって、リンカを守れるように成長するためです」

余程俺は困惑した顔をしていたのだろう。

デイルファウスト殿下は、とても楽しそうな声を上げて笑った。

「早くリンカより強くなつて、彼女を守れるようになってください
ね」

「は、はいっ！」

俺はデイルファウスト殿下に一礼してから、すぐに外ではなく、
詰所へと足を向けた。

リンカ妃は足が速いから、少しでも迷えば発見が遅れ、その間に
カスリ傷一つでもあれば、デイルファウスト殿下の報復も恐ろしい。
詰め所にいる仲間への挨拶もそぞろに、俺は防具と剣を外すと短
剣だけを身につけ、すぐに城下へと降りた。

* * *

リンカにつけた若い護衛隊長の背中が遠ざかるのを見送り、僕は
城内へと戻る。

廊下を急ぎ、西の塔へと足を向けるとそこには、この城で魔術に
おいて一番信頼できる女性がいるからだ。

西の魔女と呼ばれる女性の部屋を軽くノックする。

返答はないが、今日はシャルダンも来ていることだし、おそらく
部屋にいるだろうと、僕は扉を開けた。

部屋の中には床まで届くひと繋ぎの薄い水色のスカートを纏い、
同じ色の布を頭にかけた女性が、どこか呆けた様子で窓の外を見て
いる。

スカートにもヴェールにも、端は白と僅かな金色の糸を使ったレ
ースで彩られているようだ。

窓と女性の間には人ひとり分のスペースがあつて、微かに埃が舞

「ええと、とりあえずこれに座ってください。

すいません、掃除してなくてっ」

「いや、僕の方がお邪魔してしまっただんですから、そんなに緊張しないでください」

僕が立っているといつまでも西の魔女が落ち着かないのはわかっているが、しばらく見ていたいと思うてしまう面白さだ。

だが、リンカが城下で何をしているかの方が気になるから、僕は出された椅子に大人しく腰を下ろした。

僕の目の前にいる西の魔女は、テーブルの上に乗せた魔法陣の描かれた布を端から持ち上げるのに失敗して、その上に乗っていた粉をぶちまけている。

「あ、ああ、やばっ！」

「あの、本当に落ち着いてください、西の魔女殿。

僕は何も見ていませんから」

僕の一言で、それまで落ち着きなく動き回っていた西の魔女は、ぴたりと動きを止めた。

「な、何もって」

本当に面白い、と心の中で僕はほくそ笑む。

「ええ、いくら僕でも人の情事を覗き見るような趣味は」

「そんなことしてませんっ」

本気で慌てた西の魔女の顔は、高熱でも出したように赤く染まっている。

「ああそうなんですか？」

「そりゃちよつと流されそうでしたけどっ、仕事中にそんな不謹慎なっ」

「ふふふ、そうですね。」

西の魔女殿は真面目ですから。

だから、僕も貴方を信用しているんです」

西の魔女はシャルダンの執事であるカークがもつとも信頼している魔女であり、そして彼が主人と僕ら以外に唯一大切にしている女性だ。

王立学院で出会ったと西の魔女から聞いているが、彼女の卒業後にカークが彼女を賢者に弟子入りさせ、ここに就職できるようにと手を尽くしていたのを僕は知っている。

シャルダンには隠しているようだが、西の魔女から話を聞いて、それから少し調べたら簡単にそのことは判明した。

だからといって、僕はその情報をどうこうするつもりもない。

「光栄、です」

「そついうわけで、用件はわかりますね」

漸く落ち着いたのか、西の魔女は僕の言葉に深く頷いた。

「姫様、ですわね」

すでにリンカが城を抜け出して城下を走り回る回数は数え切れな
い程で、その度に僕が来るから西の魔女にもすぐに合点がいつたらしい。

「はい、リンカに西の魔女殿の友達を貸してくれませんか」

「危ないことになってないといいですね」

もう一度頷いた西の魔女は、本気でリンカを心配している表情でため息を吐く。

「それは大丈夫でしょう。」

女神の眷属の本質は、誰からも愛されると言うこと。

何者であっても、リンカに危害を加えることはできませんよ」

西の魔女は僕と話をしながら、後ろの積み重なった道具の中から布の束を取りだし、数枚の中から選別する。

どうして、そこに無造作に召喚用の魔法陣があるのかは西の魔女以外の誰にもわからない。

だけれど、それらはすべて西の魔女だけが扱える魔法陣で、彼女が呼び出す友達の数々なのだ。

僕もいくらも魔法士も魔法使いも見てきたし、それなりに腕に自信はあるつもりだ。

けれど、西の魔女のこの魔法を編み出す力、そしてそれを使いこなす技には適わないと思う。

「エルとミューがいいかな。」

エルはイイ手助けが出来るでしょうし、ミューはこっそりと彼女に忍ばせておくことが出来ますから」

西の魔女の言うエルとミューがどんな姿で何が出来るのか、詳しいことを僕は知らない。

リンカが言うにはとても可愛らしくて憎たらしい小動物だというが、リンカと西の魔女以外に姿が見えたものはいない。

魔法陣に粉を振りかけた西の魔女が長い長い詠唱を始めると、言

葉と共に徐々に魔法陣が光を強くしてゆく。

「……まあ、リンカのことだから心配ないと思うけど……」

独り言のように呟いた後で、西の魔女は何かに気づいたように僕を見た。

「あ、す、すいませんっ」

それがリンカを呼び捨てての非礼を西の魔女が気がついたからと知っても、僕には別にどうでもいいことだ。

「いえ、いいですよ。」

リンカと親しくしていただける方が僕としても助かります」

「その、リンカが、じゃなくて、リンカ様が様をつけたり、敬語を使うとお怒りになるのですっ」

リンカが怒りながらいう様子が目に浮かんで、僕はくすりと笑いを零す。

「あはは、はい。」

よくわかってますから」

「も、申し訳ありませんっ」

「だから、気にしないでくださいって。」

「どうか、これからもリンカをよろしくお願いします」

「……もちろんです。」

私にとっても大切な友達ですから」

魔法陣の光が消えた後、西の魔女がリンカの居場所を教えてくださいるので僕は部屋を出る。

あまり長居をしてはカークに余計な気を揉ませてしまうことだろう。

普段なら何も言わずに見送る西の魔女が、珍しく僕を呼び止める。

「リンカを怒らないでください。」

彼女なりに、恩を返そうとしているんです」

僕に、という言葉を飲み込んだらしい西の魔女に、僕は柔らかく微笑む。

もちろん、わかっているからリンカの好きにさせているのだ。

「ええ、わかってますよ、西の魔女様。」

それと、シャルダンは夕食もここでとって行きます、とカークに伝えておいてくださいね」

「え！？」

「ああ、もう必要ありませんね。」

じゃあ、ここには人払いでもかけておきます。

僕の大切な仕事をしているということだ」

「な、な、え、カーク！？」

深々と隣で頭を下げる恋人に驚いている西の魔女を残して、僕は彼女の部屋の扉を閉めた。

そのまま城の正門へと足を進める僕は、あえて人の通らない道を選んだ。

リンカと逢うのに伴など邪魔以外の何者でもないし、それにこの国で僕とリンカが揃っていて恐れる敵などいない。

いるとすれば刻龍だけが、彼らは今おいそれとこちらに来てい
る状況ではないはずだから、本当の意味で一片の心配もないのだ。

だから、僕はゆっくりと歩いて、西の魔女に示された場所へと向かうことにした。

* * *

僕が城下を歩くだけで、道行く人たちがリンカの居場所を教えてください。

それはリンカがこの国に受け入れられているという証拠だと僕は思っている。

城にいるよりもこの方がよっぽど安全だということもあるから、僕はリンカが城下に出ることを止めないのだ。

実際、この国で僕とリンカ以上の強さを持つものはいないし、世界中探しても僕らに敵うのは刻龍以外に存在しないはずだ。

大通りを歩きながら、僕は花売りから籠ごとの花を買い取る。

もちろん、この花はリンカを飾るためのものであり、リンカはこういう簡素で素朴なプレゼントを喜ぶことを僕は知っている。

要は高価な物は売れるという意味で喜んではくれるが、純粹に喜ぶのは金のかからないようなものほどいいということだ。

王族に迎えられた今でもリンカのその本質は変わっていない。

遠目に僕を見つけたリンカがあからさまに逃げようとする姿に、僕はあえて大きく手を振る。

もちろん、リンカが嫌がると知っているの行動だ。

僕はリンカの姿も行動も表情のすべてが好きだから、つい苛めたくなってしまうんだ。

「あ、リンカさん！」

逃げるリンカと追いかける僕を国民はいつも微笑まし気に眺めてくれる。

もちろん、僕にはリンカが逃げる方向など聞かなくてもわかるが。

「すみません」

「はははっ、今日も大変ですね。

殿下、おひとつどうぞ」

「ありがとうございます」

投げ渡された林檎一つを受け取り、僕はポケットから一銅貨を取り出して、店員に投げ返す。

林檎一つには少々高いかもしれないが、釣りといっても微々たるものだし、元は国民の金なのだ。

民の間で巡る方が良いに決まってる。

「まいど！」

「ガンバレよー、殿下！」

「リンカ様はそちらの角を曲がって行かれましたよ」

行く先々の人の案内に導かれて、僕はリンカを追いかけるが、当然ながらそう簡単に彼女には会えない。

リンカはもともとすばしっこいから、いろいろな情報を含めて僕は先回りをして、どこかへ追い込む方法をとるしかない。

ここに来てから、リンカが城下を把握するのは三日もかからなかったから、僕はもともと警備隊長に期待はしていない。

そもそも、僕はリンカとのこの追いかっこが好きだから、そういう意味でも好きにさせているのだけだ。

今日はどうやってリンカを追い込もうかと、僕は軽く走りながら考える。

「おまえ、仕事の邪魔っ」

と、急に前に子どもがひとり飛び出してきて、そのまま僕につっこんできた。

間違いようのない出会った頃と変わらないリンカの姿は、僕を倒れさせるには十分だ。

一瞬見とれた僕だったが、リンカが怪我をするのは本位ではないので、とっさに唱えた短い術式で自分とリンカを風の力で包み込む。魔力風で僕の手元の籠から花が飛び出し、辺りにまき散らされる様はとても綺麗で、降ってくる色とりどりの花に飾られたリンカは眉を寄せて、口を尖らせた不機嫌な顔で僕の腕の中から見上げてくる。

「はははっ、これは珍しい。

まさか自分から飛び込んで来るとは思わなかった」

驚きと喜びで、僕は思わず素の言葉が溢れる。

もちろん、リンカは僕を倒そうと思って体当たりをしようとしただけなのだが、そんなもので僕が倒れると本当に考えていたのだろうか。

「いつもいつもいつもいつもーっも、おまえはなんで俺の邪魔するんだっ！」

「僕はリンカを探していただけです」

「それが邪魔なんだっ」

「ふふふ、約束通りに危険な仕事でなければ問題ないハズでしょう？」

僕の腕の中、リンカの気配が鋭さと戸惑いを緋い交ぜにした気配に変わる。

呼ばれて困ると言うことは、つまり危険な仕事に手を出しているということだ。

僕は以前から、リンカに城下を好きに動きまわっていいと話しているが、ただし決して危険な事に首をつっこまないという条件付きだ。

もちろん、リンカがそれを守れると、僕は本気で考えていたわけではない。

リンカは優しいから、おそらく危険とわかってても、誰かのために命を張らずにはいられないだろう。

それはリンカの美点であり、欠点でもある。

「別に、危険じゃねえよ。

俺にとつては」

「確かにリンカの腕なら大抵の荒事は問題ないでしょう。

ですが、言っただけです。

身体に傷はつけるな、と」

リンカは僕がどれだけリンカを愛してるか、これだけ一緒にいて気がついていないはずがなく、ぎくりとその身体がこわばるのが抱きしめている僕にはわかる。

リンカの髪についた花の一つを手にしながら、僕はいつものように力を紡ぐ。

「 風の時 時の風 」

「うわ、待て待て！」

俺まだ仕事の途中なんだよ。

せめて、報告だけっ」

慌てたリンカがもがいているけれど、そう簡単に僕が逃がすわけがない。

「女神に愛されし者 その腕に迎え入れられん」

僕らを魔力の風が包み込み、それを振るう精霊王 ウィドーが
楽しそうに僕らを運ぶ。

震えているリンカは僕にしっかりとしがみついている、この時以上
に彼女が僕を頼ってくれることなどないだろう。

それほどに魔法を恐れる理由は、婚姻を結んだ今でも教えてはく
れない。

どれだけ近づけば教えてくれるのかもわからないが、無理に暴く
つもりもない。

もうリンカは、女神は手の内にあるのだから、これからいくらで
も機会はあるだろう。

だから、僕はいつまでも待つつもりだ。

「着きましたよ」

震えているリンカの耳元に、僕はそつと囁く。

そうしないと、彼女は移動が終わったことにすら気が付かない。

顔を上げたリンカは、泣きそうな顔で僕をみる。

周囲を確認しようとしてもしないのはこの術式を使うのが初めてでは
ないからだ。

今僕らがいるのは大神殿の最奥で、世界で一番リンカにとって安

全な場所とされる。

リンカには檻と話してあるが、ある意味ここ以上に安全な場所はない。

ここは世界で一番色濃く女神の力が残されているから、リンカは思う存分その力を振るえるはずなのだ。

もっとも、未だその力に目覚めていないリンカに自覚はないだろう。

本来ならありとあらゆる魔法はこの場所に届かない。

どれだけの術式を組もうが、それは世界に寄るものであり、女神とは異質の力であるが故に神殿の中にまでは届けられないのだ。

僕は此処にくるためだけの術式を完成させることができたのは、リンカと西の魔女の助けがあればこそだ。

この術式にはリンカの存在が必要不可欠とされるが、僕にとっては願ってもない。

西の魔女によれば、僕の系統システムも関係しているという話だが、それ自体についてはよくわからない。

知っているのはごく一部の信頼できる者だけだが、女神の眷属を守護する木霊　それが、僕の系統システムと示されている。

「なんで、いつもいつも邪魔するんだよ。

俺はおまえに心配されるほど弱くなんかないぞ」

「知っています。」

ただ、僕と一緒にいたいただけですから」

本当ならいつまでもこの腕の中にリンカを抱いていないと、僕は不安で仕方がない。

リンカの心が誰かに盗られてしまわないか、リンカがどこか遠く

へ行つてしまわないか。

元々が無理矢理に国まで連れ去り、無理矢理に系統を調べさせ、無理矢理に婚約まで持ち込んだのだ。

ここまで無理強いされて、いつリンカが僕の手元から逃げ出したつておかしくはない。

僕はここに来てからリンカが伸ばしている髪についた花を落としながら撫で、留めている髪紐を取り除き、その髪に口づける。

出会った頃の少年そのものだった時はごわついていた固かった髪も、いくぶんか柔らかくなっている。

リンカもその通りに心が溶けていてくれればというのは、僕の我侷すぎる願いだろうか。

触れるとまだ籠もる熱を伝えてくるリンカの髪を梳きながら、僕はまっすぐにリンカと視線をかわす。

「……デイル？」

「髪が焦げていますね。」

「せつかく伸ばしているのに、もったいない」

「悪い。」

「避けたつもり、だったんだけど」

思いの外、勢いが強かったとリンカが申し訳なさそうに謝罪してくる。

リンカが悪いわけじゃないし、リンカを怒っているわけじゃない。ただ、自分のいない場所でこうしてリンカの一部が失われるだけで、僕はひどく胸が締め付けられるんだ。

術でその焦げた部分だけを切り払い、僕はリンカの頭を強く自分の胸に押しつける。

「お、おい、デイル……っ」

以前なら僕がこうするとリンカは本気で嫌がっていたが、今では戸惑いしか返ってこない。

それはとても嬉しい。

嬉しいのだけど、それ以外は以前と変わらないリンカの行動が不安で仕方ない。

好かれていないとは思っていないが、僕らの想いは同じではないだろう。

リンカはきつと僕がいなくても困らないし、きつと思いのままに翼を広げて飛んで行ってしまっただろう。

刻龍に奪われても、リンカひとりであれば容易に逃げられる。

だけど、誰かひとりでも足かせとなってしまうえば、簡単にリンカは己を捨ててしまえるんだ。

僕はそれがいつも怖くて仕方ない。

「おまえ、意外と臆病だよな」

僕の背中に手を回し、リンカが自然と抱きしめてくれる。

こうしてくれるようになるまでずいぶんと時間はかかった。

それでも、誰もいない時でなければ、自分から近づいてきてくれないのだけれど。

「俺、デイルのこと嫌いじゃないし、この国も大好きだ。

だから、どこにも行かないぞ」

ここにいるよ、とリンカのそんな言葉ひとつで安心してしまう僕は単純だと思っ。

リンカの言葉ならこんなにも信じられるのに、なのに僕はこの手からリンカが離れてしまわないか、いつも不安でしかたなくて。

女神の眷属だからじゃない、僕はリンカという存在そのものが愛しくて、なくしてしまうことがとても怖い。

僕は王族として、この国の王になると決めた日から弱点など作ってはいけないとわかっていたのに、リンカは容易にその場所に入り込んできた。

その強さを信じていても、それでもいつかはと想像してしまう。

「ほら、そんな泣きそうな顔すんなって。

女神に笑われるぞー？」

明るい笑い声を立てるリンカの額に、僕はそっと口づける。

「な、デイ、デイル……っ」

「安心、させてください」

僕は慌てるリンカの染まりゆく頬に、震える瞼に口づけ、そして淡い桃色の花卉で紅を引いたような小さな口に、自分の口を近づける。

「ちょっと、まだ昼だしっ、それにここはっ」

この後の展開を予想しているリンカを、小さく僕は笑う。

その僕の笑いが弱く見えているのか、逃げ出そうとするリンカが本気でないのはすぐにわかった。

「リンカの家ですよ」

「神殿だっ！」

勢いのままに口を重ね、僕はリンカが気づかぬうちにベッドまで

移動する。

リンカの背中にシーツの感触が触れて、彼女は僕の首に両腕を回してきてくれて。

その気になつてくれたかと、安堵した僕が離れた一瞬。

「ごめん、デイル」

僕の鳩尾に鋭い一撃が入り、腕を緩めた隙間からリンカは逃げ出してしまった。

そうとわかつていたとしても僕は避けなかつただろうし、魔法を使ってリンカを追い込みたくもないから、結局僕は黙ってその拳を受けるしかない。

そうして、嫌われたくないという気持ち先が先に立ち、いつも僕はリンカが逃げることをいつも許してしまう。

「その……よ、夜なら構わないから、デイルのトコにちゃんと戻るから。」

だから、昼は俺の好きにさせてくれ」

部屋を出る寸前に振り返ったリンカが顔を真っ赤にして言っ、あつという間に僕の視界から消える。

精一杯の照れを抑えて、言ってくれたのは明らかで、天蓋もないベッドで仰向けに倒れ込んだ僕は、リンカの部屋の高い高い天井を見上げた。

ここだけに限らず神殿にはいたるところに女神の影があつて、この天井に装飾されているのも女神と女神を護る精霊たちの姿だ。

古い細工師たちが彫り込んだと言うそれは今でも遜色なく目の前にある。

だが、小さい頃ならば見とれた光景も霞み、今では僕の目の前にさっきのリンカが焼き付いて離れない。

「ふふっ、今夜は覚悟しておけよ？」

約束通り昼間は好きにさせてやるけど、夜は絶対に離してやらな
い。

僕がそんな決心をしたとき、城下のどこかでリンカがクシャミを
したとかしないとか。

リンカの気配が強くある部屋の中で、僕は目を閉じる。

女神の眷属は世界の宝だけど、リンカは僕の宝だから。
絶対にこの手から逃さない。

僕は僕の女神にそう希いながら、穏やかな午睡に身を委ねた。

了

外伝3 #ある日常(後書き)

読了ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0682i/>

Routes 1 -リンク-

2011年9月8日16時20分発行